女鑑

明治三拾六年三月一日發行

口繪

重要目次

第拾叁年第五號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞銅牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉
錫蓋附 乳白硝子器入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい●

ねり製 定價 大鑵 二十錢 小鑵 十二錢



水製 定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入



すみれ白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成踏體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかににきび、そばかす、あせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の悪臭を退け不浄を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉●

鑵詰 緑、藍、紅彩蝶香ひボックス入 三錢
六錢五厘 袋入 壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の儀は方今歐米諸國に專ら賞賛せる香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髪洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髪のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.

WASHING POWDER

壽美禮あらい粉



製造本舗

東京東兩國
横網町一丁目

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

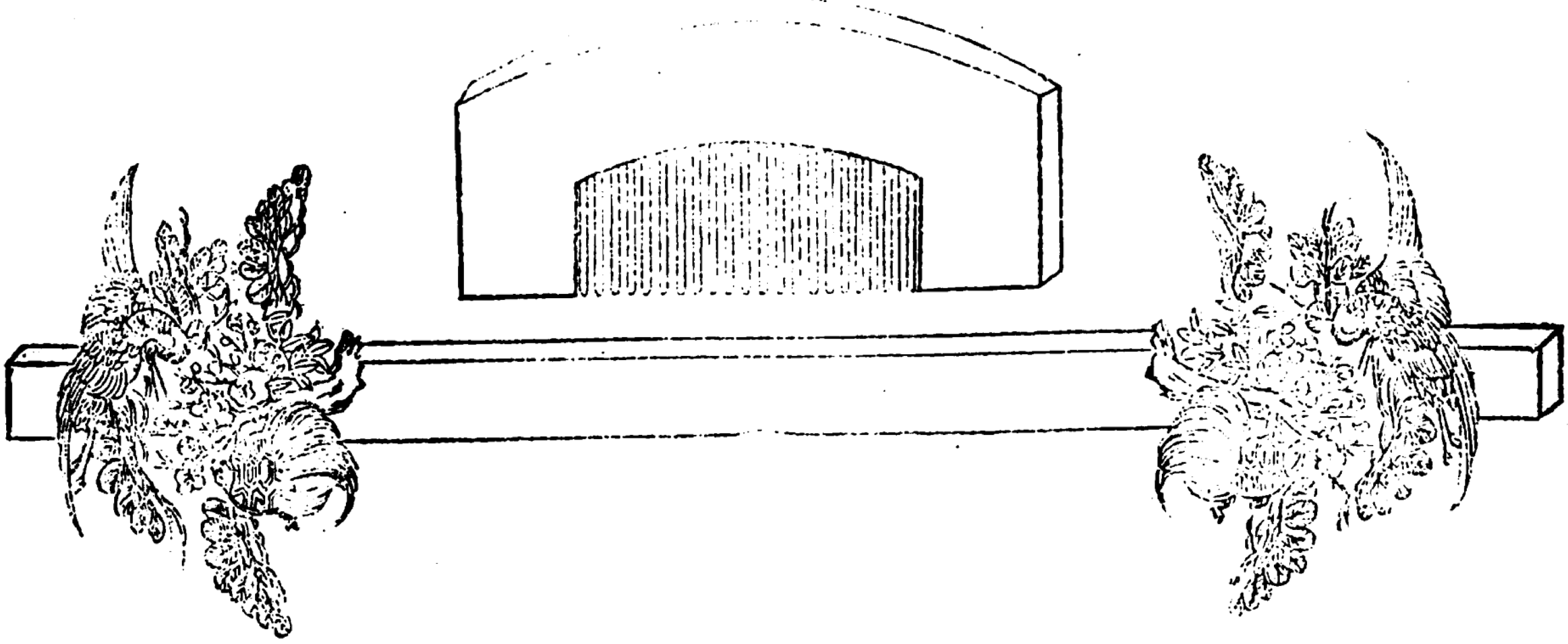
女鑑 第拾柒年第五號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

明治三十六年二月廿八日印刷
明治三十六年三月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木艮雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話 新橋 特八八番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御祝儀用櫛笄

上圖櫛笄の材料は鼈甲を以て随一となせど鼈甲の中にも品質の佳からざる物少からず此品は鼈甲中の最良質を精選して良き工の手に成りたる物なれば透明にして狂を生ぜず浮を出さず幾久しく御道具となる可き逸品なり

本鼈甲製 一組之價【金三十圓 五十圓 七十五圓 一百圓 百五十圓 二百圓 二百五十圓以上

四方張製 一組之價【金八圓 十圓 十五圓 十八圓 二十圓 金二十五圓 三十圓 三十五圓以上

右の外御婦人裝飾用品一式時々の流行に魁け新意匠の物品各種取揃へ居候間何卒御來車の上現品御高覽の榮を賜り度候市內は電話又は葉書にて御一報次第各種取揃へ貴覽に可供候地方より御注文の節は御用品詳細に御認め代金御送りに被下候へば御注文に應じ多數の內より精選仕即日小包郵便にて御送り可申候尤も御都合に依り代金引換へ小包應用致し御便利御取扱可申上候交換日數は市內一週間地方は里程の遠近に不依三週間以內は代金又は他品と御交換可致候

東京市京橋區尾張町

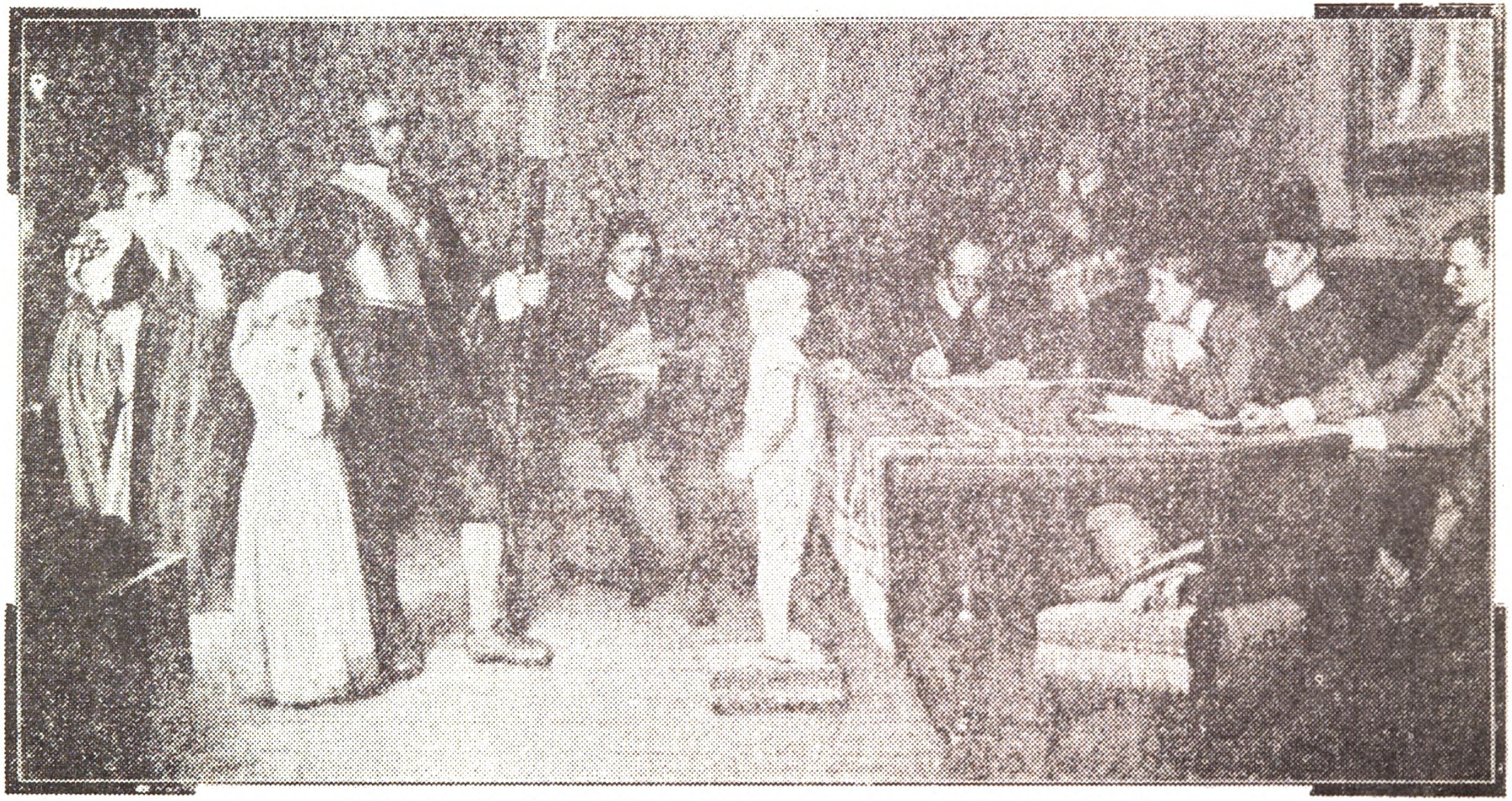
白牡丹本店

店主 松田幸治郎

（電話新橋五百五拾壹番）



故小松宮彰仁親王殿下最近御肖影



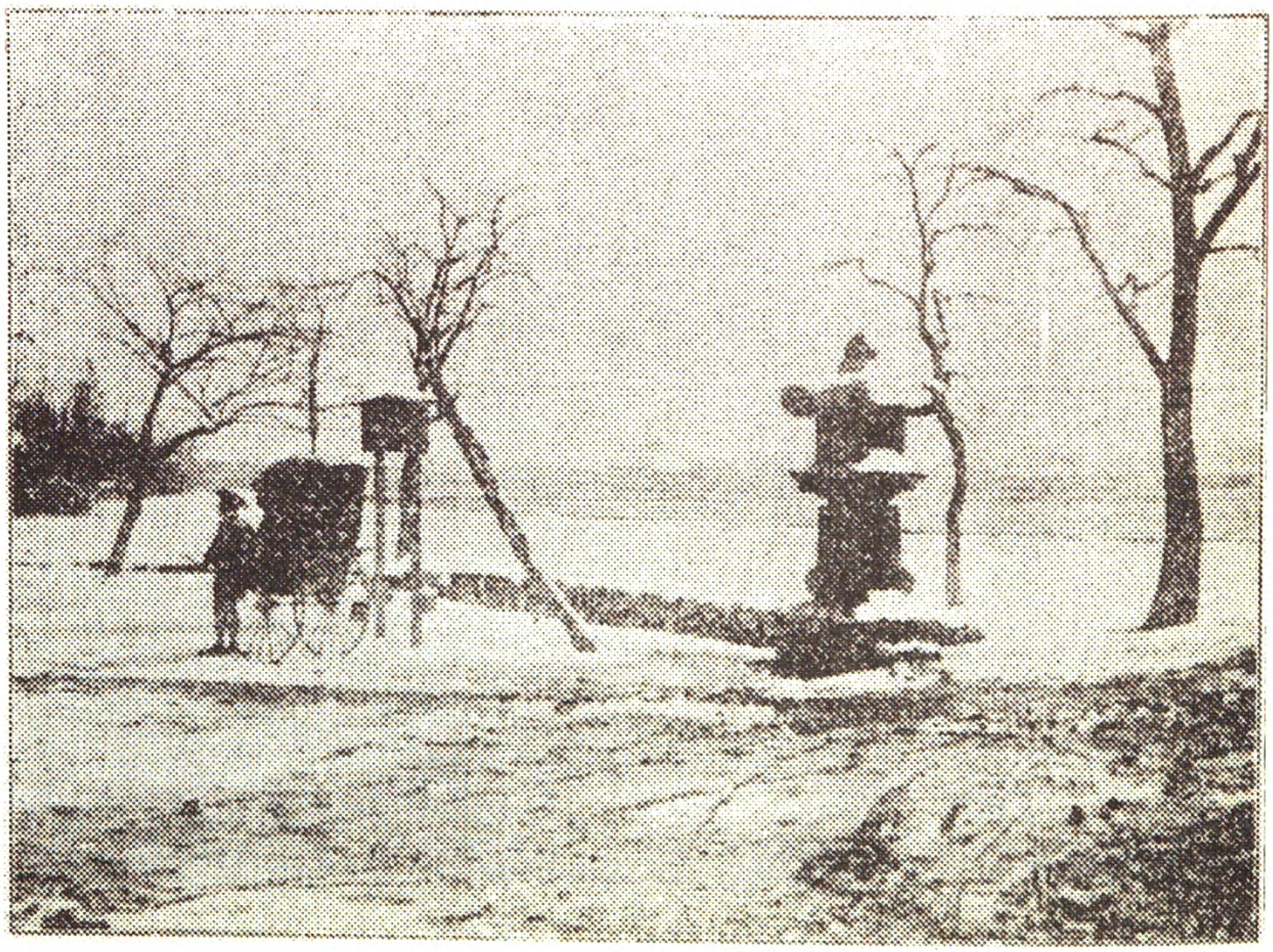
英國畫伯エームスの名畫（雜錄參看）



清國風俗喫煙の圖



上野公園摺鉢山の雪景



雪中の不忍池畔



杉田妙法寺の梅

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

裁縫科附屬手藝品
綿細工（果物、鳥類 動物、止絵法）自宅教授 通信教授
規則書入用ノ方ハ郵劵三錢送レ
岡山市下之町 **矢吹綿細工教授所**

改正 **圖書目錄** 製本出來
御入用の方は貳錢郵劵封入申込あれば送呈す
東京築地二丁目二十一番地
株式會社 **國光社**

女子計算員募集
廿五歳以上卅五歳以下 **貳拾名** 申込三月十五日限
卒業期四ヶ月卒業後會社商店へ紹介保證す
東京市神田區裏猿樂町四番地
私立 **女子計算員養成所**

驚林軍醫總監發明

りうまちす根切 梅毒根切

複方克快丸

半劑試み大効なければ決して服す可らず
◉五劑三圓五十錢一劑一圓五十錢送四錢
五年十年長病二劑服し全快す
複方克快丸其効驚くべし克快丸にて三倍す
責任調劑：順天堂合資會社長：楠木彌・

本店東京市淺草區なみ木町
支店大阪市高麗橋松屋町通

順天堂合資會社

全快禮狀時に新聞掲載す……一劑七十五錢半劑卅五錢

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京女學館講師 國分操子著
日用寶鑑 **貴女之栞**
套入正價金一圓八十五錢 郵稅二十錢
和裝全二冊 正價金壹圓六十五錢

龜屋主人 杉本新造著
增補日用 **西洋料理法** 附 支那料理法 玉突指南法
洋製全一冊 正價金四十錢 郵稅六錢

三輪田女學校主 日本女子大學敎授 三輪田眞佐子著
女訓之栞 和裝美製
全一冊 正價金四十五錢 郵稅六錢

落合直文著
女子雅文敎範 和著美製
全二冊 正價金七十錢 郵稅十錢

文學博士 小杉榲邨校閱幷序
女子成立學校講師 齋藤園子編纂
女子敎科 **包結之栞**
和裝美製 全二冊正價金九十五錢
套入美製 正價一圓十錢 郵稅十錢

發行所 東京日本橋區通一（電話本四一四番） **大倉書店**

治庖會本部敎授赤堀峰翁 安西こま子共著
治庖會 **日本料理法** 附 什器圖解挿入 鰯の料理法 豚肉日本料理
和裝全一冊 正價金四十五錢 郵稅六錢

女子高等師範學校敎授關根正直著
華族女學校敎授 坂正臣著幷書
筆のゆきかひ 和裝美製 全二冊
各一冊 金四十錢 郵稅六錢

小野鵞堂書
增訂 **女子手紙之文** 和裝美製
全一冊 正價金四十錢 郵稅四錢

華族女學校敎授 坂正臣作幷書
女子習字 **文の山口** 和裝美製 全二冊
各一冊 三十五錢 郵稅六錢

落合直文著 小野鵞堂書
女子消息 **雁のゆきかひ** 和裝美製
各一冊 四十錢 郵稅六錢

新奇發明 増酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的醸造化學作用の一大發明新法なり（附錄）腐敗酒直し法、味淋酒醬油參倍增法、香竄葡萄酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、速造法、燒酎倍增法等以上の醸造家及び諸營業者の大有益業内……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に送呈す速に見よ營業上一日ッ缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ早くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に倣せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者はれなり希求者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……（當館は去廿壹年の創立也）

發賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

色白新劑

本劑は佛國パリー貴紳淑女間に最も流行の[illegible]劑[illegible]男女にて特別に製し試用の[illegible]色白に變化し[illegible]要を用ゐて奏效なき人は速に本劑を試み見よ眼前に[illegible]烈なる特效を覺ゆ眞に奇效顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

血塊月やく 忽ち下る 確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止ふ必ず忽ち**快通流下**する特效あり本劑參劑分を用れば二三ケ月閉滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏效極めて峻烈顯著なるに付き**姙婦**の服用を嚴禁す若し姙婦服藥せば**即座に流產**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貳圓貳拾錢（注意）本劑の大隆盛を羨み近時續々怪しき無効の粗製僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ

わきが（腋臭症）根治確證新藥

腋臭症は[illegible]百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性症なるも[illegible]して決して再發せず或は他の病に變るが[illegible]なきは[illegible]紀的の改良新藥なり[illegible]試み[illegible]價は輕症根治分[illegible]拾錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓[illegible]送金即刻發藥す郵券代用必ず二割增の事以上[illegible]

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二一五四番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女鑑　第拾參年第五號

婦人の勢力

マコーレーは曰ふ、世界に於て、最も美麗なるは、窈窕たる美人是れなりと。夫れ、窈窕たる美人は花にして語を解するもの也。月にして情を知れるもの也。花の美と、月の皎とを以てして、語を解し、情を知るに於ては、天下の最美たるは勿論、一歩を進めていはゞ則ち宇内の至高なり。

されば此の最美至高なるものゝ前には、勇者もその勇を失ひ、智者もその智を亡ひ、富者もその富を亡ふあり。況んや翩々たる世の謂ゆる才子といふものに於てをや、渠等は美人の歡心を買はんが爲には、あらゆる手段を盡して、毫も厭はざる也。カラを高うするも之が爲めのみ。コスメチックを塗るも之が爲めのみ。奇麗なる衣服を着けて、故らに威儀を作るも亦多くは之が爲なり。豈啻だ翩々たる當世の才子のみならんや、三軍を叱咤して、伏屍狼籍の戰場に、大勇を顯はしたる古來の英雄豪傑と雖も、美人の足下に叩頭して罪を謝し、頓省して哀を乞ひたる例あるあり。豈啻だ古來の英雄豪傑のみ然りとせんや。胸に萬卷の書を蓄え、宇宙の眞理を大觀せる哲學者先生すら、往々にして一籌を美人に輸せられた

ることあるなり。

此故に孔子も、釋迦も、基督も、みな美人の勢力を認めて警戒を怠らざりき。孔子は近づくべからずと教え、釋迦は惡魔なりと斥ぞけて、共に齒ゐせざらしめんとし、基督は途に婦人に逢ふも、眼以て之を視る勿れと戒めて、誘惑の生じ易きを說きたり。その言ふところは異りと雖も、要するにみな之が大勢力たるが爲に恐れて、男子の爲めに防禦線を張りたるに非ざるなし。遂にフオントネルをして美人は靈魂の地獄なり、財囊の罪障消滅地なり、眼目の樂園なりといはしむるに至る。ア、是れ實に極端の語ならずや。

美人は果して斯く恐ろしく大なる勢力を有するものなる乎。又た美人はかゝる勢力を有するも、美人ならざる多くの婦人は、全く無勢力なる乎、或はそれ相應なる勢力を有するものなる乎。縱ひその容貌態度は美人の資格を備えざるも、才思の湧くが如くなるに於て、或は學力の豐富なるに於て、或は技藝の秀逸せるに於て、或は辨舌の流るゝが如くなるに於て、男兒に對する勢力は、甚だ强大なるものあるを認めざるを得ず。槪して婦人なる者、一面に於ては男子の爲に威壓され、恐赫され、玩弄せらるゝも、一面には猛然たる勢力を有し、男子をして崇拜せしむるものあるは疑ふ可からず。されば凡ての婦人は男子に對して勢力を有するなり。而して美人或は美人ならざるも、何等かの伎倆に於て優れたる婦

人は、社會の大勢力たるは爭ふべからざる事實なり。然るに此の勢力は、幾千年の久しき間、公然之を世間に發展するを得ざりき。乃ち發展するを得ざりしと雖も、猶は一大勢力たるを失はざりき。或は閨閤の裏にありて、隱然一敵國となり。或は後宮奥深き處に於て、謀計を畫き、或は側室となり、老女となり、妃嬪となりて、その善事たると、惡事たるとに論なく、兎も角常に時代の一大勢力たりしことは、各國殆んど其揆を一にせるが如し。たゞ古來婦人を惡視し輕視したる結果として、その勢力の歷史傳記によりて、世に傳はれるもの、往々陰謀といひ、內謁と稱へ、多くは惡事にのみの傾きを有するは惜むべくまた哀むべき也。蓋し幾百千年の間には、偉勃たる婦人の勢力が、屢々陰謀となり、內謁となりて世を害し、人を傷ひたることもありしなるべく、又善行を爲し、善謀を爲し、若くは之が媒介となりて、時を益し、人を救ひたることも、決して尠なからざりしなるべし。

時運のやうやく進むに隨ひて、男女間に設けられたる畛域と溝渠とは、次第に取毀たれて、男女の位置は對等となり、相互の禮遇、相對の權利も世に認識せらるゝに及びたると共に、婦人の勢力は閨閤の裏よりして、或は後宮奥深き處よりして、次第に人に知られ世にあらはれ、妃嬪、侍妾、老女などの間に匿れたるところのものは、令孃、令夫人等の、貴婦人と權化し來り、公會若くは交際の名の下に、そ

の大勢力を公認せらるゝに及びたるは、當然の事なるべく、吾輩は之を以て時勢進步の最も大なる恩賚の一として、女性の爲に祝賀せざるを得ず。

是に於てか陰謀は公謀となり、内謁は公謁となりて、公會の主人公は多くは婦人に占有され、交際場裡の勢力は、婦人の掌中に歸し、男子はその下風に立つの有樣となりて、獨り社交上の中樞となりたるのみならず、延いて間接に政治上の權勢にも影響を及ぼし、婦人の助力を藉りて政治上の好位地を有するに至れるものはただ少なからざるに至れり。彼の有名なるビコンス、フイルドの如きは、夙に婦人の勢力を認識し、因りて以て出身の地を爲りたるものなり。渠は曰く、少年の社會に出るに、最も緊要なるは、婦人間に好き評判を博するに在りと、善く歐洲社會の狀態を穿ち得たる語といふべし。宜なる哉、渠れが「チユウ」の一寒族を以てして先づコンニングスビーを作り、コンタルニー、フレミングを著して、謂ふところの婦人間の好評を博し、尋て交際場裡の女王と結婚して、遂に大宰相の位に上るを得たることや。此の一事によりても、婦人の勢力が歐米諸國に於て、公認せられたるを證して餘あるにあらずや。

黑闇々の世界より、光明の天地に出でたるものが、我れを忘れて、悅び樂むは、人の至情なり。幾千年以來世上の一隅に幽閉せられ、抑壓せられて蟄居陰伏したる婦人が、文明の大氣を呼吸して、公然飛

舞し、跳躍し、その欝勃の勢力を發展し、伸張するを得たる嬉しさは抑も如何許りなるべきぞ。されば渠等が、交際場裡に出入して、得意の技倆を振ひ、意氣或は男兒を凌ぎて、男女同權論を唱へ、撰擧權をも得んと渴欲するは、强ち無理とのみは言ひ難かるべし。然れどもその勢力を善用すると、惡用するとは、社會にも、國家にも及ぼすところの利害頗る多大なるが故に、若し利用その途を誤まるが如きあらば、之が防禦の策を執るものあるに到るは亦必然の勢なり。歐米の識者中早くも婦人勢力の害用を看破して、之が救濟の策を論ずるものあり、斯の如きは、婦人の爲めに甚だ嘆息すべき現象ならざるを得ず。願はくば凶惡なる勇者をして、其勇を亡はしめよ、姦佞なる智者をして、其智を亡はしめよ、不正なる富者をして、其の富を亡はしめよ。而して唯だ義の爲に之を爲して、不義の爲めに働くなかれ、ハームス曰く婀娜たる貞婦は上帝の完全なる妙作なり、天使の眞正なる光榮なり、地上の珍奇なる靈怪なり、世界の唯一なる佳品なりと。かゝる婦人の勢力が、集まりて世上に施したる大勢力は、眞に天下の最美なるもの也。宇内の至高なるものなり。

（青眼子）



慈善及風俗（つゞき）

三輪田眞佐子

第五に社會に於ける上流婦人の體面でございます、人々が勤儉貯蓄して財産を得んとすることがあります、是は貯蓄いたしてそれで面白く其財産を散じて、人を助けやうと云ふのは、宜しうございますが、若し飽食暖衣——飽食は飽くまで食ひ、暖衣は暖く着ると云ふことで、是は奢ると云ふことでございます、其飽食暖衣の爲に、貯蓄いたすと云ふのは、其心は實に卑しいのでございます、所謂守錢奴の誹りは免かれませぬ、それで實際上流婦人は、人より尊敬を受けて居ります、ソンなことを口廣く申上げるのは、如何でございますが、實に上流の婦人方は人から大變尊敬を受ける譯柄でございます、されば其尊敬の報酬は何んでございます、其酬ひはドンなものでございませう、斯う云ふやうに煎じ詰めて見ますると、實に上に立つ者は俗に申す、脊中に汗が出るかも知れませぬ、それが慈善に大變肝要な所であります、即ち是が慈善を以て、下流の人を直接間接に助けて參りませぬければなりませぬ理由であります、少しヲカしな御話でございますが、何か物品を需めますれば、其代金を拂ふ必要がございます、若し之を

拂ひませぬければ、先方からドノやうに求めて參るか知れませぬ、それと同じことで上流婦人は、上流に居るだけそれだけ、責任がございます、其位に居りまして、其實の無いのは此上もない恥辱でございます、物品を需めまして、其代償を拂ひませぬければ、懲役に行くとか、或は人に大變攻擊せらるゝのでございます、言はず語らず下流の人から尊敬を受けて、その報酬たるべき慈善を致しませぬければ、實に一等恥辱なことでございませぬか。

第六は公德の養成でございます、先刻申しましたやうに、公德の缺乏は朝野の輿論でございます、能く會などで講義演說をする時に、公德公德と云ふことを申しますが、是は中々一朝一夕には行はれませぬ、唯今御話申上げました通り、歸朝した人が、肩が凝ると云ふことは、ドンなことかと溯つて考へますと、家庭の父母が公德心が無い所から、起つて來るやうなものであつて、是は一朝一夕ではありませぬ、多年の習慣でございます、之を實行いたします近道は、御會のやうな公衆の力を藉りまして、規約を以て行へば、或は行はれませうが、家庭では習慣がございますから、中々行へませぬ、時間を守ること……ソンなことを申して私は午後一時に上りませう、或は一時よりも少し遲くなるかも知れぬと申しましたが、私は多忙で據ない譯であつたので、ドウしても此時間を守ると云ふことは、一番大切なことでございます。

それから冠婚葬祭のことでございます、嫁入嫁取り……それから又葬式例祭、これらに付ては色々考がございますが、第一斯う云ふことを改良いたしますには、團體の規約を守るやうにしたら行

はれませう、それで私は斯う云ふ御會には、大變望みを屬して居ります、

終りに臨みまして、チョッと申上げたいのは、近來の風潮は先刻申しました勤儉貯蓄、之を惡く致しますと、社會が利己主義になッて參ります、勤儉貯蓄と云ふことは、大變善いことで、私共も聊か學校を自分の家の傍に置いて見ました、それは勤儉の額を、自分で書いて見やうと思ッて居りますが、多忙でまだ書きませぬ、今度書いて置かうと存じます、コンな譯柄で勤儉貯蓄と云ふことは、大變善いことでありますが、ドウか致すと其の眞意味を誤解すると社會が利己主義になッて參ります、それから弱肉強食と申して、弱い人の肉を強い人が食べることになります、田畑でも澤山持つて居りますとか、或は社などを結んで居りますとか云ふと、其下に使役せられて居る者は、實に肉を殺がれて、食はるゝやうなことがございます、惡く申すと高利貸のやうなものもございませう、實に人情が氷のやうに冷淡になッて仕舞ふ、それを貯蓄の結果で、公共事業の爲にする氣風を、養はせたいと思ひます、さう云ふやうに、私は始終考へて居ります、それで子孫の爲に美田を買はず……良い田地を買ッたり、良い家を建てゝ、子孫に殘しても、それを守る子孫が、必ずしもございませぬ、私は話を聞いて居りますに、或る人が松の木で土藏を建てました、所が大變吝嗇だと人から笑はれました、其人が申すに私一代は此松の木で、結構であると云ふことでございました、それから其人が亡くなります時に、我は松の木で土藏を建てたが、お前達の考へで、又結構な土藏を建てるなら、モウ一つ建てよと、申したと云ふことを聞いて居ります、實にさうでございます、建

てやうと云ふ心があれば、イツでも建てられます、私は斯う云ふやうに考へます、社會の人心をして公益の爲に勤儉貯蓄する風俗を作りたいと、斯う存じて居ります。

今日は誠にツマラぬことばかり申上げましたが、尚はこれから皆樣の御話でも承りませう（終）

正しき家庭の必要を論じて婦女に注意す（つゞき）

文學士　村上辰午郎

夫婦何れも互に禮がなくてはならぬことはいふまでもないことで、婦のみ禮を盡し、夫は不禮でよいといふことは勿論ないが、然かし、兒女を養育する上からいへば、婦の方が、遙かに感化力が強い、父たるべき人は、外に出で丶勤むる方が多いが、母たるべき人は、朝から夜まで、その子の身邊を離るゝことはない、そこらから考へて見ても、母たるべき人は、如何に身をつゝしまねばならぬかといふことは、別に喋々せなくとも明かなことである、世の人の中では、男子の敎育は、是非必要となすが、女子の敎育は、男子程に必要でないやうに考へて居るものがあるが、余は、女子敎育を以て、男子の敎育よりも、一層必要なりと認むるものである、高等なる學問が、必ずしも必要といふのではないが、普通一般の敎育は、如何にも必要である、それでないと、充分なる兒女の養育はむづかしい筈である、近頃の統計によると、男の子は、その體質、性質、何れも父よりは、母に似る方が多いといふことである、これが事實であるならば、女たるべき人は、甚だ大なる責任あるも

のといはねばならぬ、男の子は、次の代のその家の主人にして、又、國家の中心をなすものである、家の主人にして、國家の中心たらんとするものゝ體質、性質が、母に似る方が多いとするならば、女子たるべき人は、常に充分身體の健康に注意し、精神修養に心を用ひねばならぬことは、明白なることである、母となッて、そこで、初めて、心を用ゆるではない、未だ母とならず、又た妻とならざる以前に於て、大につゝしむことがなくてはならぬ、ところが、古來我邦では、女子が運動するなどは、甚だ穩やかならぬやうに考へたが、こゝらは、チト改良せねばならぬことである、男らしき運動ならば、女子に不適當かは知らないが、女子には女子らしき運動が、如何にも必要である、その適當するものゝ一二を擧げるならば、羽子、唱歌などは、尤も宜しいものである、これは決して、幼少なる頃にのみ限つた譯ではない、成長の後、よしや人の母となりたる後なりとも、適當なものである、一体、日本の人は、男によらず、女によらず、少しく成長して、運動などをするのは、子供らしいことのやうに思ふ傾があるが、これは、大に誤つた考である、こゝらは、今後大に改良せねばならぬことである、母となりたる後なりとも、此のやうな遊びをするのは、これは、子供を養育する上にも、大なる益のあることである、子供と、共に、右のやうな遊びをすることは、甚だ宜しきことである、‖外へいつて遊んでおいで‖と命ずる迄で、母は家の内に居て、子供の遊びに關係せないやうでは、甚だ危險なことがある、怪我などは申すまでもなく、近邊の惡小兒と交り、彼等に化せらるゝことは、甚だ多い、全く彼等に接せしめないことは、それはでき難いことではあ

らうが、成るべく、彼等に接せしむる度を少なくするやうにせねばならぬ、左樣にするには、兒女をして、家庭內の生活を面白く感せしむることがなくてはならぬ、ところが、母たる人、或は、姉たる人が、共に手を携へて、運動をし、唱歌を謠ふなどのことをするならば、兒女は、その面白さのため、自然と、他の兒と接する度は減じ、又、家庭內の和樂も、これがために生ずることは、大なるに相違ない。

又、園藝といふことも、婦女子には適當なので、兒女養育の上にも、大なる力あるものである、自ら地にまきたる種子より、草木が發生し、遂に花を開くのを見るのは、如何に喜ばしきが、同じく花をながむるとしても、他人の手で培養されたのを見るよりも、種子の頃から自分の手で世話をしたのをみるは、何んとなく、一種のいふべからざる趣味があるものである、それから、小學時代の兒女が、手づから培養し得らるゝ草木もあるから、兒女にそれらのことをなさしむることも、家庭內の娛樂を感せしむる方法の一にして、身體のためにも、大なる益あることである。

以上は、主として身體のためを述べたのであるが、次には、精神に惡しき感化を與ふる傾ある小說のことに付て、一言して置きたい、余は、何れの小說も、皆宜しくないといふのではない、中には、敎育小說といふやうなものもある、これらのものは、左迄害もなからう、然かし、此頃世上に流行する人情物これが、大に兒女のためには宜しくない、或る學者の語に、‖小說が人を化する力は、敎育の力に優ることあり‖とあるが、これは、決して過言とはいはれない、然かも、その化するとは、惡しき方面へ化する方が多いのである、それ

故、歐州各國にては、青年輩を、小説に近づけることを防せがんため、青年文學といふものを特に發行し、それを讀ましめて、小説は、充分に注意して讀ましむることになつて居る、我邦の學校にても、小説を禁ずる方ではあるが、充分にそれが實行されて居ないやうである、家へ歸ると、日課を勉强するよりも、小説を喜ぶやうな生徒が少なくはない、こゝらは、母たる人が、充分に注意をせねばならぬことはいふまでもないことである、なれど、現今の婦女子で小説を讀むものが甚だ多いやうに見受けるが、これらはよい加減にして貰らはねばなるまい、母が小説を好むやうでは、どうして、その子の注意ができやうか、母となりては讀まなくとも、初めの頃から、心をそれに傾かせたものは、自然と話になりとも、それがでるやうなもので、これが大に兒女のためによくない、學校でも卒業したならば、それから後は、なすことなきものゝやうに思ひ、小説を讀むのが日課であるやうに心得て居るのではなからうかと思はるゝやうな女子が隨分ある、歐州各國では、女子が學校に在る間は、主として自分のための勉强であるが、今度學校を卒つたならば、親としての心得方などを更に研究し、又、一家を齊整するところの、實地上の智を得る書を讀むのである、これを、學校を卒業すれば、それより以上の學は不必要なるかのやうに心得て、小説、若くは、新聞の第三面記事などを讀むことが、精々のことゝせる、我邦の女子に比すれば、その輕重は如何であらう、正しき家庭をつくらんとの心あるならば、こゝらのところを、充分注意して貰らはねばならぬ。

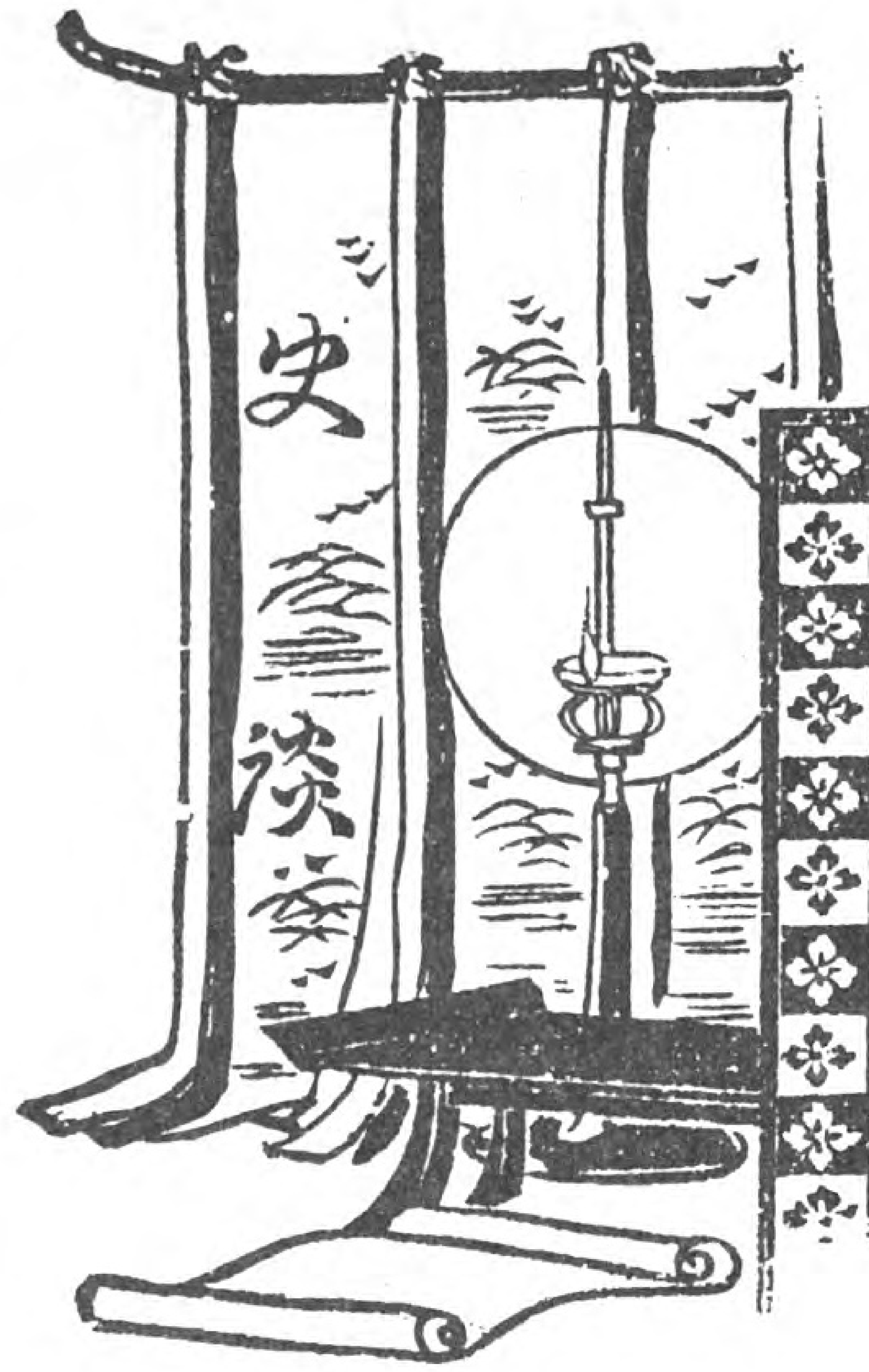
又、家庭と祖先とは、離るべからざるもので、名ある祖先を有する家に生い育ちたる子孫は、その

品行が正しいことは、これも、吾人が統計上知り得たるところのものである、よしや、左まで名ある人にあらずとするも、子孫をして、充分に先代の人を尊ぶ心を養成せしむることが肝要である、我が儘なる了見を懷く人のあるのは、これは、先代の人々のことを思はぬから生ずる結果であらう、先代の人々を尊ぶ心を養成せしめんには、それらの人々の墳墓を大切にすることが必要である、東京のみに限らぬが、所々の寺の境內に這入て見ると、代々の墳墓が粗末になッて居るものが澤山ある、これらは實に情ない話といはねばならぬ、その家が、不幸にも滅亡したことならば、致方もあるまいが、皆そうでもないやうである、他國に出て居るため、代々の墳墓に心を留めない人もあらう、又、その地にありながら、注意せないのも全くないではないやうである、何れも大なる心得違である、こゝらも、婦人たるべき人が、一層注意せねばならぬことゝ考へる、以上述べてきたことは、正しき家庭の存在は、個人の上よりいふも、國家或は社會の上からいふも必要である、一切の道德心は、皆その家庭に於て基礎をつくらるゝのであることを喋々し、次で、その家庭をして、秩序を正しからしめんには、如何なることを心得べきであるかと、その心得べきことを、數件擧げたのである。

（完結）

人生は概して泡沫の如し、只其內に石の如きもの二個あり即ち已れ自身の勇氣、及び他人の困難に對する深切是れなり。

コルトン



阿能局（つゞき）

小泉三申

（四）後藤六郎太夫

かくて主水は復讐の一念ます／＼熾なるものから、只管醫藥に心を用ひて養生怠りなかりければ、後藤が心盡しの効驗も見え、さしもの傷痛も大方は癒へたれども、右の腕は到底不隨となり果てたり、傷痛去りしとて何かせん、廢人の身にては我が大望も遂げ難し、あはれ弓矢神にも見放されしかと、意中の苦痛は彌まして募りて、さまざまに思ひ煩ひけるが、この間屢々後藤と往復して互ひに親しく交るとゝもに、つら／＼彼が爲人を見るに、義氣金鐵の如く、武勇も亦た尋常を超へて、天晴れ大丈夫と思はるゝこそ道理なれ、この人以前は三好家に仕へ、數度の戰場に臨みて功ありしが、母なる人、一日六郎太夫を誡めけるは、汝武人となりて戰功を立て、家を富まし名を揚げむとするは道理なれども、我年既に老いて、餘命いくばくもなし、汝と汝が妹の孝養を受けて殘年を送らんこと、我が唯一の願にして、富貴榮達は望む所にあらず、汝若し戰場に死するが如きことあらば、我將た誰と與に生を樂むべきや、汝倘は武人として身を立てむとあらば、我が死後に仕

官するも遲かるまじ、しばらくは我が側に在りて、同胞とゝもに孝養を盡しくれよといふ、六郎太夫は固より孝心深きもの、老母の諫を聞くに及びて、深く我が血氣に乘じて孝道に悖りしを後悔し、直ちに仕を致して、故鄕なる氷上郡千原村に退隱し、傍ら醫業を營みつゝ、妹と與に老母を養へるなりき。

されば、主水は深く後藤の爲人に敬服すると共に、意を傾けて交を親くし、後藤も亦た主水が由緒ある武士にして、忠義の志深きを知るが故に、隔意なく交りければ、遂には二人桃園の故事を學びて、兄弟斷金の義を結ぶに至りぬ。

(五) 丈夫の約諾

福井主水が意を傾けて後藤と交を訂びたるは、我が身が遂に廢人となりて、復た用ふるに足らざるを斷念すると共に、後藤の義勇を藉りて、復讎の初一念を果さむと欲せしにて、一日機を見て後藤を說きけるやう、小弟圖らざる奇緣を得て、御邊と兄弟の義を結び、世に賴母しき大丈夫を友とも兄ともして親むこと、本懷之れに過ぐるものなしと雖も、奈何せん見らるゝ通り廢人となり、再び世に出でゝ志を成すべき希望も絕え、空しく草深き片山里に老い朽ちて、鹿猿の群と與に生涯を終るの外なきこと、いかに不本意の極みならずや、其れも定まる運命の是非なき次第とは言ひながら、我が主家なりし波多野氏は、まさしき藤原姓の名族として、建武以來、當國丹波の領主と仰かれしに、一朝織田家の爲めに滅ぼされ、主君經倘公以下一族七人、安土の慈恩寺に生害ありし事は、豫ねて御邊も知り給ふ所なり、小弟不肖なりとも、主君の厚き寵遇を被り、波多野家の臣として、少しは人にも知られたるものなるを、測らざ

る病の床に在りて、三代相傳の主君が最後の御ありさまをも見屆け奉らず、眼前に主家滅亡の不幸に際會して、乍ち亡國の遺臣となれり、この恨み骨に徹りて忘れ難し、せめては當の敵たる信長に一矢を酬いて、臣子の本分を盡さんことを思ひ、晝夜肝膽を碎くと雖も、かゝる不具の身と成り果てゝは、徒らに思を苦むるのみにして、何の日か此の志を果さん望もなし、御邊若し小弟が不運を憫み、かりにも兄弟の義を結びたる朋友の情誼を思召さば、あはれ小弟に代りて此の宿怨を晴らし給はらんやと、涙を垂れつゝ愁然としてかき口說きぬ。

六郎太夫は、つら／＼主水が述懷を聞き、己も亦た感に得堪えず、主水が手を執つて覺えず落涙に及びけるが、足下は誠に得難き忠義の武士なるかな、主家の滅亡を悲しみ、仇を復へし、怨を酬

んとするは、情義兩つながら全くして、其の志千古に耻ぢずと謂ふべし、我は既に富貴功名の念を絕ち、塵外に立ちて靜かに餘生を送らんとする者なれば、有りて効なき生命なり、足下が意中の悲憤を思ひやれば、我れとていかで悲しみ憤らざらん、義を見て爲さゞるは勇なしと聞く、我がこの生命を犧牲として、足下が望を盈たさんことは、固より我れも望む所、況んや朋友の情、兄弟の義も等閑ならず、かゝる大事を語らはれて、何條少しも躊躇べき、好し直ちに足下の乞を容れて、明日にも安土に赴き度しとは思へども、足下が知らるゝ如く、我れに老いたる母あるぞや、我れ若し朋友の情誼の爲めに、輕々しく動きて生命を殞さば、取り殘されし母の悲嘆はいかばかりか、義は固より重しと雖も、孝は人倫の基なるものと、前後輕重の差別は事新らしく言ふに及ばじ、父母

在せば遠く遊ばず、てふ本文も有るなれば、今暴かに足下の乞を容れて虎穴の危きに入るは、甚だ緩急の序を誤るに似たり、遮莫、六郎太夫も男兒なり、足下が切なる信賴を受けて、いかで心の動かざるべき、時機もあらんには、生命を鴻毛の輕きに比して、必ず一諾の義を果すべし、我が母上は既に老いたり、我等いかに孝養をつくすとも、人生自から限あれば、やがては我が孝道も終るべきか、かくて後にこそ潔よく謀を廻らして、足下が爲めに惜しからぬ我この生命を捨つるとも遲かるまじと思ふなり、足下幸ひに我を信せば、我がこの苦衷を諒として、心靜かに其の時を待ち給ふべしと、理をつくして主水を諭しぬ。

聞けば如何にも道理ある言に、主水は押し返へして之れを强ゆるよしもなく、好き程にして袂を分ちしが、翻つて思ひ廻らせば、見る蔭もなき一浪人の分際として、當時世に時めける右大臣家を討たんと謀ること、世に謂ふ螳螂が斧の比喩にも似て、危しとも危き事限りなし、我こそ主家滅亡の不幸に會ひて、この怨み骨に徹りたれば、一命を塵芥に比して危き企てをも思ひ立つなれ、後藤は固より織田家に對して、寸毫の怨を懷ける者にあらざれば、只だ我が一片の依賴を受けたるのみにて、自ら求めて死地に入らんこと、思ひも寄らぬ儀ならんかし、況や我が爲めに右府を刺すとも、彼れに毛程の利益もなく、寧ろ右府の爲に我を捕へたらんには、莫大の恩賞をも蒙らん、利に走り勢に附くは世の人の常なるものなり、深くも慮を用ひずして、輕々しく胸中の秘密を明かにせしは、餘りに智惠淺き事なりき、されはこそ、彼も名を老母の孝養に藉りて、容易くは我が賴みを肯はざるにあらむずらむ、若し又た彼が言ふ所

真實にして、老母百年の後に至りて、我が爲めに義を立てんとするとも、ソハ何時の年にか測る可らず、賴み少き事を賴み、徒らに手を拱いて、怨家の榮を傍観せんことは、いかにしても我が堪へ難き所なり、然ればとて、今の我身のありさまにては、自ら進むで事を發せん望絶へたり、所詮惜しからぬ生命を長らへればこそ、かゝる口惜しき事もあるなれ、寧ろ潔く自殺して、主君と泉下に見へんかなど、胸に無量の憤怨を蓄へて、獨り自ら悶へ苦しみしが、遂には堅く心を定めて、一夜手づから刃に伏し、世に亡き人の數に入りけるこそ、哀れにも又いたましき。（未完）

人若し財嚢を空くして、之を頭腦に注がば、何人も之を奪ふこと能はず。　フランクリン

桂昌院

文學士　小林雨塔

徳川三代將軍家光の後閣に春日局あり、其威權老中を壓せしが、局去りてより更に於萬の方あり、身京都六條 宰相 有純の女として、家光の侍妾（御中﨟と稱す）と爲り、君寵後閣を傾くる有樣なりしが、春日局に代りて大奥侍女輩の行儀躾方を勤むるに至りてより、侍妾の勤を免ぜられ、只將軍に近侍して、内外の政事に容喙し、權勢往々宰臣を凌ぎ、世に第二の春日局と謳はれぬ、於萬の方既に中﨟を免ぜられしかば、己が權勢扶植の一策として、其召使（部屋子と稱す）中容貌秀麗なるものを撰びて、已に代りて將軍の侍妾たらしめぬ、桂昌院は實に其一人なり。

桂昌院名は玉、二條關白家の家司本庄太郎兵衛宗

利の妾元市人仁左衞門なるもの、妻の連子なり、此る微賤の女なりしも、於萬の方の縁によりて徳川氏の後閤に仕へ、後於萬の方の計によりて、將軍家光の寵を得名を秋野と賜ひ、遂に正保三年德松を生む、此れ後の五代將軍綱吉なり、即ち桂昌院は將軍の生母たるの故を以て、世に儔少なき奇福を一身に集め、綱吉政柄を執るに及びては、其大奥にありて、當時の權臣と深く結託し、苛察を好みて、甚く五代將軍の世を搔き亂し、結局桂昌院殿一品大夫人の名を當時の歷史に止めたる事蹟を略叙せんとす。

家光薨じて子家綱嗣ぐ、當時の後閤には矢島局、飛鳥井、姉小路等ありて、勢力を振ひしが、將軍の世を去ると共に、大奥の局面は一轉する事常なれば、綱吉館林より入りて本統を受けしより、始めて桂昌院の時代來れり。

家光嘗て桂昌院に向て曰く、吾は幼よりして專ら武藝を學び、且つ少壯よりして大統を繼ぎしを以て、遂に讀書の暇もなく、文藝に於ては力を用ひざりしまゝ、今に及びて往々悔る事あり、此の兒（綱吉を指す）は性質穎悟なれば、能く師を撰びて書を學ばせ、聖賢の道に心を用ひしめば、後來爲す所あるならんと、されば桂昌院は常に此旨を體して綱吉を學に導き、喜びで聖人の道に就かしめたり、綱吉の文學を好み又生母に仕へて至孝なりしは、全く素養の然らしむるところといふべし、桂昌院は綱吉の敎育に於ては良母たるを失はざりしと雖も綱吉をして已に心服して奉侍せしめし所以は即ち後に至りて容易く後閤に勢力を張るを得たる所以なりとす、且つ繼統の時綱吉僅かに十六歲なるを思はゞ國政の專ら母公に出でしこと亦知るべきに非ずや。

家綱の時大老酒井忠清あり、深く後閤の女中と結託し、威柄を弄し、下馬將軍など、稱せられしが、家綱薨じて嗣なし、大奥の女中等己等が權勢榮華の傾かん事を恐れて、綱吉（家綱の弟）を迎立するを喜ばず、然るに家綱の侍妾中に懷胎せる者ありと噂しければ忠清愚直にも之を信じ、此の遺腹兒生るゝ間京都より一皇子を申し下して將軍と仰がんとの議を立つ、此の時老中堀田正俊獨り之を非とし、論難して措かず、遂に綱吉擁立の功を立てたり、之によりて正俊大に信任を蒙り、威權内外を傾くるに至りしが、此れ又正俊が一に桂昌院の意を迎合して其眷遇を得たるを以てなり、延寶八年正俊桂昌院の住所なる三の丸の修理了りて、移徙の總奉行を司り、萬事能く處理せしとて、三の丸に於て祝儀の席上綱吉正俊に刀を賜ふ、此の時正俊桂昌院にも謁せしが、桂昌院綱吉に向て曰ふ樣、上樣には何故に未だ雅樂頭（酒井忠清）を御斥けなきにや、彼の者は先君大漸の砌上樣を差措きて、京都宮方を迎へ、己れ御後見として、世を思ふ儘に取り行なはんとせしに、只此の備中守（正俊）殊勝にも一身一家を捨てゝ爭ひし故此く御繼續の目出度き運を得させ賜ひし由承れば、必ず此の備中守を御寵遇ありて雅樂頭は速やかに黜けらるべき筈なれば、中々今の御刀下賜の程にては事濟まざるなりと、之を聞きて綱吉も返答に窮し、正俊も冷汗を流せしが、此の後間もなく酒井忠清出仕を止められ、暫くして其子忠擧と共に或は職務免黜、拜謁差止の處分を受け、之に代りて正俊老中の上座を命ぜられたり、此の如く桂昌院は綱吉承統の始に於て、宰臣の黜陟に容喙し、此れより正俊及び綱吉の御側御用人牧野成貞等と内外相提携し、己が意に從て政事を處理せしめし

事甚だしと云ふべし。
然れども桂昌院又其腹心の輩を利用して、官吏の私曲を聞出し、之を暴露して奸吏を刑せし事あり、當時諸國公料の代官等私曲多くして、幕府の收入を私費せしもの少なからず、中にも下總代官林長兵衛等甚だしかりしが、一日綱吉俄かに堀田正俊を召し、諸國代官の不正の徒を糺明せしめしに、果して長兵衛等の奸曲露顯して、父子三人死刑に處せられたり、綱吉は何故に彼等の私曲を知りしかと云ふに、此れ全く桂昌院の告げし所なり、抑は綱吉未だ館林に在る頃其の能樂の相手に小川松榮(元松三郎)なる者あり、不調罪を得て遁世し、下總中山法華經寺に在りしが、何がな功を樹てゝ歸參を願はんとせり、桂昌院は此の松榮を殊に不便に思ひ居りしかば、松榮も此母公を便りにせしなり、然るに彼れ下總に在りしを以て居常林長兵衛の所行を見聞し、苦々しき事と思ひ居りしかば、一日己が見聞を一書に認め、便宜を求めて、之を桂昌院に上りしより、事忽ち暴露して此の大獄を見るに至り、松榮は此の功によりて又召出されたり、此等は會結果の能き方と云ふべきなり。

桂昌院未だ幼少の頃京都に有り、一日母に伴はれて仁和寺に參詣せしに、此の寺の伴僧に亮賢なるものあり、能く人を相せしが、亮賢桂昌院の容貌を見て大に驚き、不思議の事もあるものかな、今此の相を見るに後々は威勢天下に並ぶものなく、申さば國母御所とも仰がれたまはん事疑ひなし、これや夫程の身分にもあらぬ人なれば、只不思議と思ふなり、此の事は深く秘して決して他言すべからずと云へりしが、果して後に五代將軍の母公と仰がるゝに至れり、之を以て桂昌院夙に深く

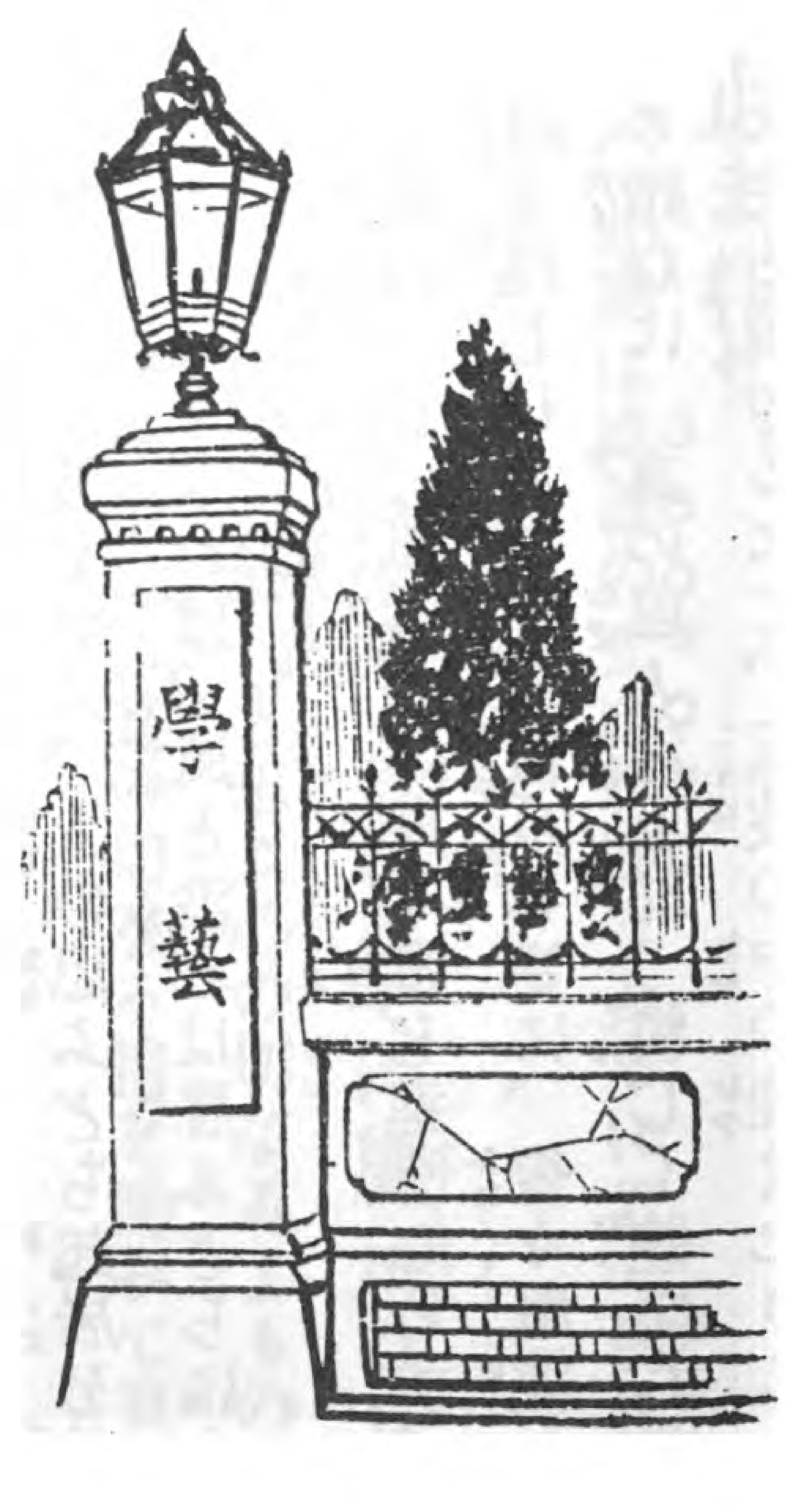
亮賢を尊信し、綱吉舘林に封ぜられし頃、彼の地碓氷八幡宮別當大聖護國寺へ彼の亮賢を招請して、第一の祈願所とせり、綱吉將軍となるの始、此亮賢の弟子知足院惠賢をして舊例をも顧みず、城内安鎭の修法をなさしめ、天海大僧正以來勤め來りし上野を擱きし事あり、此くて桂昌院は亮賢を古の弘法大師にも劣らぬ碩德なりと崇信して、綱吉に勸め、府下に一寺を建立して、之を亮賢に賜ふ事となりしが、此に關して端なく職を免ぜられし老中あり、开は綱吉此の寺地見立の事を老中土井利房に命じ置きしが、日を經て、桂昌院綱吉に向ひ、亮賢に下さるゝ寺は何れに御建立下さるるにやとありしに开は能登守（利房）に申含めありとて、利房を召して之を問はれしに、利房今以て相應の地所も存じ當り申さずと答へしが、此日利房下城の後頓て明日より登城に及ばずとの内意あり、翌日能登守事常々物忘れ仕り御役勤兼候樣思召るとの事にて、老中の職を免ぜれたり、些細の落度なれども、此れ寺地見立の遲きを以て桂昌院の憤る所となり、遂に綱吉に勸めて、利房をして此の災禍に罹らしめしなり、桂昌院か其好む所に僻して、宰臣をさへ黜陟せしめし事此の如し、實に恐るべきは牝雞の晨する事なり。

宰臣の此の亮賢の寺の事に關して罪を蒙りしもの尚一人あり、寺地見立の事によりて土井利房右の如き樣なりしが、結局大塚御藥園の地を賜る事になり、板倉重種に右の寺普請の監督を命ぜられ、新寺間もなく落成して桂昌院の持念佛なる觀音の靈像を以て本尊となし、寺號を護國寺と賜り、京都仁和寺の末寺として、關東眞言宗の大檀林とせしが、又寺領三百石を寄附し祈願所とす、偖て此の入佛供養を行ふに當り、桂昌院結緣の爲め其

一七日結願の日參詣せんとの內意を時の大老堀田正俊に告げ、正俊も之を賛して老中の面々に申達せしに、獨り當時西丸附老中なりし板倉重種甚だ之を非とし、入佛供養とは寺法一通の法會なれば、雜人同樣に御母公の御參詣は勿體なし且つ其の爲めに庶民の群參を止めざるを得ざればとて之に反對し、遂に事止みとなりしが、此の爲め憐むべし板倉重種程なく西の丸老中を免ぜられ、且つ大老正俊より勸めて先頃加增の一萬石を返上せしめ、且つ翌年（天和二年）武州岩槻より信州坂木に轉封を命ぜられぬ、此れ全く桂昌院の欲する所を阻みしを以てなせり。

（未完）

人身に光輝を反射するは嚴格なり、節制より大なるものあらんや。　サウス



通俗土佐日記（第拾回）

北海道師範學校教諭　兒玉彌三郎

十五日、今日、小豆粥煮ず、

○小豆粥　古より、正月十五日之れを食せば、終年疫氣なしといへり、今日之れを煮ざるは、舟中萬事不便にて、例年することも得せずといふにて、今日までも斯く舟中に居んとは豫期せざりしかは、斯かる用意をもせざりしにて、船

中の久しきを憂ひたる意言外にあり、

口惜しく、尙ほ日の惡しければ、膝行る程にぞ、今日、廿日餘り經ぬる、

○尙ほ日の惡しければ　の一句は、挿入にて口惜しくより膝行る程にぞといふに續けて見るべし、日の惡しければとは、日和の惡しかりしをいふなり、道家の說の盛んなりし當時のことなれば、日取りの惡しかりしなりといふ說もあれど、さる場合には八日の條下の如く障ることありて尙ほ同じ處なりなど、特に明記したるを以て察するも、此の說には從ひ難きに似たり、

○今日　とは今日までにの意なり、

徒らに日を經れば、人々海を眺めつゝぞある、

○是は、舟の進まずして膝行の樣なりしを歎てる餘り、見るともなく海を見詰め居る樣を記せるにて、此の節は、此の段の主にして、前の節は、此の節を言はんが爲めの序なり、

女童の言へる、

起ては起つ居ればまた居る吹く風と波とは思ふ同志にやあるらむ、

言ふ甲斐なき者の言へるには、いと似つかはし、

○女童　とあるは、例の設けたるなるべし、

○起ては起つ云々　上の起、居は風をいひ、下の起、居は波をいふ、人の思ふどち起居を共にするが如くなれば、風と波とは思ふどちにやあるらんとの心なり、

○此の一首、風波の、斯く舟を進ましめず、數日を經しむることの恨めしさに、皆々風波を踈め憎むに、其の風と波とは、親しく睦まじき中にやと讀めるにて、風波の中の睦まじきことを

知らんとする心は、専ら、人々と風波との中惡しきを思はせたるなり、
○言ふ甲斐なきもの　とは其の、人といふにも足らぬ意にて、女童を指したるなり、
○似つかはし　とは相應なりといふ程の心にて、年幼なき女童の歌にしては、年相應に出來たりとの心なり、此處に限らず、妾の歌とし或は他人の歌としたる歌には、多く歌の下に斯かる評を添へたり、是れ己れが讀める歌を他人の歌としたりといふことを知られざらんが爲めなり、よし、歌は設けて人の作としたりと見られんも妨げなきことなれど、土佐の任の不平は、廟堂に對し憚りあるが故に、歌までも斯く評語を添へて、信に妾の歌の如く思はせたる用意周到といふの外なし、

十六日、風波の止まねば、尙ほ同じ處に止まれり、

○此處に風波の止まねばとあるにて、前日も海荒れたりしことと思ふべし、
○尙は　といふ詞、是れまでに屢用ゐられたり、何れも、都へと思ふ心の切なるよりのことにして、一字毎に其の切なる情を酌みて見るべし、

唯、海に波なくして、何時しか、御崎といふ處に渡らむとのみなむ思ふ、

○海に波なくして　とは此の荒き風波なくてといふなり、御崎といふ處は、波風荒れては決して渡るべからざる處なり、されど、苟くも渡り得べき程の風波ならば、固より渡りもすべけれども、元來、斯かる難處に波起たば、乘りたる心もせじと思ふに依りて、斯く特に波なくしてと書けるなり、

○いつしか　とはいつかといふにしの字の加はりたるなり、此のかの字の係りは下の渡らむにて結べるなり、

○御崎　土佐國安藝郡に在り、室津より二里許り東南にして、南方一面、水や空なる太平洋に向ひ、常に波風の荒き處にて舟人の甚だ恐るゝ處なり、

風、波、共に、止むべくもあらず、

○此の共にをとみにの誤なるべしとの説あり、上文との首尾、切なる樣思はる、但し共ににても固とより聞えざるにはあらず、故に姑らく疑ひを挿み置くのみ、

○べくも　は俚言にさうにもなどいふ心なり、是れまですら既に廿日餘り膝行る樣に經たるに、此の、行く先きに御崎といふ難處あるを、風波共に止むべき樣にも見えぬ覺束なさを思はせたるなり、

或る人、此の、波起つを見て讀める歌、

霜だにも置かぬ方ぞと云なれど波
の中には雪ぞ降りける、

○或る人　とは例の設けたるなり、以下總て之れに倣へ、

○霜だにも置かぬ方　とは土佐は暖國なればなり、霜と雪とを比ぶれば雪は重く霜は輕きに、其の輕き方なる霜さへも置かぬ方といひて、まして、雪は降らぬ地といふことを思はせたるなり、白氏文集に「誰言南國無㆓霜雪㆒盡在㆓愁人鬢髮間㆒」とあり、好く似通ひたり、又、定家卿、熊野行幸供奉の時の歌に「霜置かぬ南の海の濱びさし久しく殘る秋の白菊」とあるは、此の歌に胚胎せるらし、

○波の中　とは陸に對していへるなり、陸上に

は霜だに置かぬ方なるに、波の中には雪降るよと驚ける樣を讀みたるなり、

扨て、舟に乘りし日より今日まで廿五日になりにけり、

○舟に乘りし日より云々　去年十二月廿二日和泉國まで平安にと思ひ立つとある、其の日より今日まで廿五日なり、

○此の段、全く前段の意に同じく、思ひ懸けぬ數日の船中を歎けるなり、而して前日には廿日餘りと算へ、今日は廿五日と精密に算へたるは、行く先きに難處とする御崎あるに、かてゝ加へて、昨日よりも天氣惡しくなりしが故に、一層其の歎きを增したるなり、

十七日、曇れる雲なくなりて、曉月夜いと面白ければ、舟を出して漕ぎ行く、

○曇れる雲なく云々　曇りてありし雲なくなりてといふ心なり、昨日甚だ氣色惡しかりし海の、此の曉、斯く晴れたる嬉しさを思はせたるなり、

○曉月夜　とは十七日は、昨十六夜初更に出でたる月の、曉にも尙ほ空高くある月なり、

○前段に抑鬱の樣を述べ、此の數段に發暢の景を叙し、下段復た憂悶の狀を記す、抑揚の妙趣味ふべし、

此の間に、雲の上も波の底も、同じ如くになむありける、宜も、昔の男は、棹は穿つ波の上の月、舟は襲ふ海の中の空とはいひけむ、聞きされに聞けるなり、

○雲の上も波の底も云々　是は、雲も波も一つに見ゆるをいふにて、海の凪ぎたる樣を思はせたるなり、

○宜も　は萬葉集に諾の字を讀めると同義に

て、此の詩の句意を諳ひたる心をいふ、

○昔の男　とは此の詩の作者なる唐の賈島を指せるなり、

○棹は穿つ云々　詩人玉屑に「高麗使過レ海有レ詩云、水鳥浮還沒、山雲斷復連、賈島詐爲二梢人一、聯二下句一云、棹穿波底月、船壓水中天、麗使嘉歎久レ之、自レ此不二復言一レ詩」とあり、然るに此處には波底を波上に、水中を海中に、壓を襲に、天を空に變へたり、平仄より推すも押韻より敲くも、一見其の誤りなることを知るべし、是れ、紀氏の記憶を誤れるにあらで、女の記者なるが故に、詩などには餘り詳しからざるものとして、態と斯く拙く變へたるにて、飽くまでも此の日記の記者を女なりと思はさんが爲めなり、

○聞きされに云々　聞きかぢりに聞けるなりとの心にて、聞く樣の惡しかりし爲め、此の句に誤記もあらんと謙遜せるは、女の淺學に託せしなり、

又或る人の讀める、

水底の月の上より漕ぐ舟の棹に障るは桂なるべし、

○水底の月　とは海に映れるをいふ、其の上を漕ぐを上より漕ぐといへるなり、

○棹に障る　とは石にても泥にても、水中にて棹に障る物を指せるなり、月の上より漕ぐ舟なれば、棹に障る物はあるまじきに、障る物あるをいふなり、

○桂　は月中の桂のことなり、天寶遺事に「有二明皇一遊二月宮一、素娥十餘人、舞二桂樹之下一」とある類是れあり、

是れを聞きて、或る人又讀める、

影見れば波の底なる久方の空漕ぎ渡る我ぞ詫しき、

○影見れば　とは空の影の海に映れるをいふ、月も其の中に含みたりと知るべし、
○浪の底なる久方の空　とは海即ち天、天即ち海なるをいふなり、
○我ぞ詫しき　とは我が如き人は、恐らく世にあらじと思ふ心にて、詫しとは、言はん術、せん術共に盡きたる歎きをいふ詞なり、
○此の歌、上の歌、共に、都へ歸らんとて舟を出せるに、是は何處へ行くにやと、都に歸らんことの覺束なさを讀めるなり、

斯く言ふ間に、夜漸く明け行くに、楫取等、黒き雲俄かに出で來ぬ、風吹きぬべし、み舟返してむといひて、舟返る、此の間に雨降りぬ、いと詫し、

○夜漸く明け行くに　とは上文曉深く漕ぎ出でたりしことの照應なり、
○風吹きぬべし　とは必定、風吹き出づべしと、未然の必然なるをいへるなり、
○み舟返してん　とは舟を元との方へ返して泊らんといふ心にて、ての下泊らんといふべきを省けるなり、
○舟返る　とは室津を指して返るなり、
○いと詫し　とは詫しさが中の詫しさあるをいふなり、舟の膝行する程に行をさへ歎けるに、辛うじて漕ぎ出たる舟の、復た元との處に返ること、誠に詫しき限りなるべし、曉月夜に乘りて漕ぎ出たりし時の嬉しさを此處に照らして、今の詫しさを思ひやるべし、是れ抑揚の法なり、

十八日、尚ほ同じ處に在り、海荒ければ舟出さず、

○尚　の一字に、昨日漕ぎ返りたる事なれば、切めて今日は天氣も直りて漕ぎ出られなば、昨日の詫しさをも少しは慰むべけれどゝの心を含めたり、

學藝

○海荒ければ、此の句、上に尙ほ同じ處に在りとあれば、無論、海荒るゝが故なることは明らかなれば、冗語なるが如くなれど、思ふに、少しにても海靜かならば舟出さんと、終日待ちけるに、終に海靜まらざりければ舟出さずとの心なるべし、簡潔を主としたる此の日記のことなれば、徒らに斯かる句を置くべき筈なし、

おのづから心の花も咲くやこの
はなの都のはるにあふみは

草枕むすびかへても置くつゆに
袂しぼらぬあかつきぞなき

糟屋磯麿

和畫通信講義

山崎彩峨

墨にて畫かむには、淡墨を含めし筆に、濃墨を附して、石、花、葉と、順に畫き、土を畫き、點を打ち、淡墨の隈を施し、濃墨にて、花心葉脈草石點等を入るゝなり。

彩色なれば、胡粉を含めし筆に、紫色を附して、花を畫き、草色にて、葉を附し、石を畫き、(前回參照)土を畫き、淡き草色にて、點を打ち、淡き赭墨の隈を施し、乾きて後ち、濃墨にて、草を畫き、草色か淡き藍色かにて、線を畫き添へ、花心に、黄色を點し、濃き紫色にて、花點を打ち、濃き藍にて、葉脈を入るゝあり。



家中の士、常々寄合ひの料理、内々定め置候通り一汁一菜それも成るほど麁末に越したる儀は無之候、鹽梅取り合せの好意は、さのみ挨拶にも及ぶまじ、士の寄合遊びは、互に親を求め、おもわくを述べ、異見をも聞きて語り慰むるをこそ申すべけれ、當時の馳走とて料理に念を入れ、座上の物好きなどに、心を盡し隙を費し候は何の爲めに候哉、心得がたくこそ。

白河樂翁

節儉の要は少許の利益に注意せんよりは、寧ろ少許の費用に注意するに若かず。

ベーコン



老人の看病（つゞき）

後閑菊野

それから次には湯に入れることであります、病人の身體を清潔にすることは大層必要なことでございます、今までは病人にお湯をつかはするのは大層害のあるやうに思ひ誤つて居りましたが、それ

ドコロではございませぬ、却ッて病人には入浴させる方が宜いのでございます、一たい入浴は身體を清潔にする爲のみならず一つの治療法として用ゐられゝ居ります、其くらゐでありますから若し醫者が入浴を致した方が宜いといはれたならば決して疑ひなく入浴させる方が宜いのでございます、併し其入れ方は十分注意せねばなりませぬ、其時風を引かせるやうなことがあッてはなりませぬ、重病人になりますと中々浴室まで歩いて行くことが出來ませぬ、又どうかして連れて行ッた所で据風呂に這入れないことがあります、ソンな時は寢て居ッて這入れるやうに丁度此卓子くらゐの細長い浴湯用の桶を作りまして其中に寢かせて入浴させることがあります、ソンなことをしてまでも醫者の命令通りやらねばなりませぬ、又さう云ふやうな全身浴ばかりでなく、半身浴或は脚湯などをさせますこともまゝあります、若し入浴が用ゐられぬ患者であれば毎日能く身體を拭ふのが宜いのでございます、併し毎日と云ふことは出來惡いでございませうから、先づ一週に一度若くは二度、出來るならば三度くらゐ致したい、一度は必ず缺いてはなりませぬ、尤も顏や手を拭ふこと口嗽ぐことなどは毎朝すべきことであります、

また全身を拭ふ折は左半身を肌を脱がして手早く拭ひましたらば次に右半身次に脊中を拭ッてスッカリ着物を着せて寢して置いて次に足の方を拭ふといふやうにするのであります金盥にお湯を入れ石鹸と手拭とを用意して之を以て十分に拭ひ清めるのであります此時は當り前の大きな夜具では仕惡うございますからケットなどを掛けてするもよろしうございます、それに此時は室內に風の當らないやうにせねばなりませぬ是は看病の中の一ッ

の仕事でありますから、怠てはなりませぬ、唯醫者に掛けて置くと云ふだけではいけませぬ、それ等の事は息子か娘が進んでするとにし決して煩しく思ふはないといふやうでなければなりませぬ。

此外に繃帶の掛方であるとか、或は吸入の仕方であるとか、又は灌腸の仕方であるとか色々治療に關する看病法もありまして、此等も看病する人が知ッて居ッて醫者の手助をせねばなりませぬが、一々申上げる暇はございませぬから　唯病氣の時の衛生法を申したのでございます、斯う云ふ風に遺憾なく、看護いたしまして天然の壽命を保つやうにし他日に後悔を貽すことのないやうにせねばなりませぬ、是は一家の大切な勤めでございまして決して缺いてはならぬことであります、前に申しました通り老人を大切にするといふことは我國の美風でございますから、此風を捨てないやうに殊に老人の一番苦しい時、即ち病氣の時は能々世話をせねばなりませぬ、老人になりますと自分は世の中に用が無いものであるから、長く病氣になつて居つては若い人に氣の毒であるなどいふ考をもつ人もありますから、決してさう云ふ苦痛のないやうに全く病苦を忘れるやうに眞實を盡さねばなりませぬ、さう云ふやうに一家の主人や主婦が致しますればそれを家の子弟が見習ひますから、其家の風が又手厚くなります、さういふことは實に大切なことであります、段々世の中も忙しくなつて婦人も色々の事に關係せねばなりませぬが、前申した通り大切な家の勤めはドウしても避けられぬといふことを思はねばなりませぬ、誠に御話申すことが拙うございまして御分りにくうあッたことゝ存じます。

（完結）

○松島艦上家族の團欒

練習艦隊行進の譜　（松島艦乘組員作）

三星霜の苦學成し卒し　二百にちかき武士を
我が子の如く慈む　司令官をば戴きつ
彼の黄海の戰に　譽れを揚げし嚴島
縁も深き松島や　風光明媚の橋立と
名も麗はしき戰艦　御稜威顯はす旗の下
往てを祝す同胞が　熱き情を身に負ひて
いざこれよりは我國の　義勇の模範を親好の
諸國に示さん諸共に　諸國に示さん諸共に

去る紀元節の佳辰を卜して目下横須賀碇泊中の巡洋艦松島艦では同艦及び橋立嚴島三艦乘組士官の家族を招き最も親和なる會合をした、それは同三艦が今回練習艦となり、且つ艦隊を新たに組織し、他日海國の固めともなるべき士官候補生の英材百八十名を載せた上に、これまでに例の無い南洋貿易視察の命を兼ね帶びて出帆するといふので、少くとも半ヶ年は南洋の風浪と戰ひ、異域の空に古郷を忍ぶ身とあらねばならぬ、苟も身を軍籍に措くからは、素より家は忘れては居るが、誰しも胸臆に潛む一片の情は、親を思ひ、妻子の上を忍び、風聲月色時に傷心の種となる事もあらうと云ので、同情に厚き艦長は、軍人の家族たる者が、軍艦の狀態を知らずにあるは遺憾であるから、此際家族を此艦内に招て、一には長き航途に上るの人を送り、一には軍艦生活のいかなるものあるかをも知らしめやうと、兩樣の趣意を有て紀元節の佳辰にこの催ふしをしたのである、軍艦に家族を招いた例は、昨年淺間高砂の二艦か英國皇帝戴冠式祝賀の御使節とならせられし小松宮殿下を載せまゐらせて、出帆の際家族を招いて、一日の觀を

盡した近き先例はあるが、まづこれまでは無かつた事である、この日波靜けき横須賀港内には、まづ松島艦を始めとして、橋立、嚴島、其他の軍艦滿艦飾をして、五彩美くしく飜へるさへ、春の海の長閑けさが滿わたつてゐるのに、松島艦上には乘組員の兩親、妻子、兄弟、親戚、故友、舊知それ／＼に語り交してゐる、融々たる春光はこの艦上の歡聲の裏に籠つてゐるやうで、之を陸から望むにもいひ知らぬ、愉快な心持がする、然もこの松島艦は、彼の黄海の海戰に旗艦であつて、名譽の奮鬪をなし、打死した人もあつた、長き紀念の存する同じ甲板の上が、今は一家怡樂の塲となつて、當年の凄慘たる光景を思ひ浮ぶる人も無いが、忠死者の靈も決して咎はすまい、齊くこの怡樂の團欒に入つて、同じやうに一日を樂しんだであらう、午前十時と云ふに餘興が始るといふので、さしも廣き第一甲板の上も一杯の人で、老たる父の手を引く者、我子を抱いてこれは何、あれは何と說明す父の後に引添ふ其母は、父の肩章を玩物にして居るその子を笑ましげに見て、目で制してゐるもある、招きし故友の遠方より來りしを迎へて、久濶を叙してゐる少壯の士官もある、態々手紙にて招きし人のまだ見えぬと云て力なさゝうに私語く少尉もある、導く者、導びかるゝ者、いづれも喜色滿々として春風駘蕩たる甲板の上には、早や音樂手の嚠喨たる君ケ代の唱歌が吹奏せられ、井上横須賀鎭守府司令長官も臨塲し、軈て擊劍、ヴアイオリン二三番の餘興を終りて、晝餐の食堂が開かれた、食堂は艦内の各室を以て宛てたれば、家族等は思ひ／＼の食卓に着いて、敢て美味といふでは無いが、可愛の兵士が無骨なる手附で酌をされたのに、舌皷を打ち、何れも心から醉ふて、

この勇ましき首途に名殘を惜む念も打忘れ、各自に知れる同志相集まりて語りつゝ飲む樂しさは、家庭に於ける食事と毫も變る所を見ない、此の席で同僚を我親に紹介せる士官もあれば、豫て名のみを聞き居りし夫の親友に、初めて挨拶する妻もある、いかに目出度き宴會とて、かくばかり怡樂に滿されしはあらざるべく、その席の軍艦なるに於ては、猶更異數と云て可らう、充分に飲食して、再び甲板に出づれば、更に餘興を繼で、琵琶筑音器、柔術、相撲取があつたが、中にも最も家族等に取りて目新らしく見たらうと思はれたのは、裝塡砲の競爭である、これは時間を切て大砲に火藥彈丸を裝塡するので、其熟練と神速には一驚せしめた、最初は松島艦の甲組砲術手七名で砲は十二珊の稽古砲であるが、彈丸の重量には變りは無いのを、二分間に五十八發、次は橋立甲組で同分間に四十二發、次は嚴島乙組で同分間に六十發、續いて松島が五十六發、橋立が三十九發、嚴島が五十六發で、同艦が好成績を得た、次に嚴島の砲手二名にて分時を限り、角度を上げて裝塡せしめた所、丁度百四十四發で一分間二十八發位に當り、其熟練の美事さは平日の修養の程を思はしめた、之等の餘興を終つて、午後四時あらゆる興を盡し、散會した家族等は家に歸りて、いかに當日の愉快と面白さを語り續ける事であらう、當日の興は恐らく一生涯の話の種になるであらう。

挿花の話

小畑いく子

桃と梅の對照

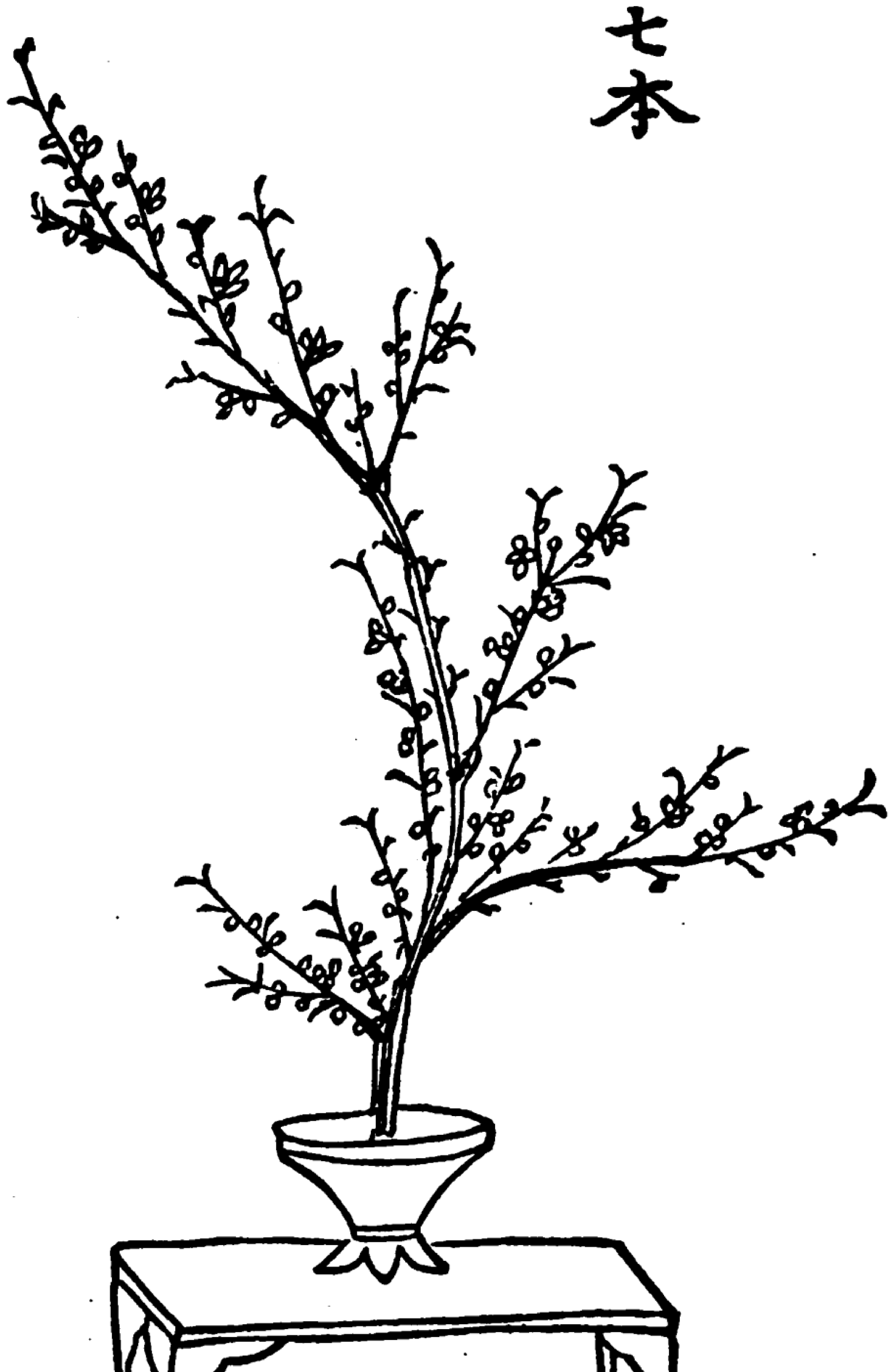
梅と桃とは相亞で春の初に咲き出で、尤も梅の少

し遲れたのは累桃と同時に咲くやうです、互に其艶を競ふて居ります、一つは香に秀で、一つは色に誇りていづれ劣らぬ春の錦であります、又其枝ぶりなども大差がありませぬから、ともにすれば山茶花と茶樹との樣に其區別がつかぬやうな物が出來ますから、余程注意をして挿さなければなりませぬ、其注意と申も別に變りました事ではありませぬ、やはりいつも申す通り、其天然をよく〳〵氣を付て寫すのみの事でありまして、梅は前々回に述べました通り、氣骨のある所が長所であります老樹の幹などは多くは中は朽ちて皮ばかりになりて居ります、また臥龍梅など〻申のは、幾回も屈折して地を這ひ殆ど苔に埋れて居りながら、其梢には、うるはしき、みづ〳〵したる花を付けますから、瓶に挿しますにも、矯方など、少しはむりが有りても、恕して居りますが、桃に至りましては、其邊大に趣を異にして居ります、例へば梅に道士の高風あらば桃に仙女の嬌笑ありとも申しませうか、桃の方はどこ迄も穩に少しも覇氣の見えぬやうに致さねばなりませぬから、矯も只一


梅　五本

所にて强くせず、少しは罅の間を長く見て、いはば圓滑に致し、又枝端も只勢にのみかられず、少しく手を入るやうに致すと自ら穏なる振りが見えます、併しそこにむづかしきは、只々穏に圓滿にとのみに心をかけますと、惡くすると只勢も何もない、如何にも艶めかしき、賤しきさまに陥りますから、よく〳〵其邊に心を用ひたいのであります、また梅には、木池と俗に申しまして古木の大なるを用ひまして、それは若枝、氣條などをあつかふ事がありますが、桃の方はさやうの事は致しませぬ、又其他大體の形式に於きましては、さしたる變りはありませぬ、それを一見して分るやうに挿すのでありますから、其邊は到底くはしく文字の上に現はす事は出來ませぬから、玆に重ねて梅の圖をも挿入致しますから、双方圖によりまして、桃と梅との區別を御參照ねがひます。

桃　七本



桃は本花、又は低ながしに適しますが、高、中お

がしにはよくありませぬ。

又玆に一つ注意致して置かなければなりませぬのは、東京の花は、開く所によりますれば、三年毎に枝を切るといふ事でありますから、其枝の振りが、誠に惡しく、ともすれば優美なる所を失して朴訥になり易く、さなきだに桃はよき花が挿け難い所に、いよ〳〵むつかしいのでありますから、花を買ふにも其心して、小枝の多く長さやさしげなるを撰む必要があります。

裁縫

横濱高等女學校裁縫教師 中村むめ子

一つ身綿入縫方順序

表身頃の兩脇を縫ひまして、前巾と抱巾の印を付け、衽と揃へまして針を刺し、左右共裾口より衽下りの處迄縫ひます、折は衽の方に返します、次に表衿に裏衿をはぎつけまして、折は裏襟の方に返し、躾をかけます、それから襟を付けて、折は襟の方に返します、次に裏を表の樣に、脇を縫ひ衽を付けましたら、表を前に裏を向ふに裾口を合せまして、其處を縫ひます、裾は左右共裏を前にして縫ふのであります、縫目はきせをかけて、表の方に折り表から躾をかけ、又裾下にも躾をかけます、次に表の袖を付け、又裏袖を付けまして、折は表は袖の方に返し、裏は身の方に返します、而して折目々々を正くし、夜具疊にして置きます。

綿の入方

始め袖口綿と、袘綿とを揃へて置きまして、裏は疊んだまゝ表を伸し背を出しまして、其上に綿を丈より二寸位づゝ長く置きまして、袖口と裾口に先きに揃へて置きました、袘綿をくるみ、綿の上

に裏を伸し、縫目をよく揃へまして、裏の前身に綿を置き、表の前身の方から袖に手を入れまして、袖口と袂とを持つて表を引返し、裾口も表の前から手を入れまして、脇縫と褄先とを持ちて引返します、而してよく引合せます。

絎方

袖口を四分折りまして、針目を一寸位に、表に出る針目は少さくしまして、綿をくゝり、袖袘い出を二分と極めまして、袖下の縫目を合せ、表の方の少しゆるむ程で絎けます、それから八つ口を絎け次に裾綿をふくめて、袘綴を致します。



だいどころ

惣菜種々

石井泰次郎

たんぽゝの汁

これは三月三日の惣菜にいたしますつもりで採合せましたのです、まづ蒲公英の葉を洗ひまして、摘みまして、それを湯を煮たて鍋の中へ入れてざつと湯煮しまして取上ておきます、味噌は合せ味噌汁ならば白味噌百匁と赤味噌百匁とを合せてといつて、まづ白味噌をすりはちで摺、次に赤味噌を擂盤ですつて、味噌こしでも、又馬尾篩にて裏漉しでもよく、さて共に合せて鍋の中でといて、煮るのです、又赤味噌汁にすれば、赤味噌八十匁

に白味噌二十匁をすりませて仕立てる、煮だし汁なれば(岡崎みそ)三州みそを以てこしらうるなり、其仕立方はみその固りを器に入て水をかぶるほどひたして、暫くして、杓子にてつきてくづして、鍋に入て水をまして煮たつる時、かつぶしの煎汁から有らばその糟を入て、煮こみてよし、能く煮て、馬尾篩にて他の器の中へこしこむべし、是を煮こしといふなり、さて汁の加減を見はからひて、からくなしと思ふほどを程度として、其中へ右のたんぽゝの湯煮したりしを入て、ざつと煮て椀にもるべし、上より水にときたる辛子粉をおとして出すべし。

即席のわんもり

これも三日の日の少し御馳走めかした物なりまづ半ぺんをひしなりに切て種とおすべし。取合せには、有合せたるわらびに、松茸(しはづけ)などよし、此時はわらびを鉢に入て炭火の灰を入、上よりわつき湯をつぎいれ、一夜ほどおいて、翌日取出して洗ひ、湯のなべへ入まして湯煮するので、湯煮したらば水の中へ取わげて入おくのです、松茸は鹽を出すためて、鍋に湯を入て其中へ入れゆにをします、二度湯をかへて湯煮するのです、切方は笠のふちを庖丁刀でとりまして、くきの皮を一皮むきまして、下のかたい所を切去りまして、たてにうすく切てよろしいのです、これを椀のつゆの出來たのに入て出します。

椀のつゆは、煎汁四合に醤油一匁八勺みりん一勺二勺食鹽五分の割合にていかにも拵へるのです。

さて菱形のはんぺんは湯にてあたゝめをき、他の物はつゆをわけて小なべの中で煮て椀にはんぺんを盛り、他の物をもりて、上からつゆをいれゝばことによろしうございます。



清國見聞談（承前）

阿多廣介

船客は百名斗りで大方は支那の苦力で有ましたが、突然一人の日本婦人が面會に參られまして吃驚しました、其人は今村けいと申す人で、杭州の日本居留民の雇として、女醫者を開業して居るといふ事で有りましたが、段々話しました處が、實は吾輩の甥で杭州に留學して居つた者が、大病に罹つて其れを長崎まで送り届けに至つた、其の還りだといふ事が分りました、始めて甥の病氣の有樣を承知して驚き、且つ今村氏に感謝する次第で有りました、今村氏は年齢三十許りに見受けましたが以前に東京の濟生學舍で醫術を學び其後或は看護婦となり或は開業し種々の困難を經驗せられし結果大に奮發して一ケ年前より杭州に於て開業し、日本醫術を以て先づ清國婦人の病を療治し漸次信用を得て其の家庭の事情を明にし懇意を結んで、進で家庭の改良、女子教育の進歩を謀らんといふ大決心を有つて居らるゝさうで有ます、女史は中々活潑で所謂男勝りで男女同權論も唱へ兼ねまじき風でありますから批評もありましようけれども單身異域にありて女性の身を以て獨立營業し仁術を施さるゝの決心は感心しました、何卒女史は其一身を愼み肝永くして成功せられんことを希望する次第であります且つ又女史の話に、最初は清國婦人の診察を乞ふものは皆無で有つて殊に婦人局部の診察は中々許さなんだけれども段々苦心

して、今日では百名位の患者を引受けて武林門外の居留地に出張所も設けて居りますがその患者は主にヒステリー的の病氣ださうです、其のヒステリーの原因は女子壓制の結果、女子は殆ど外出を禁せられ恰も籠の鳥の如き有樣で有るのに、男子は不品行外で淫樂に耽る爲めに家庭が紊亂するから自然婦人は幽鬱して病氣を引起すのが多いとの事で殊に中等以上の婦人に多いとの事であります實に可愛想な事ではありませぬか、されば我邦の婦人諸君も少と遠大の希望を以て對外思想を養成し同性隣國の誼を以て彼等の窮状を救ふは、人世の義務でありますのみならず愉快ではありませぬか、今は下等なる醜業婦どもが外國にありては日本婦人を代表して居りまして國の體面を汚して居る次第でありますから今後の敎育あり見識あり技能ある婦人方が大に奮發せなければならない事と考へられます。

かくて十一月一日の午前十二時に杭州城武林門外の拱宸橋といふ處に到着しました、夜間の事でしたから仕方なく、船中に一泊して夜の明るを待つて、大東汽船會社の支店を訪問し、民船を賴んで參りました、軈て幅五六間の運河を迂回して桑林麥畑の間を上りましたが、一時間許りすると遙か向ふに、五六艘の民船が止まつて、進航の途なき有樣でありましたが、何事かと思うて上陸した處が、其處には一種のインクラインがありまして、即ち後に挿畫に示す如く、十八許りの苦力が機械を以て船を引上げ、そして二三間高き運河に移らんとする處で有りました、實に粗末で且つ發達せざる、インクラインで有りますけれど、一種奇妙の掛聲を出して五分間位で一艘の船を引上げました其處には露店に飲食物を賣て居りましたが紳士

も官吏も素麪や天麩羅の如きものを立食して吾等の周圍には土人が附纏ひ五月蠅く感じました、我邦に於ても能く外國人を見ると附纏ひますが、之れは甚だ迷惑なものでありますから謹まなければならぬ事と存じます、其處を上つてから數箇所の厘金局を經過して更に進行しますと、城壁が向ふに見えました、其城壁に沿うて幾つかの水門と石橋の下を經過して、漸く十時頃に日文學堂の下に到着しました、其間船舶の往復織るが如く兩岸は大厦高樓相並び外觀甚だ立派なる城廓でありますけれども濠水は赤褐色を帶びた止水で、一種の臭氣を發し其中で衣服飲食物を洗て居るのは不潔に堪へませぬ、日文學堂は東本願寺の僧侶又學士伊藤賢道師が校長として、師範部、中學部、小學部を設け支那兒童に日本語や、新學を教授せられる學校で學生が百名以上も有り、日本人の敎員も五六名でして、其內に女の先生が三人あります、其處に立寄りまして、色々御世話を願ひ案內を賴むで、友人の陸軍大尉齋藤君の處に參り、逗留する事に致しました、此の學校は本山より僅少の基本金が下附してあるそうでありますけれども、中々其れにては支へられませぬから、校長始め敎員諸氏は或は他の學校に普通學や語學を敎へ、或は出版印刷業などを營み、苦心慘憺自營の道を求め、漸次隆盛に赴くそうでありますが一通りの事ではありませぬ、且つ我邦宗敎界本山などの布敎に冷淡なのは遺憾でありまして、大に同校に同情を表する次第であります、齋藤君は北淸事件前より、杭州の武備學堂の總敎習(敎頭)として、淸國浙江省の士官養成に從事せられて居られ令名赫赫たるものであります、妻君も二年前から渡淸せられて、一人の娘さんがあつて、立派なる煉瓦造

の西洋館内に、和氣藹々一家團欒して異境に奉職せられて居ますが、既に最初の約束年限には滿ちたそうでありますけれど、同氏は己れの養成した學生の前途と同校の事を思へば歸國したくないとて更に任期を延期されました、之れも令閨の内助によりて一家團欒の樂みを海外に全うし得られるから自然歸國の念慮も起らぬ事と信じます、杭州府は浙江省の首府で、唐宋以來既に繁盛して其名天下に高く南宋の時代には永く國都となり、宋朝滅亡後も依然として繁盛を極め、海外にも其名を知らるゝに至り、其後浙江と福建の兩省を合せて、總督を置きし時に、其の總督は杭州に駐劄したので有りましたが、外國と通商を開くに當つて、福州に移したのであります、長髮賊の騷亂が起つて、終に其賊の爲めに陷いれられて數年間は全く、其害毒を蒙つて、殆ど全都燒土と成つたさうでありますが、今日は已に三十年も經つて大に昔の繁盛を恢復したさうです、地勢は浙江省の咽喉を扼して交通の要路に當り、東南は錢塘江を控え西は西湖に望み、湖南の山脈は城隍山及び吳山と合し、遙に西方天目諸山及び安徽省の山脈に接し、北は一帶の平野で直に江蘇省に連り、其間水路は縱橫に通じて、大に交通便利の處で有ります、氣候は春秋二季尤も長く夏季之に亞ぎ、冬は稍々短かい、春秋は降雨が多量で有つて、濕氣甚だしく、雪は屢々降りますけれども、五六寸しか積まないさうで有ります、夏は寒暖計が九十六度位に上つて、空氣が濕つぽい爲めに、大に住民が苦むさうで有ります、我所留地は武林門外に在りまして、尤も有望な土地で有ります、我國人にして相當の營業をなすものは殆どありませぬ、土人の風俗は一般文雅柔弱で、古來學者が輩出した土地で有ります

が、武勇を以て現はれたものは少うございます、此れこの地は四方の風景が殊に秀麗でありまして、文人墨客の賞遊に適合するが爲めで有りましやう、就中西湖の如きは其名、遠近に廣まつて、多く詩や歌に謳はれて有ります、從て土人は文學を好んで衣服態度に至る迄、何處となく優美であり、且つ外國人と親密に交際することを好むで、人情も輕薄でありません。

本府には巡撫、學政、布政使、按察使、鹽運使、などが此處に駐在して、諸般の行政を司り、且つ北京政府は滿州將軍を派出して、八旗兵を駐屯させて居ります、本邦の居留人民は領事館、學校教習、大東汽船會社員、郵便局員、醫師等凡て五十人位あります、其中に十數人の婦人も見えて居りましたが、官吏教習諸君の家族であります、歐米人は三十名斗ありまして、重に稅關吏と宣教師であります、學校は西湖の傍に蠶學堂がありまして、明治卅一年の創立で日本人が其教授をして居り、結果も大變好いといひます、武備學堂と日文學堂とは前一寸御話申たが、外に大學堂があります茲は校舍や名義は立派でありますけれど、學生は僅か三四十名で校長や教員など有名無實と謂ふても過言に非と存じます、病院は英國の宣教師の開業でありまして、市内四箇所に分院出張所を設けて居ります、之は慈善の目的で患者を收容して、常に百名以上の入院者があるそうです、其宣教師は四十年以上も居留して居るそうでありまして、年々本國から二萬圓余補助さるゝそうですが、中中人情風俗に通じ、勢力も少なからず爲めに政畧上に於ても實利上に於ても有力なものですが、現に西湖の傍には眺望尤も絶佳なる一つの丘陵を占領して、宏壯なる別莊を營んで居ります

が、此の如くに至つた原因は、根氣と金力の結果に外ならぬでありませうけれども、畢竟外國婦人は相當の教育を有し心身共に勇敢にて故郷に戀々たらず、此の如き危險なり不快なる異郷に長く逗留するをも意とせず、夫婦苦樂を共にし子女の教養にも他の手を借らず一家團欒の樂を全うし得る爲に、數十年間一意專心、斯業に從事して居るから永い間には成功するものと思ひまして、坐ろに我國民の腑甲斐なきことを嘆息するより外はありません、我邦女子教育に於て、大に寒心すべき事ではありませぬか、産物の重なるものは繭、生絲、織物、綿、米、扇子、茶、烟草、漆、藥劑等であります、絹織物は緞子、繻子、縮緬、二羽重、等が上等であります。

（未完）

養蜂の話

農科大學　稻光鷺水

蜜蜂を養つて蜜を採るといふ事は日本でも昔から行つては居ますが、日本では歐米に比べまして、何分にも、蜜の需用が少うありますから、今日まで人々から余り注意されて居ません、日本では單に藥用に致します位の者でありますが、歐米では、盛に此を菓子や料理などに用ひまして砂糖よりか遙かに上品なものと致して居りますのみならず、此を食膳に供しまして、誠に美味なものと非常に珍重されて居ります想であります。

然し日本に於きましても、改良巣箱といふが出來ましてからは、昔に比べまして大分盛になつた想でありますが、其れとても、内地の需用よりは、支那朝鮮に向て輸出する高が夥しいのでありまし

て、また〱、日本人は蜜蜂の結構なる味は知らないといつてよろしいのであります。

現に日本で養蜂業の盛なのは、信州甲州等の中仙道の山間僻地を旅行して見ますといふと、一農家の副業として、三十箱から五十箱位飼養して居る處は、間々見うける處でありますが、是から段段洋食などが流行するにつれまして、蜂蜜の需用も多くなるに相違はありませんが蜜蜂は其飼養法に於きまして、別段の手數のかゝる話でも何でもありませんから、御婦人方の御慰みに、果樹蔬菜園等に一箱なり二箱なり飼つて置きましたならば、春の花の頃から、可愛らしい蜂が花の間に舞ひ集つて、熱心に採蜜に從事するのを見ますのは實に愉快なる然も利益のある仕事であります。

米國は年中、雨は少し、氣候はよろしいといふ處で　養蜂業の最も盛なる處だ想でありますが、一農家で一萬から二萬以上の蜂の箱を所持せる豪農がある想であります。

蜜蜂は即ち英語で Bee 獨逸語で Biene と申すもので、動物學上は節肢動物昆虫類有刺類花集蜂大科採蜜蜂料採蜜蜂亞科蜜蜂族に屬する動物でありまして、昆虫類の中にても最も規則正しき生活を致して居るものでありまして誠に人間でも羞る樣な處があります。

蜂が人を刺すといふのはあれは人が已れを害しはすまいかといふ恐れがある一生懸命の時に望みまして護身用の劍を利用するのでありまして、こちらが靜かに致して居りますれば決して刺すものではありません、殊に蜜蜂なんぞは至つておとなしいものでありまして、一度刺したらば其劍は早や二度とは役に立ちませんから、余程蜜蜂自身に危險に陷りし場合、例へば人の襟の間に誤

つて入るとか、懐に入るとか致しますと蜂は自分の身が危いから致しまして人を刺して、私はあなたの襟の間に居りまして出られませんから出して下さいと頼むので、人は驚いて、アイタ、蜜蜂が僕の襟に來て刺した失敬なといふ處て狼狽して着物を脱ぎて、例の蜜蜂をつまみ出して『失敬な此畜生、人を刺した』といふ罪で以て無慘や蜂は草履の裏に葬られるのでありますが、全く人を刺して傷けようといふ様な悪意からでは決して無いのであります。

第一　生活の狀態

扨て蜜蜂の一家の内の生活の有様を申しますと、蜜蜂は大抵一箱に數千から數萬匹集りて一團體を形ち作りて居るものでありまして、其内には、女王（或は王蜂ともいふ）雄蜂（或は居候ともいふ）働蜂と此三種類の蜂が必ずあるのであります。

其一團體の内に置きまして、女王は必ず一匹しか無いのでありまして、他の蜂連中は皆此女王に從屬して居るのであります、女王と申しますのは雌蜂の殊に出世をしたものでありまして、色は黒褐色に艶のある、腹部は少し薄茶色を帶びて居りまして、翅は短くして腹の中央しかありません。

蜂王



女王の職務と申しますれば、毎日〳〵卵を產む事でありまして、此數萬の蜂群は悉く、此一匹の女王から出來たものでありますから、他の蜂は勉めて此女王を大切に致しまして奉戴するのであります。

雄蜂は一團體中で大抵數百匹位のものでありま

雄蜂



して、體格は女王より稍小さくして、色は黒で翅は腹部よりも少しく長く尻に刺なく致して、此れは女王と交尾するのが單に其職分でありまして他には何にも出來無いので、毎日〱遊んで居て、蜜を貪食するばかりでありますから所謂居候と申すのであります。

其れて交尾したあとには何も用事がありませんから、秋の初め頃になりますと、働蜂から咬み殺されてしまうのであります。

其れから次は働蜂の事でありますが、此れが一番大切な蜂でありまして、一群中に、一匹の女王と、

働蜂



數百の雄蜂とを除きましたあとは、悉く此働蜂なのでありまして、此れは、其性雄ともつかず、雌ともつかず、所謂男女中性のものでありまして、其形は小さく、色は褐色でありまして、蜜、其他の必要品の採集から致しまして、巣脾の造營、蜂兒の保育、其他一切の勞働は、皆此働蜂の職務でありますから、其働蜂の多くある程よろしいのであります。

偖て、此三種の蜂の間に關係と申しますものは、極めて規則正しいものでありまして、女王は即ち此數萬の蜂群の統御者でありまして、數萬の蜂群は極めて忠實に女王に仕へまして唯命是れ從ふで以て、一生懸命に勞役に服するので、決して〱、女王の命に反する様な事は、夢にも御座りません。

女王がまだ王臺にありまする間は、他の蜂は交々女王の傍に來まして御機嫌を伺ひ、丁寧に看護をなし、又女王が王臺を出ました後には、女王が狹き道を通りて産卵を初めますれば、他の蜂群は女王の通り道をあけて、又は、鷄卵や牛乳こそ與へぬ、蜜蜂にとりては此上もなき、色々の滋養物を捧げまして、樣々に女王の心を安んずる樣に慰めるやら、其情の懇篤なる事にをきましては、實に實に人間の豫想外でありまして、一見人をして、蟲類に耻る樣なる思ひあらしめるのであります。

ですから致しまして、若し女王が殺されるとか、或は死ぬるとか致しました日には、數萬の蜂群は、瞬く間に一匹も殘らず箱から出まして、何處ともなく逃げて參りまして箱を空に致すのであります、女權が强いと申しましても、此蜜蜂世界の位に女權の强い處は恐くありますまいと思はれます。

（未完）

上巳考

いく子

雛遊の起因

從來我國に行れて居りまする一般の式典は、多くは漢土から渡來したのでありまして、此三日の節句なども、やはり其一つであります。併し吾國にても、隨分古い頃より行はれて居るやうです。即ち西宮記の年中行事三月三日御燈の條に

延喜二年三月二日內藏寮請レ被レ定下可レ奉二御灯一寺上依、不レ憚二舊例一、召二右大將一問レ之、答曰貞觀以來靈巖寺、寬平物用二月林寺一、後圓成寺云々因二舊例一於二靈巖寺一可レ奉狀仰畢

此貞觀は清和天皇の御代、寬平は宇多帝、延喜は

即ち醍醐の御代の御事にて其頃また靈嚴寺に定りましたのであります。扨其御燈といふ事はどういふ事かと申すと、公事根原の御燈の條に『是は天子北斗に燈明を奉り玉ふなり、昔は北山靈嚴寺などいふ所にて、高き峯に火をともして、北辰に供せられけるよし云々、今は御燈の義は絶えて此よしの御秡ばかりぞ侍る』云々とありまして三月三日には、朝廷に御秡の式がありました事は確であります。そこで昔は陰陽師などいふ者がありまして、凡て秡などの事を司りて居りました。源氏須磨の卷にも『けふなん、かくおぼす事ある人はみそぎし給ふべきと、なまさかしき人のきこゆれば、海つらもゆかしくて出で給ふ。いとおろ



そかに軟障ばかりを引きめぐらして、此國に通ひける陰陽師めして秡せさせ給ふ、舟にこと〳〵しき人がた乘せて流すを見給ふにも云々』又後水尾院年中行事三月三日の條 前畧 齋院御湯殿上日記には己の日にあらざる時も三月三日には御人形參りて御撫物はひとへ添へて出るなどやうにあれど、此比はさして見えず己の日ばかりぞ奉る、慶長の比まで賀、安の兩家云々 陰陽頭は人形を奉らで叶はぬ者なれど傳受なければ、是非なくて、今は安家のみぞ進上す。人形昨辰進上して此御所にて衣をきせしむ。是女中のさたなり。其やう、ねり絹を方寸餘に裁して、角懸て刀にて穴をあけて、人形ひとつ〳〵をさし入、絹を刀目よ

り二つにおしとり、重ねて結ぶなり。かくの如くして御枕かみに、其夜は置きて翌日己の日の己の刻に申出せば出さるなり。是も近き比までは撫で物はひとへそひて臺ばん所の妻戸より内侍出す、など御湯殿上の日記にはあれど、今はさ程までの事なし。此月は己の日毎に人形參るなり云々』丁度現今六月十二月の兩度産土神の祠宮より大祓の形代とて人の形に紙を切りましたのを持て參りますが、あれはやはり古來の遺風であります。尤も今も大祓は宮庭の御儀式であります。其形代を以て各人身體を撫で、息を吹きかけてそれを己の代りとして罪咎をそれに持たせて河海に流します。そこで是を昔より人形とも形代とも撫物とも申します。尤も前に記しました御湯殿上日記、などの模樣で見ますると、人形と撫物は別物のやうでありますが、今では全く一つ物となりて居ります。古への上己の祓も今の大祓と作法は全く同じ事であります。

扨其上己といふのは上の己の日を用ひたからで、又三月三日といふは、五月五日、七月七日、九月九日など、同じく陽の重る日には高き所に登り、天を祭れば災厄を免るといふ事が、もろこしにある。其三日と己の日とを一つにして名は上己と申して日は三日を用ひましたものでありませう。併し德川の初め即慶長の末元和寛永の頃は、既に己の日のみ奉りたる事は前の日記にて知れます。扨また其三日を現今にては女子の節句として雛を飾る習慣になりて居りますが、此起因につきましては、種々と說があります。大巳貴、少彦名の神を祭りたのだとか、應神天皇と神功皇后だとか、或は聖德太子がどうだとか、こうだとか確からしく、書ましたものもありますが、いづれも餘り信

じられませぬが、兎にも角にも女の子供が雛を玩ぶといふ事は古くより行れまする事と見えて、枕草子、源氏物語など其他古き物語、日記類には多く見えてあります。其一二を申せば、うつぼ物語右大將の東宮の若宮に、もてあそび物奉り玉ふ條に『大將みづからまかなひして宮だちに物くゝめつゝ參り給ひて、車どもをひいなにねのひせさせて』とあり、又源氏若紫の巻に『ひいなどわざとやども造りつゞけて諸共に遊び玉ふ』とあり是は冬の初めの事、又紅葉賀の巻に『いつしかひいなをしすゑてそゝぎゐたり、三尺のみづしのひとよろひに、品々しつらひ据ゑて、またちいさきやども造り集めて、奉り玉へる處せき迄あそびひろげ玉へり』云々是は正月一日源氏の君朝拜に出で給ふ日の事であります。其他『ひいなの中の源氏の君つくろひ立てゝ』云々など處々に多く見えてありますが、只子供の玩具になりて居て少し成長すれば用ひなかつたかと思れますは、是も源氏の内に『すこしおとなびさせ給へ十歳に余りぬる人はひいな遊びはいみ侍るものを』云々とあります。さればにや枕草紙のすぎにし方こひしき條に『かれたる葵、ひいなあそびの調度』云々とあります。かやうな工合に恰も現今の子供が姉様事をして遊ぶのと少しも變りはありませぬ。是が上巳に雛を飾る樣になりましたといふのは、何時からでありますか明かに分りませぬが、或は前に申した上巳



田舎の仏節句礼

の秋の人形を混じまして、三月三日に雛遊びを致すやうに成たものではありますまいか、是は私の臆説を述べるまでの事で、猶大方の高説を仰ぎたいのであります。又上巳に草の餅を食すると申事も諸書に見えます。手近くは公事根源などにもありますが、其餅にまぜる草と申すのは、はゝこ草と申のを用ひたとあります。只今では艾を用ひますが、其はゝこ草のはゝこを母子と訓じ、母子共に全きを祝するなどの處より遂に女の節句と申す樣になりましたものと思れます。

此日を月令廣義などには、桃花の節と申てありますが、それは時が桃花の時であるからでもありませう。枕草紙にも『三月三日うら〳〵と長閑にてりたる桃の花のいま咲きはじむる』云々など申てはありますが、それのみならず、此日には桃の酒を用るといふならはしもあります。即ち後水尾院年中行事にも『夕方の御祝あり、女中今宵の御盃より（中略）勾當内侍まで天盃つたふ、三獻目銚子に桃花をきざみて入る』云々とあります。桃は惡氣を拂ふと申傳へてありますから起りました物と思ひます。元來桃は仙境に生ずると申て、彼支那の昔語には西王母といふ仙女が三千年に一度實る桃を奉りましたとか、それを三箇取りて食した侍臣がある、それが東方朔とて九千年の齡を保たとか、申傳へてありますが、それは外國の事として、我國にも桃は惡魔をはらふといふ事が、古事記などにも見えてあります。即ち神代の卷に、伊邪那岐命黄泉國より逃げ還ります時、御跡を多くの惡神が追ひ奉りました、すると命は御佩刀をぬき持ち、また種々の物を投げつけなどし玉へども、猶は追來りて黄泉比良阪と申處まで追ひて參ります。其時黄泉比良阪の阪本にある桃の子を三箇と

りて投げ擲たせられますると、忽ち惡神共は逃げて返りました。茲に『伊邪那岐命桃に告げ玉はく汝吾を助けしがごと葦原中國にあらゆる美くしき青人草の苦瀬に落ちて惱む時に、助けてよと告げ玉ひて、意富加牟豆美命と告け給ふ』云々とあります。

以上さま〲の事からの集りて起りました節句でありますから、今に至るまで雛の前に供師の草の餅、御酒に桃の花をさし、瓶にも桃を挿すなどの事があります。兎にも角にも此節句の飾雛の中でも、俗に有職雛など申すものは、古代の服裝、裝飾などを知るに便利なるもので、幼きうちより目にふれ慣れゝば、自ら有職故實に通せしむる手段として、考古的の思想を發議せしむる一端となりますから、なるべく此雛遊びは捨てぬやうに致し度きものと思ひますから、聊か卑見を述べて、猶大方の御教へを仰ぎたいのであります。

○口繪の解

千六百四十九年一月三十日英皇チャアルス一世斷頭臺上の露と消ゆ、オリヴアー、コルンウエルの共和政府を組織するや、法を嚴にし刑を重うして、王黨を糺治すること甚だ急なり。是に於て王朝恢復の志を抱くもの皆その跡を晦まして各地に逃避し、偏へに時機の至るを待てり。コルンウエル乃ち監官偵吏の罩を放ち、王黨の妻子を檢擧して、其の所在をたゞさしむ。此畫は即ち此時の事情を描きたるものなるは、その題して、"And when did you last See your father!" といへるにて明かなり。見るも恐ろしき牛首馬首の輩に取まかれたる一兒童の如何に凜然として犯すべからざる風采態度を備へたるかを観よ。その背後に大いなる鎗を持ちたる兵士に擁せられて、頭を低れ袖を掩へる少女の姿の可憐なるよ、こは思ふに小兒の姉なるべし。又室の隅閾の邊に立ちたるは、この姉弟の母なるべきか、最愛の兒女が役人等の口に乘せられて、夫の消息を漏しはせぬやと氣遣へる樣の自づと面にあらはれたる風情あはれなり。原畫は千八百七十八年、始めてローヤル、アカデミーに陳列せられ、縱四十二インチ横七十八インチを有する大幅なりといふ。

○露の干ぬ間（つゞき）

後藤紫浪 抄譯

秋の或る夕暮、子等は其友どち打連れて、房吉の許おとづれぬ、かの榛の森に木の實拾はむと誘ふなりけり、いそがはしき身なれども、袖引きて强ゆる無邪氣に、いなみ難く、請にまかせて共に行く事とはなしぬ、――いとし思の其人も共に行けばにや。山も半腹と思ふ頃、軟弱き女の身の、はや疲れ果て、しばし憩はせ給へと云ふに、さらばとて枯芝の上に、お淺をいたはりつ、休息ける、心勇める子供等の、など共に止まるべき、嬉しげに呼びかはし、谷間を深く分け入りて、落ちたるは拾ひ集め、枝なるは折りてもぎとりつ、彼方此方に叫ぶ聲、げに若駒の、長閑けき春の野に嘶ぐがごと。何の思ひに沈みけむ、お淺の側にをることをさへ打忘れて、腕拱ぎ居たる房吉、俄然、首をあげて云へるやう、「聽かれよ、彼方の谷かげに、樂しげに呼びかはすあの聲を」されど、一言の應もなきに「疲れてか、お淺どの」答はせずて、顔に袖あてゝ淚ぐむを見て、房吉も今は、聲さへあらく、「はや、船は沈みしぞ、嘆くとも無効なるべし、何とて、我と我身を殺し、子等をばあはれの孤兒とはなさむとなさるゝにや、」此時お淺は始めて口を開き「妾はその事思ひ居るにはあらず――されど――かの樂しげの聲聞きて、たゞ何となく心悲しうなりまさる、」房吉膝を進めて「十年も過ぎて音信なき人は死にたるものと思ひ棄て給へ、生きて歸るなどは思ひもよらず、……扨て、お淺どの、我この胸の苦痛汲みてたべ、女は物の覺知、鋭敏とかや」、お淺の身の悲境を見るに得堪へず、且つは子供等の今は眞實の父の如く睦るゝを機に、妻となりて、心樂しく來む年月を暮さずやと語り出るなるその情ある言の葉に默しかねて「けふまでの御情のほど、幾世をかけてわすれ侍られど、貞女は二夫に見ねずとかや、……歸るまじとは思へども、若しかへり來ば如何にせむ、せめて一年ばかりは待ちて給へ、一年は夢の間ぞ、もしや音信もありやせむ、」夕陽の光薄れ行き、墓地のわたり小暗うなり初むるに驚き、夜に入りなば、身の害ともなるべしと、お淺が身を思ひやり、子等を促して家路を指して歸りけり。

家の業、あまりにせわしくて、契ひし言葉のまだお淺が耳には殘り居ると思ふまに、はや一年は廻り來て、又もや木の實拾ふ秋の末とはなりぬ、待ちつくしたる房吉の來て、先つ日の返言求むるに、「はや、一年とはなりにしか、身のひまなくて、未だ、心定めざれば、猶一月計り許してよ、」日毎、おとなへ行く房吉が姿を見るにつけ、其胸の切なさも計り知られて、心は千々に碎くれど、これかれ據言して日を經る間にも、冬と過ぎ春と去りて夏も初となりたり、心の亂れ烈しくて眠られぬまゝ、神の御告を祈らむと伏戶を出でゝ燈を點し、聖書開き指をあつれば、「椰子の木の下」と讀まれたり、繰り返し〳〵考ふれど、其意味を解しかねて思ひになやむ折しもあれ、最愛し夫の猪之助は椰子の

木陰に坐り居て、其後には、御光きら〱身より放ち給へる御神の立ち給ひけり、「こは如何に」と叫びし我聲に目覺むれば、あはれ南柯一炊の夢、思へらく「我夫は逝かれたり、神に侍べる身とはなられたり。

其翌朝よりお淺は、家に居るも、戸外を行くも、獨りを厭ふ身とはなりぬ、歩めば足音の近寄る心地して、何處よりとは知られねど、坐れば囁く聲の耳にきこゆて、何事をか分かれども。

☼　☼　☼　☼

そも猪之助は今、何處の空にか在る、幸運丸に乘り込みて、ビスケー灣にさしかゝる頃は、荒波いたく打寄せ來て、船は幾度か覆らむとせしかども、辛らくも免れ得て、赤道直下を經、喜望峰を廻り、再び赤道を過ぎし其後は、いつも順風を帆に受けて、恙なく目さす港に着きたれば、それ〱業を營み、よろづ事濟みたれば、猪之助も子供等が爲にとて、珍らしき品々買ひ調へ、今は歸らむとて、船首を元の來し方に廻らして進み初めたり、見渡す限り海原は、平にて、浪も騷がず、風も吼らず、進み行く船に水切れて、折々は浪の白玉霧となりて飛び散るなど、いさましとも心地よし、猪之助を初め、船人等みな悦び、一日も早く故國に着かむと、指折り數へて樂しむ間に、風少し吹き起る、浪も立ちたれど、かばかりの事には慣れたる身の、心にも留めざるに、いよ〱吹きつのり雨さへ加はりて、恐ろしき嵐とはなりぬ、黑雲天を蔽ひて船路定めむ星の光も見ねず、船は浪と風とに弄られて木の葉の如く、暗礁！と叫ぶ聲するかと思へば、あなあはれ、船は碎けて水底深く幾千尋、沈み果てゝは流石の大船も今は影だになし。



船の破片に取り付きて救助を叫ぶは誰ぞ、猪之助と共に三人、終夜浪間に漂へし翌日、磯邊に折揚けられぬ、見れば和田津海の果の無人島、海に向へる山の麓に、草木枝集めて、雨風を凌ぐばかりの小屋を建て、木の實海草を取りては、露の命をつなぎ留めけり、されどかの嵐の夜半に、負ひたる傷の癒えやらず、五年計打なやみ、一人は日射病に犯され、共に限忍呑みて、南海の鬼とはなりぬ、

二人の友に先たゝれし猪之助、いまは優しき人顔見る由もなく、たゞ見るものは、尾上に高く繁る木々、枝もたゝに稔れる木の實、翔ける鳥、飛びかふ虫、あるは蔦かづらのはびこりて浪と爭ふなど、親しき人聲聞かむ詮もなく、たゞ耳に入るものは、數知れぬ海鳥の叫ぶ聲、岩に碎くる浪の音、小川にさゝやぎ、さては木の葉の風にさゝやくなど。

けふも亦、身を溶かす計りの大陽は、東の海より出でゝ中天高く登り、西の浪間に沈む、今宵も亦、千萬の星輝き渡り、夜の更け行くまゝに浪の音、ましても物凄し、――磯の岩の上に座を占めて帆影や見ゆるとながめ暮せしは、はや幾日、幾月、幾年ぞ、

身動もせず石の如かれば、人を恐るゝと云ふ蜥蜴も膝のあたりをはひありく、――歸り行く猪之助が姿を見るより、片言交りに物言ふ幼子引連れて、我家の門邊に出迎ふるお淺、あまりの嬉しさに、走り寄らむとすれば、何處の御寺にて鳴らすらむ、鐘の音するに驚きて我に歸れば、身はこれ元の如く、離れ小島の岩の上。

《つゞく》

智識の希望は富の渴望の如し、之を得るに從て愈々增加す。

スターン

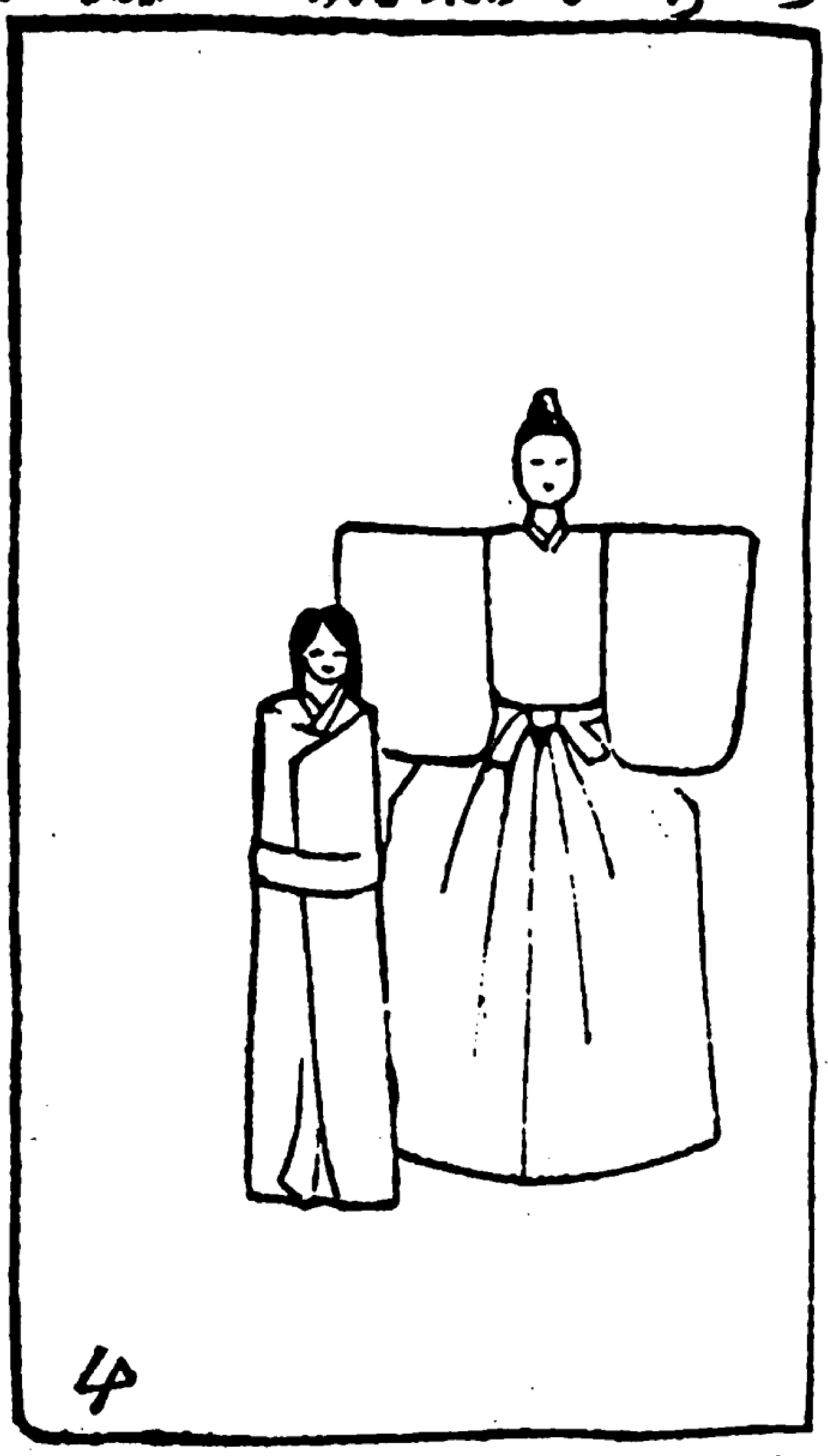
一日の旅（前半日）

超舟漁史

如月とはいへど、舊暦はまだお正月なかば、雪消の泥濘、やうやくかわき果てゝ、春なほ淺けれど、今日は紀元の佳節あるに加へて初午なれば、さて、穴守稲荷、川崎の大師、淺草の觀世音、龜井戸、湯島の天神などと、いとしき孫子に袂ひかれての參詣者も多かるべく、或は梅見をだしに、酒呑みに出かくる輩もあるべく、雅となく俗となく、老も若も、男も女も、なべて今日のよき日を仇に暮さじと、おのがむき〴〵、そんじよそこらに、杖を曳くもの少なからざるべし。それかあらぬか、我が社の上戸連は、同志をかり集めて、朝とく杉田地方へ繰りだしぬ。花より團子とは下戸黨のおきて、こなたは、木母より水邊の酉なるべ

し、そが用意の急がはしさ、最と可笑し。今更世の不平等をかこつにはあらねど、日頃、白水眞人の寵うすき無一物の我れ等は、流石此の一行に加はらん勇氣もなく、さりとて、下宿屋の樓上に趨磨然として、面壁九年ならぬ、終日の獨座も面白からず、殊に小人閑居の誡めもあれば、軒端につどひて樂しげに遊べる、子等の聲朗かに、雲に聳ゆる高千穗のなど、、唄ふ唱歌を聞き流し、飄然神田の寓居を出でしは、旭日輝々として、正に、皇城の上に昇る頃なりき。

いざさらばつゝくまで行け膝栗毛



いぎたなく、朝寢がちなる我れも、今朝は珍らしく、子供等に騷がれて、とく起き出でぬれば、與顏が嘗て、

うぐひすの初音は親の意見より
きけば身にしむ春の朝起と

いひし事ども思ひ浮べつつ、いつしか早や、丸の內に來りけり。一天朗々として東風軟かに肌を吹き御濠の水ゆるやかに、油を流すが如く、亭々たる古松いつもながら、君が八千代を祝し顔なる仰げば、千代田の宮のけだかくもいと畏し。

此の日御門の內外は、金冠紫綬の貴紳の肥馬に鞭ち、輕車を驅りて參賀織るが如し。思へば殆んど

三千年の昔、かしこくも、高祖神武帝の始めて國の御柱立てましてより末廣に彌や榮えまし行く基つ日の今日こそ、いとも目出度けれ、即ち跪づきて、遙かに豐明殿を伏し拜み、國風一詩を捧げ奉りぬ。

かし原にしらし丶御代の其の日こそ
つきせぬ國のもとゐなりけれ

かくて大路をへだて丶、小松原を横ぎれば、鐵馬に跨がりて、恰も百萬の賊徒を睥睨するが如く、威嚴凜として犯すべからざる、皇城鎭護のさま髣髴たる銅像、高く聳ゆるあり、是れ楠公正成朝臣なり。あはれ、正史を讀んで、元弘建武の條に至らば、誰れか、公の誠忠に感泣せざるものやある。夫れより歩を轉じて、詞兄青眼子の寓をた丶き、南郊の探梅にと相携へて新橋に向ふ。共にエンパネスを着流し、ステッキを打ち振りつ丶、木履をうがてる二紳士、山高の帽をいたゞき、有髯なるは、青眼子にして、無髯、眼鏡をかけたるは超舟なり。

汽車は出て行く、煙は殘る、のこる煙をながめて遲かりし由良之助をきめこむも、間に合はざれば初めより馬車と定め、泉岳寺まで乘りぬ。

やせがちの馬車馬いさむ春日かな

とは、一坪以内に十餘人も押込められ、身動きもならざる我等に、同情を寄してか、否か、痩馬ながら元氣に走り行く嬉しさ、辛うじて走り出したる駄句なり。

✿ ✿ ✿ ✿ ✿ ✿

泉岳寺は號を萬松山といひ、曹洞宗の巨刹、前は品海に臨み、後は森林相連れる勝地にして、宮城を去ること約里餘、高輪車町にあり。彼の有名なる赤穗四十七義士の墳塋は、實に此の寺の總門

を左折したる、丘上老樹欝葱たる兆域の中にあり
あはれ芳名千古にかんばしく、其の義烈を追慕し
て吊ひくるもの踵を接し、今に至るまで香花の絶
ゆる時ぞなし。いでや其の英魂を吊はんとて、至
れば、殘んの雪いまなほ墓碑の間、此處彼處に消
えやらで、昔しのぶの風情あり。若し三更月落ち
て、雪の光いよ〳〵白き眞夜中、墓畔に佇みて往
事を追懷しなば、うたゝ斷腸の情にたへざるべし

　忍ばるゝ四十七士やよるの雪

境内、別に一堂宇を存して、義士の偶像及び遺物
を蒐集し、廣く衆庶の觀覽に供しつゝあり、或は
首洗ひの井戸の、舊苔寂として物すごく、或は天
野屋利兵衛、宇都宮十兵衛等の義人、堀部妙海尼
の墓、さては瑤泉院殿が遺愛の梅など、何れ昔を
忍ぶ涙の種ならぬはなし。靑眼子詩あり。曰く、

　欝々佳城傍二石壇一。香烟縷々吊二忠肝一。
　墓門日々千行涙。二百年來未二曾乾一。

門前十數の商賈は、ひさぐに、昔義士の紋所を附
したる種々の器具を以て、參詣者に勸め、己れが
生活の料となし居れり。嗚呼義士の德また偉なる
かな。

◦　◦　◦　◦

德孤ならず必らず隣ありとは、古聖の後人を欺か
ざる詞にこそ。などゝ談り合ひつゝ、臺場も見え
て波白き品川町を過ぎれば、大井村に至る。此の
地、都門の南僅かに二里半許り、されど風俗いた
く異なり、外觀すら片田舍の漁村と、かはるこ
となし、路上忽ち吹き來る風の香氣を帶ぶるあ
り、梅か否。さらば其の香りの源を尋ねばやと
て、いそがぬ旅の氣樂さ、道を斜めに砂汀に立寄
れば、年は二八をやうやく一つこえし位の乙女と
其の妹なるべし、二人樂しげにかい〴〵しく、靑

海苔を干して居たりき。片手に、まだしづくの垂るゝ海草を高くかゝげつゝ、やよ是れなりけりと、我れを招きしは青眼子なり。予は取りあへず、

　青海苔や立ちよるまでの此のかをり

と、口吟たれど、是れよりも、更に我が心を動かしたるは、海人が姉妹にこそ。何ぞ其の様の天眞爛熳なる、其の髪のわかく、顔の黒さ、其の衣服のきたなく、言葉の飾りなき、おほかたは姫こせの常として、紅白粉やばらの香や綾羅のころも、綾錦などに身をやつし、却つて天眞の美を傷つくるもの多かる世に、さりとは、彼れ等の浮世をよそに、荒き波風を終日友として、おのが業をいそしみ、世に諂ふかざりなく、自然のまゝなるこそ床しけれ。なまなか、文を作り、横文字を讀みかぢればとて婦徳てふものは、うはの空になし玉ふ世の所謂海老茶式部とやらんよりは我れ等は萬腔の同情をおん身等によすものぞかし。青眼子吟じて云はく、



　僅出二都門一風色開。
　漁村無三復起二紅埃一。
　白頭翁與二紅顔女一。
　共弄二春潮一曝二海苔一。

予もまた一首浮び出でぬ

　はす海苔の香よりもまして床しきは
　　かざらぬ海女の身ぶりなりけり

かはり易きは、豈たゞ人の心と秋の空のみならんや、日本晴れの好日和も、いつしか雲あし短く、

今日も又

かすまねば美くし過ぎる春日かな

の玄蛙が句意に漏れずや、金烏何れにか飛び去りて、一天俄かにかき曇りたる日とは變りぬ。

曇らずば餘りよすぎる春びより

とは、前の霞まねばの句を眞似そこなひたるなり何事もへだてなく、水と魚との如き交り深き友垣、青眼子と我れとが今日一日の清遊、よし、年を重ぬるだに飽き足らぬを、日和わしければとて、こゝより空しく歸るも口惜し、いざ雨ならば濡るゝまでと心を定め、海苔の香と清き乙女とを後にして半道餘り海岸に沿ひて進めば、人家やうやく疎になりて、昔ながらの並木の老い松が、梢を吹き渡る潮風の音、いと凄し。このわたり今は昔徳川幕府の頃、罪人の命を奪ひ取りし仕置場鈴ケ森なり。彼の戯作者一九が筆を以て名だかき、彌次喜多かつてうたへるあり。

おそろしや罪ある人の首だまに
つけたる名なれ鈴が森とは

當時は、刑法なほ冷酷に失し、法官また私曲多ければ、徒らに無實の罪を以て、刑壇の露と消えしもの其の幾干なるを知らず、あはれ冤魂を去つて今や何處の空に迷ふらん。時は元錄十一年の昔、然も如月春なかば、情けふかき尼が、此れ等亡靈のために建てたる丈餘の墓碑あり。刻するに、南無妙法蓮華經の髯題目と、右左の兩側に佛偈一絶とあり。

一切業障海。皆從忘想生。
衆罪如霜露。慧日能消除。

碑後に特志の尼日健を祭れるほこらありて、其の側より湧き出づる清水いと清く、月あらば當に宿るべし、若し目を病めるもの、一度此の水を點

ずれば治する事うたがひなしとや、其の緣起を誌したる標札の終りに墨くろ〴〵と、

　うたがふな清水に月のかゝみてそ

の句あり。是れより奥に入らば六坪餘りもやあらん小島の、泉水を隔てゝ一宇の庵室と相對せり。獨橋あり、渡りて孤松の下に至れば、讀經の聲かすかに耳朶に逼り、哀れに池中の緋鯉すら血しほの如くに感ぜられぬ觀ずればうたてやな人の世、弱者は到底强者の餌たらざるを、得ず、此の間總て道理なく、一縷の光明なし。嗚呼已みなんかな往事汪々として感慨轉禁ずる能はず、折りしも朔風身にしみていと腥く、小雨さへ降り初めぬ。あはれ旻天なは涙あるか。靑眼子即ち賦して曰く、

　漁浦天曇海氣腥。　朔風吹レ雨入二寒汀一。
　一基碑石孤松下。　高勒南無七字經。

と、予は更に之れを十七字に譯して、

　鈴が森なみだや露のむらしぐれ

西洋婦人の新事實と新思潮

佐藤天風

△婦人の自轉車乘

英國にて尤も早く自轉車に乘りし婦人はベルナード、ヴエグリン夫人あり、夫人は曾て自轉車にて五萬哩の旅行をなせしといふ、驚くべき活潑なる婦人といふべし、近々同夫人の組織になる同趣味の婦人會は、倫敦にて大々的競走會を催うすと、同會の機關雜誌に見ゆ、彼我風俗慣習の相違之れを以ても明らかならずや。

△東歐に於ける婦女賣買

我國のみの事と思ひしに、近來歐羅巴にもかゝる野蠻なる事實あるは誠に奇怪千萬の事なり、東方

歐羅巴諸國は昔より美人の產出地あるが、十年以前より此地方の田舍の少女を欺きて連れ出し、莫大の利益を得るの商業を營むものあり、欺かれし少女等は言語も通せぬ外國に送り出され、或は巴理、或は伯林、遠きは南米のブラジル邊にまでも賣り飛ばされ、忌まはしき職業に其身の果敢なきをかこつに至るといふ、實に無慘極まる話なり、而して誘拐さるゝ婦人は重に妙齡なる未通女なりとぞ、ダブリユー、エー、クート、なる人痛論して嚴重なる取締をなさん事をコンテンポラリー、レビユーニ掲げたり。

△ジヤートルード、ベーコン孃の新研究

同孃は、常に社會問題に就きて有益ある研究をなせる人なるが、過般機械掃除人に就て趣味多き意見を發表せり、同孃の研究によれば此百年間に掃除人等の地位非常に高まれるは、之れ全く進化の理に基くものにて、始めは蒸氣汽鑵の内に居て瓣の開閉までせざるを得ざりしものが、今は決してかゝる苦しき仕事をなすの要なく、掃除の方法も亦簡便なる機械を用ゐてなすに至れりとて、かゝる乾燥なる研究中にも溢るゝ計りの同情を包みて報告せり、何事によらず西洋婦人の同情に富めるはいと嘉すべき事にこそあれ。

△婦人雜誌の口繪問題

フランセス、ロー孃は、現今少女に讀ましむべき好雜誌なきを嘆じ、自今其多大の經驗を振つて一雜誌を起すべしといへり、而して孃はまづ現在の雜誌に掲ぐるところの婦人の繪が、餘りに悲哀を帶べるが如くに描かるゝもの多きを攻擊して、子女を教育するの途にあらんとあせり、我國にても早くかゝる細密なる點にまで改良を促がすの程度にまで發達せしめたし。

△人類敎化の方法

敎育家にて社會學者なるウェルス氏は、標題の如き論文を揭けて始めには甚だ悲觀的に人類を觀察し、到底先天的の遺傳慣習に敎育が打ち勝ち難き樣に論ぜしが、漸々に論步を進めて如何にして人類を敎化すべきやとの問題に立ち入りて曰く、低き程度にてもよけれど、多少の愉快滿足を與ふべきほどの財產の餘裕なき人は、寧ろ子童を生まざるに如かず、强いて結婚し子を生めば、兩親の危險不幸なるのみならず、其子の發育上到底圓滿の結果を見るべからず、又其財產上の餘裕は其子の十二三才に至るまでは少くとも持續し得る望あるものなるを要すといへり、又氏の想理として官立の下等社會の家族を收容する大建築物を造らん事を希望せり、是れ其兒童に家族的の平和なる好敎育を與ふる所以なるを以てなり、されど斯の如き意見は氏のみの有する所にあらず、一般社會改良に熱心する溫和なる社會主義者の主張なる事にして、此傾向が歐洲一般に是認せられ來りし事は最早明白なる事實なり。

△マクスミユーラー夫人の事業

故マクス、ミユーラー氏は有名なる東洋學者にして、我國の學界が、氏に負ふことの多大なるは、均しく朝野人士の認むる處なるが、氏の未亡人は此程其夫の紀念として、氏の傳紀を書き、同時に氏の遺せし論文を一冊にして出版するといふ、誠に學者の夫人として　天晴耻づる處なしといふべし。

△英國諸皇子の御敎育

英國皇室の御繁榮は、今更ら云ふまでもなく、吾吾同盟國の人民の喜びとするところなるが、最近の同國の雜誌に、同國諸皇子の事に就て記載する

處ありしにより今茲に謹んで抄錄せん、皇子の御教育に就ては、畏くも兩陛下常に其任に當らせ給ひ、決して乳母の手に一任せらるゝことなく、而し玩具の類に至るまで決して他によりて求めらるゝなく、陛下躬ら御撰擇あるせらるるやに聞及ぶ、諸皇子は皆賢明に渡らせられ獨乙佛蘭西の國語にて自由の談話あらせらるゝと、殊に御會食の際は、母后陛下の思召にて皆々獨乙語を以て會話あらせらるゝ由なり、御幼少の折より乳母に其國々の人を一人宛付けをかせらるゝが故に、かくて巧に各國語を操らせらるゝならん、諸皇子の最も嗜好せらるゝは地理歷史にて、不思議なる事には未だ幼稚に渡らせらるゝヘンリー殿下を除きては、皆音樂には趣味を有せられざるずといふ。

家庭通信

封じ文

泉斜汀

喫茶店

第一信

○可憐の我が妹

門前に出で候時に、早や茗溪の流も暗く、晩鴉の聲も朗らかに、ニコライの塔に夕日射して、金色の光、目映きばかり。

黄昏れ懸る橋の上には、皆散會の貴女を乘せて轟々と渡る二頭立の馬車あり、轣轆と行く朧塗の腕車より、蜘蛛の子を散すが如く、三々五々打連れて、睦じく打語り行く、まだ幼の女生徒あれば、小生等と相前後して一人、一人、或は二人。西に東に或は獨語き、緘默して、蓮歩を運ぶ妙齡のも、見受け候。

憶ふに皆之家路を指して、何れも嚴めしき父が膝下、優しの母が膝許へと、其歸を急ぐ者。

然るにても、幸福なるは、茗溪の女生徒なる哉。歸らば今日の便を聞かんと待つ父母が樂しさは抑も如何ばかりと姉上は思召されしや。

子を持たぬ身の小生には、其の樂しさこそ存じ候はぬ。妹を持つ身の小生には、妹の可憐しき事、同じ妹を持つ多摩川君にも、又子を持つ世の他の親にも、讓るまじと存じ候よ。

然るにても可憐しきは、我が柳橋の妹ある哉。世には小生が妹の如き、不便の者も居り候よ。今柳橋に在る妹が、如何に兄の小生の、其の成功を祈り候、爲故とは申候へ。自ら進んで、年齒も行かぬ、可憐の身を憂き川竹の、流に沈めて、紅燈の下、綠酒の蔭に、立ち、舞ひ、坐りて彈き醉ひて曾つ戯れつゝ、知らぬ他人の間に交りて、心にて無き世辭愛敬を、數多の客に振蒔く時の、小さき胸の苦しさは抑も、如何ばかりと、姉上は推量られ候ぞ?

嗚呼然るにても幸福なるは、我が茗溪の女生徒なる哉!

姉上よ、希くは、他の生徒をも顧み給へ。更に又希くは、多摩川君の令妹をも、顧みて給はれよ。

——歸らば便を聞かんと待つ、其の慈惠深き兩親の在る。同じく成績を見んとて行きし、情深き令兄の在る。日毎に茗溪の女學校に、通學をなし得らるゝ、又今日の運動會に於ける。其のコチロンに於ける。ラシサスに於ける、クオードリルに於ける。——

豈麗しくは候はずや?可美しくは候はずや?!

姉上?!

素より多摩川君の令妹と、小生が妹とは、年齢も等しく候。容貌も等しく候。風采こそいと劣り候!

其も、多摩川君の令妹に、茗溪の女生徒として同校幾百人の他生徒に、比べて優るとも、劣りては、見え申さゞるだけの、氣品有之候へば、又、小生が妹には、柳橋の藝妓として、同じ巷の他の誰彼に、比べて見て優るとも、劣りては見え申さゞるだけの意氣を備へ居り申候

然のみならず。嗚呼是を他生徒に比べ見ても、彼方に優等の學力有れば、此方に天性の技藝有り、彼方に特待の資格有れば、此方に、無數の贔負有候

嗚呼、然りながら此の技藝、彼の學力と、此の贔負彼の、特待と較べ見て、如何ばかりの相違有りと、姉上は思召され候や!

然るにても、幸福なるは、茗溪の女生徒なる哉。
然るにても、可羨しきは、多摩川君の令妹なる哉。
然るにても、可憐さは、柳橋の妹なる哉。
然も彼方には慈悲深厚なる、父上母上さへ在し候にあらずや。更に又情深き兄上さへ在し候にあらずや。
豈啻に可羨しきは夫れ多摩川君の令妹のみならんや。
近くは茗溪全校の女生徒、擴くは東京全市の女生徒、皆然やうに候也。
然りながら何に就けても幸福なるは、世の身分在る人の娘に候。

◦ ◦ * * ◦ ◦ ◦

可憐しきは、身分なき我が柳橋の妹に候。
嗚呼、然るにても身分無き、否財產無き兄の、小生が不甲斐無さよ。

ずれば治する事うたがひなしとや、其の緣起を誌したる標札の終りに墨くろぐ\と、

うたがふな淸水に月のかゝみこそ

の句あり。是れより奥に入らば六坪餘りもやあらん小島の、泉水を隔てゝ一宇の庵室と相對せり。獨橋あり、渡りて孤松の下に至れば、讀經の聲かすかに耳朶に逼り、哀れに池中の緋鯉すら血しほの如くに感ぜられぬ觀ずればうたてやな人の世、弱者は到底强者の餌たらざるを、得ず、此の間總て道理なく、一縷の光明なし。嗚呼己みなんかな往事汜々として感慨轉禁ずる能はず、折りしも朔風身にしみていと腥く、小雨さへ降り初めぬ。あはれ旻天なは涙あるか。靑眼子即ち賦して曰く、

漁浦天曇海氣腥。朔風吹レ雨入二寒汀一。
一基碑石孤松下。高勸南無七字經。

と、予は更に之れを十七字に譯して、

鈴が森なみだや露のむらしぐれ

西洋婦人の新事實と新思潮

佐藤天風

△婦人の自轉車乘

英國にて尤も早く自轉車に乘りし婦人はベルナード、ヴエグリン夫人あり、夫人は曾て自轉車にて五萬哩の旅行をなせしといふ、驚くべき活潑なる婦人といふべし、近々同夫人の組織になる同趣味の婦人會は、倫敦にて大々的競走會を催うすと、同會の機關雜誌に見ゆ、彼我風俗慣習の相違之れを以ても明らかならずや。

△東歐に於ける婦女賣買

我國のみの事と思ひしに、近來歐羅巴にもかゝる野蠻なる事實あるは誠に奇怪千萬の事なり、東方

歐羅巴諸國は昔より美人の產出地あるが、十年以前より此地方の田舍の少女を欺きて連れ出し、莫大の利益を得るの商業を營むものあり、欺かれし少女等は言語も通せぬ外國に送り出され、或は巴理、或は伯林、遠きは南米のブラジル邊にまでも賣り飛ばされ、忌まはしき職業に其身の果敢なきをかこつに至るといふ、實に無慘極まる話なり、而して誘拐さるゝ婦人は重に妙齡なる未通女なりとぞ、ダブリユー、エー、クート、なる人痛論して嚴重なる取締をなさん事をコンテンポラリー、レビユーニ掲げたり。

△ジヤートルード、ベーコン孃の新研究

同孃は、常に社會問題に就きて有益ある研究をなせる人なるが、過般機械掃除人に就て趣味多き意見を發表せり、同孃の研究によれば此百年間に掃除人等の地位非常に高まれるは、之れ全く進化の理に基くものにて、始めは蒸氣汽鑵の內に居て瓣の開閉までせざるを得ざりしものが、今は決してかゝる苦しき仕事をなすの要なく、掃除の方法も亦簡便なる機械を用ゐてなすに至れりとて、かゝる乾燥なる研究中にも溢るゝ計りの同情を包みて報告せり、何事によらず西洋婦人の同情に富めるはいと嘉すべき事にこそあれ。

△婦人雜誌の口繪問題

フランセス、ロー孃は、現今少女に讀ましむべき好雜誌なきを嘆じ、自今其多大の經驗を振つて一雜誌を起すべしといへり、而して孃はまづ現在の雜誌に掲ぐるところの婦人の繪が、餘りに悲哀を帶べるが如くに描かるゝもの多きを攻擊して、子女を教育するの途にあらずとなせり、我國にても早くかゝる細密なる點にまで改良を促がすの程度にまで發達せしめたし。

雜録

△人類敎化の方法

敎育家にて社會學者なるウエルス氏は、標題の如き論文を揭けて始めには甚だ悲觀的に人類を觀察し、到底先天的の遺傳慣習に敎育が打ち勝ち難き様に論ぜしが、漸々に論步を進めて如何にして人類を敎化すべきやとの問題に立ち入りて曰く、低き程度にてもよけれど、多少の愉快滿足を與ふべきほどの財産の餘裕なき人は、寧ろ子童を生まざるに如かず、强いて結婚し子を生めば、兩親の危險不幸なるのみならず、其子の發育上到底圓滿の結果を見るべからず、又其財産上の餘裕は其子の十二三才に至るまでは少くとも持續し得る望あるものなるを要すといへり、又氏の想理として官立の下等社會の家族を收容する大建築物を造らん事を希望せり、是れ其兒童に家族的の平和なる好敎育を與ふる所以なるを以てなり、されど斯の如き意見は氏のみの有する所にあらず、一般社會改良に熱心する溫和なる社會主義者の主張なる事にして、此傾向が歐洲一般に是認せられ來りし事は最早明白なる事實なり。

△マクスミユーラー夫人の事業

故マクス、ミユーラー氏は有名なる東洋學者にして、我國の學界が、氏に負ふことの多大なるは、均しく朝野人士の認むる處なるが、氏の未亡人は此程其夫の紀念として、氏の傳紀を書き、同時に氏の遺せし論文を一冊にして出版するといふ、誠に學者の夫人として　天晴耻づる處なしといふべし。

△英國諸皇子の御敎育

英國皇室の御繁榮は、今更ら云ふまでもなく、吾吾同盟國の人民の喜びとするところなるが、最近の同國の雜誌に、同國諸皇子の事に就て記載する

處ありしにより今茲に謹んで抄錄せん、皇子の御教育に就ては、畏くも兩陛下常に其任に當らせ給ひ、決して乳母の手に一任せらるゝことなく、而し玩具の類に至るまで決して他によりて求めらるゝなく、陛下躬ら御撰擇あるせらるるやに聞及ぶ、諸皇子は皆賢明に渡らせられ獨乙佛蘭西の國語にて自由の談話あらせらるゝと、殊に御會食の際は、母后陛下の思召にて皆々獨乙語を以て會話あらせらるゝ由なり、御幼少の折より乳母に其國々の人を一人宛付けをかせらるゝが故に、かくて巧に各國語を操らせらるゝならん、諸皇子の最も嗜好せらるゝは地理歷史にて、不思議なる事には未だ幼稚に渡らせらるゝヘンリー殿下を除きては、皆音樂には趣味を有せられざるずといふ。

家庭通信 封じ文

泉斜汀

喫茶店

第一信

○可憐の我が妹

門前に出で候時に、早や茗溪の流も暗く、晩鴉の聲も朗らかに、ニコライの塔に夕日射して、金色の光、目映きばかり。

黄昏れ懸る橋の上には、皆散會の貴女を乘せて轔々と渡る二頭立の馬車あり、轣轆と行く臘塗の腕車より、蜘蛛の子を散すが如く、三々五々打連れて、睦じく打語り行く、まだ幼の女生徒あれば、小生等と相前後して一人、一人、或は二人。西に東に或は獨語き、緘默して、蓮步を運ぶ妙齡のも、見受け候。

憶ふに皆之家路を指して、何れも嚴めしき父が膝下、優しの母が膝許へと、其歸を急ぐ者。

然るにても、幸福なるは、茗溪の女生徒なる哉。歸らば今日の便を聞かんと待つ父母が樂しさは抑も如何ばかりと姉上は思召されしや。

子を持たぬ身の小生には、其の樂しさこそ存じ候はぬ。妹を持つ身の小生には、妹の可憐しき事、同じ妹を持つ多摩川君にも、又子を持つ世の他の親にも、讓るまじと存じ候よ。

然るにても可憐しきは、我が柳橋の妹ある哉。世には小生が妹の如き、不便の者も居り候よ。今柳橋に在る妹が、如何に兄の小生の、其の成功を祈り候、爲故とは申候へ。自ら進んで、年齒も行かぬ、可憐の身を憂き川竹の、流に沈めて、紅燈の下、綠酒の蔭に、立ち、舞ひ、坐りて彈き醉ひて會つ戯れつゝ、知らぬ他人の間に交りて、心にて無き世辭愛敬を、數多の客に振蒔く時の、小さき胸の苦しさは抑も、如何ばかりと、姉上は推量られ候ぞ?

嗚呼然るにても幸福なるは、我が茗溪の女生徒なる哉!

姉上よ、希くは、他の生徒をも顧み給へ。更に又希くは、多摩川君の令妹をも、顧みて給はれよ。

——歸らば便を聞かんと待つ、其の慈惠深き兩親の在る。同じく成績を見んとて行きし、情深き令兄の在る。日毎に茗溪の女學校に、通學をなし得らるゝ、又今日の運動會に於ける。其のコチロンに於ける。ラシサスに於ける、クオードリルに於ける。——

豈麗しくは候はずや?可美しくは候はずや?!

姉上?!

素より多摩川君の令妹と、小生が妹とは、年齢も等しく候。容貌も等しく候。風采こそいと劣り候！

其も、多摩川君の令妹に、茗溪の女生徒として同校幾百人の他生徒に、比べて優るとも、劣りては、見え申さゞるだけの、氣品有之候へば、又、小生が妹には、柳橋の藝妓として、同じ巷の他の誰彼に、比べて見て優るとも、劣りては見え申さゞるだけの意氣を備へ居り申候

然のみならず。嗚呼是を他生徒に比べ見ても、彼方に優等の學力有れば、此方に天性の技藝有り、彼方に特待の資格有れば、此方に、無數の贔負有候

嗚呼、然りながら此の技藝、彼の學力と、此の贔負彼の、特待と較べ見て、如何ばかりの相違有りと、姉上は思召され候や！

然るにても、幸福なるは、茗溪の女生徒なる哉。
然るにても、可羨しきは、多摩川君の令妹なる哉。
然るにても、可憐きは、柳橋の妹なる哉。

然も彼方には慈悲深厚なる、父上母上さへ在し候にあらずや。更に又情深き兄上さへ在し候にあらずや。

豈啻に可羨しきは夫れ多摩川君の令妹のみならんや。

近くは茗溪全校の女生徒、擴くは東京全市の女生徒、皆然やうに候也。

然りながら何に就けても幸福なるは、世の身分在る人の娘に候。

◦　◦　＊　＊　◦　◦　◦

可憐しきは、身分なき我が柳橋の妹に候。

嗚呼、然るにても身分無き、否財産無き兄の、小生が不甲斐無さよ。

其は、申上げ候までも然く、妹は、然こそ、小生が、今度の大學卒業をば、此上も無き父の遺產又此上も無き母の片身と、打喜び居り候はん。

然れど、小生には、可憐の、其の妹の身を救ふに足るべき、亡父の遺產も持たず、又、其の、可愛の妹の、志を嘉すべき、亡母の片身も持たず候。

――よし文學士の肩書はありても――其だけに猶、不甲斐無さ、小生が心苦しさよ。御察被下れ度……。姉上、小生には、姉上を措きて、外に此趣、申上ぐるに足るべき、未だ其人を得申さざるにて候。

美はしき振わけ髪を見るからに
　末長からんことをこそおもへ　もみ子



やさしき心

栗島狹衣

（上）

「お孃樣、お手紙がまゐりました」

と襖をあけて、召使のお袖が持て來た一封の手紙苟且の病の床にうつら〳〵として居た京子、喚おこされて、ふと美しい眼を睜つた、

「へえ、お手紙」

と差出されて、寢返りをうつて密と夫れを請取つたが、見れば音樂同志會の最終大會で、其招待狀と目錄が入て居た。目錄をあけて見ると

會場　上野公園東京音樂學校奏樂堂

第壹部

（一）歐洲管絃樂……………同志會々員
（二）ピアノ（詩の神）…………赤野芳太郎
（三）バイオリン、ピアノ合奏同志會々員
（四）獨唱（ピアノ）…………莊田　方子

などといふ洋樂で、ケーベル、ユングルといふ大家の名も見える。ところで第貳部は純然たる日本音樂であつて、

（一）管絃合奏　一弦琴　富山榮春
　　　　　　　尺八　　福田可道
（二）三曲　竹生島　琴　萩田杏代
　　　　　　　　　　同　山勢松風
　　　　　　　　　　三絃　高野濟春
　　　　　　　　　　胡弓　山室安世
（三）長唄　勸進帳　唄　芳村伊十郎
　　　　　　　　　　同　岡安喜代八
　　　　　　　　　　同　杵屋六郎次
　　　　　　　　　　三絃　杵屋六左衞門
　　　　　　　　　　同　柏扇左衞門
　　　　　　　　　　同　杵屋彌次郎

などであるのを、京子は順々に讀んで行て

（四）箏曲（惠の露）　同志會員　山浪千代子

とあるのに眼がとまつた、

『あゝ、山浪さんが、お獨りで演奏遊ばすのだ、あの千代子さんが』

と思はず獨言をいつて牀の上へ起上つて仕舞つた平生から交情よしの千代子、それが明日の音樂會で獨奏の晴れの業、何として京子が澄して居られやう、けれども何にも知らぬお袖は京子の樣子が變なので、つか〳〵と其側へ寄て來て

『お孃樣、どう遊ばしたので御座います。』

至て心配相な顏、

『袖や大變だヮ、あの山浪さんね』

『へえ、あの山浪のお孃樣、千代子樣で御座いま

せう」

「あゝ、千代子さんがね、大變な事になッちまつたわ」

「大變の事、御病氣ですか」

「いゝえ、琴をお獨りで遊ばすのよ」

一寸ともお袖には大變とは思はれぬ。

「へーえ、お琴を………」

と不思議な顔、

「あゝ、明日の同志會の音樂大會で、お獨りで琴をお彈き遊ばすのだよ、あの方お上手には違ひないけれども、氣が小さいやさしい方だから、場うてがしやアしないかと思つてね」



成程聞いて見れば、千代子に取つての一大事、親友の京子にも捨ておかれぬ事と、お袖にも初めて合點が行つた。

「屹度急に會の都合でこんな事になつたのだらうと思ふワ、夫れでなければ一度位は御相談もあらうし、先日お出でなつた時でも何とかお話があつたらうと思ふワねえ袖」

「そうで御座いますとも貴孃、あンなにお親しく遊ばしてゐて、そんな事をお隱くし遊ばす筈が御座いませんもの」

「あゝ、妾が病氣でないとお宅へ行て力をつけて上げるんだけれど………、仕樣がないねえ、屹

度あの方はハラ〳〵して心配斗りしてお出だらうと思つてよ、あゝ氣係りだワ」

「本當で御座います、御孃樣が御病氣でないとねえ」

お袖の返事は蓋したゞの通り一遍で、義理に相槌をうつたといふ許り、京子はもう居ても立つても居られぬといふ心配さ、其美しい顏には絶えず不安の色が浮んで見えた。兩人は小時顏を見合せて無言で居た、折柄門前へ車がとまつて、來客の樣樣、お袖は急いで取次に出で行つたが、跳るやうに驅込んで來て、

「おッおッお孃樣、山浪さんがお出でになりましたよ」

「えゝッ、千代子さんが、マア」

とそれは〳〵嬉し相

「失禮ですが此方へお通し申しておくれな」

（下）

「千代子さん本當によく來て下すッたのね」

欣びの色を滿面に湛へて京子は、千代子の顏を見た、夜具は片寄せられて桐火桶の前へお召の羽織を着て座つて居る。山浪は同じ年頃の容貌も何れ劣らぬ桃櫻で、色白の眼の大きい愛くるしい顏立紫色の矢絣くづしの糸織にカシユメルの袴、髮は夜會にして寶石入りのピンを挿して居るのが如何にも神々しい。

「どうぞ貴孃、お横になつて下さいましよ、御病氣の時に御無理を遊ばしちやア、却て心苦しう御座いますから」

と千代子は頻にいふ。

「いゝえ、もう愈つたので御座いますから、どうぞ御遠慮遊ばさないで下さいまし」

「本當で御座いますか」

小　說

『本當で御座いますとも』
と京子は快活にいつて退けて、
『マア今度は御名譽な事で御座いますね』
と改めて言掛けた、千代子は先方から言出されて氣まりを惡く思つたが、おづ〳〵
『萩原さん、どうしませう、妾本當に弱て居りますの』
『何の事で御座いますね、弱るなんて貴孃、斯うふ晴れの場所で遊ばさなくッちやァ詰りませんワ一生懸命で貴孃の名人なところを聞かせおやり遊ばせな、ハラ〳〵思ッちや、場うてがしますから澄ましてなさいましよ、何でも大膽にねえ、山浪さん』
『でも貴孃、妾の力ぢやァ手に合ひませんもの』
『忌、そんな事おッしやちやァ、そんな弱い事でどうなるものですか、威張ておやり遊ばせよねえ貴孃、妾一生懸命になつて御成功を祈て居りますワ』
一言一句に力を籠めた京子の詞に、千代子もそゞろに氣を引立てられた、
『本當に出來ませうか、ねえ萩原さん』
『まだそんな事をいつて入ッしやるの、出來るも出來ないもないぢやァ御座いませんか、貴孃位
、御力で』
『あらまア、飛んでもない事を』
ゝえ大丈夫です、妾請合ひますワ、あの、丁度長唄の澄んだあとで御座いませう、』
『えゝ、名人のあとで御座いますもの……』
『いゝえ、屹度甘く、まゐりますワ、長唄の賑かなあとへしンみりとやつて御覽あそばせ、どんなにいゝで御座いませう』
『でも貴孃、あの新作物で御座いますからまだ中

々手に入て居りませんの』
『惠の露で御座いましたッけね、貴孃の得意なものぢやア御座いませんか』
『どういたしまして、貴孃』
兩人は凝と見合つて笑を含んだ。
『山浪さん、貴孃本當に氣を揉んぢやアいけませんよ、妾が平生の樣だと參られるのですけれどまだ充分に晴ればれといたしませんから殘念で御座いますが今度は欠席いたしますが、どうぞ精一杯に遊ばして下さいましよ、』
『はい、有難う御座います、御出になれないのが何より殘念で御座いますが、妾はお出になつてると思つて、もう〳〵一生懸命にやりますワ』



これを聞いた京子の欣び、
『はア、どうぞねえ山浪さん、屹度で御座いますよ、マアそれで安心した』
心から安心したといふ樣子、嬉しそうに千代子の顏を見て、
『山浪さん、一つお浚ひ遊ばせな酷い琴ですけれど、手を馴らす丈けならどうやら斯うやら役には立ちますから』
『いゝえどう致しまして結構で御座いますとも、一つ拜借して聞ていたゞきませうか』
『是非』
『ぢやア、遠慮なしに致しませう』
京子はやをらお袖を喚んで床の間の琴を持出させ

小説

た。更紗の袋入のがやがて千代子の前へ据えられて地はお袖が掛てると、京子は蒔繪の小箱へ這入て居る、、、つめを出して千代子にすゝめる、千代子は會釋して夫れを篏める、一寸挨拶をして琴に對つた、伏目になつて、さら〳〵と一から吟へと調子を合せ初めた音色、天才のある音樂家が腕は違つたもの、わづかなところでも音色が冴え〳〵て聞える、やがて、ころりんと三本滑べらせてしやゝんと二本を合せて、

『めぐみの露のひろき野に、茂り合ひたる民艸の』

と彈き初めたが、何がさて箏曲專門で五ケ年間も苦しんだ修業は、少しの淀みもなく、美事に曲の妙處にと入つた、京子もお袖も恍惚として聞惚れて居る、

『治まる御代や明らけき、光を仰ぐ天津空、御稜威かしこき大君の、千代の壽祝ひをさゝめん』

と彈きをはつて、一禮した。

『マア、本當にお上手な事、ね、え袖』

『妾、聞とれてぼんやりいたしましたワ』

と京子もお袖も心からの褒詞、

『いゝえ未熟でお愧かしう御座います』

千代子はそと琴を押やつて、俛首て居る。

『山浪さん、その調子で遠慮なしに遊ばせよ、その位のお腕の方は日本にたんとありやしませんワ』

『あら又萩原さんお上手』

『何の御上手をいふもんですか、正直なお話しで御座いますワ』

『そうおッしやつて下さるのは貴孃許り、嬉しう御座います』

「いゝえ妾一人では御座いません、明日遊ばして御覧になれば、ちやんと判ります」

「どう致しまして、そうやすく〳〵とは參るものですか」

「またあんな事、屹度ですよ山浪さん一生懸命でね」

「はあ、屹度やります」

これは又凛々しい返答、京子は至極滿足した。

音樂同志會大會が開會された當日、池の端七軒町の家を病を押して出た京子は、音樂學校へ行つたでもない樣子で、程なく宅へ戻つて來たが、此時一卦の守札を携えて來た、それは不忍辨才天の成就の守であつたので、初めは左までに感じなかつた御袖迄が思はず其やさしい心に涙をこぼした。

迷信でもない少女の神信心は、果して驗が見えたであらうか、山浪千代子の非凡の才は程なく音樂界に喧傳されたといふ事である。

（をはり）

山里にかなふべき身をいつまでか
　くさ木にうとくなはすですべき

わしびきのやまをぬくべき手力を
　みにはおもはずこゝろにもがな

おさるとておのが友よぶにはつ鳥
　とりにもしかずひとのこゝろは

僧　契冲



明治三十六年紀元節御題詠進寫

社頭春曉

春のよの月またのこる神垣に
朝まうでしてうくひすのなく　高崎正風

あけぬるか鳥居の奥は霞め共
ほのかにひゝくやひらての聲　久我建通

朝日かけ未た匂はぬかみ垣の
松のこすゑにうくひすのなく　鍋島直大

隅田川また夜深きにさく花の
ひかりにわくるしらひけの杜　渡邊千秋

神垣にひく注連繩と見つるは
あかつき方のかすみなりけり　黒川眞頼

神垣の梅はさやかに見なから
かすみてくらきあかつきの空　津輕承昭

祝子か御鈴の音ものとかにて
かすみにしらむ神のおほまへ　松浦詮

有明の月も殘りてうちかすむ
神のみまへはのとけかりけり　渡邊清

有明の月影のこるかみかきに
にほへる梅のおもしろきかな　小畑美稲

稲荷山あけの玉垣ほの〳〵と
かすみなからに夜は明けに鳬　北小路隨光

ねくら立つ鴉の聲にかみ垣の
はなみえそむる春のあけほの　清岡長説

しら〳〵と白み初たる神垣に
ゆふしてなひきはる風そふく　竹屋光昭

さく梅の色みえそめて有明の
月かけかすむ日枝のかみかき　前田利鬯

畝傍山神の玉かきほの〳〵と
かすみなからに月そのこれる　植松雅平

畝傍山のとかに明て御神樂の
こゑもかすめる神のひろまへ　唐橋在正

詣てこし日枝の神垣白みゆく
春のそらこそのとけかりけれ　水野忠敬

神垣の梅もにほひてほの〴〵と
あけゆく峰のこゝちよきかな　清岡　長延

畝傍山霞のおくにほの〴〵と
みつ垣みえて夜はあけにけり　藤枝　雅之

ほの〴〵と空は白めど春かすみ
たちこめにけりあけの玉かき　小原　適

朝霞しらみそめたる神かきの
松のこのまにのこるつきかけ　千種　任子

春霞うすらきぬらしうねひ山
鳥居ほの〴〵みえそめにけり　小倉　文子

御社はそことわかねど森陰の
梅のこずゑぞしらみそめたる　園　祥子

御あかしの影も薄れて神垣の
うめかゝしらむあかつきの空　姉小路良子

暁のかすみのおくに千木高く
みえそめにけりうふすなの森　宮地　嚴夫

鶯のあかつきおきの聲もして
梅かゝきよしかみのみそのふ　坂　正臣

明方の霞をわけてみまつりの
庭にたつらむかみのみやつこ　小池　道子

春霞たなひきこめて朝つく夜
しらみかねたる神のひろまへ　津守　好子

天の戸の明る忌垣の御注連繩
ほの〴〵みえてかすみ棚ひく　北島以登子

曉のかすみと共にのこりけり
庭燎のけふりうすれなからに　荻原　嚴雄

君かよの千年をいのる神垣に
うくひすなきてよはあけに鳧　平田　三枝

みあかしはまた夜を殘す神垣の
おくにきこゆるうくひすの聲　植松　有經

畝傍山春のこのまに見渡せは
あけかたかすむやまと國はら　小出　粲

曉のねきかやひらてうつたへに
かすみとなりぬおほろ月夜は　中村　秋香

春の日の長鳴鳥ものとかにて
まつあけそむるかみの御門へ　小杉　榲邨

咲梅のにほひもみちて春の夜の
あけかたきよしかみの廣まへ　鎌田　正夫

鳥見山の昔をかけて霞むらん
かしのをのへのありあけの月　大口　鯛二

霞みつゝ白み渡りて畝傍やま
神代おほゆるかしはらのみや　滋野井實麗

鶯のこゑはすれ共かつを木に
かすみてかゝるありあけの月　千葉　胤明

文林

やひらての音は高くも聞ゆれと
　かすみてくらし杜のこのまは　遠山　英一

玉垣のみしめの霜の身にしみて
　春またさむしあかつきのそら　加藤　義清

梅のさく忌垣白みてあか星の
　かけこそかすめ杜のこすゑに　則武　正副

みやつこもまた起出てぬ曉の
　い垣しつかにうくひすのなく　鈴木　小舟

春の夜もあかつきしるく橿原の
　宮居ほの〳〵かすみそむらん　尾崎　宍夫

神垣の梅もかはりてうねひ山
　あかつき月夜かすみそめけり　須川　信行

お節句のうた

橘村生

上、東の家

緋桃の花に彫めし
春の日影の高きかな
壇に飾れる金冠の
雛の君を女王とす
霞紫白酒の
雫の馨屋に滿ちて
耀く光東の
家には若き生命あり
彩なす雲も立めぐり
稚子髷の客のいとはしく
玉の臺に行ならぶ
桃の節句のめでたしや

下、西の家

その名ばかりの雛祭
かなしや春の窓寒く
白き紙子の袖たもと
赤く彩る紅からの

涙にしめる桃の花
隣の姫もうつくしき
姿に消ゆるもの思ひ
仰ぐに胸のせまらずや



まつげ露けき母の顔
澁茶もやがてつきにけり
西日淋しき土壁の
朽ちて冷たき我世かな

梅をよめる歌

下田春興

駒飼わぎへの園に　五百枝さし咲き匂ふ梅
朝風にちらずありこそ　夕風にちらずありこそ
まけ庵の親のしきやの　土鼠はふ宿にはあれど
えだごもり匂はぬ時ゆ　待かてに人も訪より
鶯も尾羽うちふれて　いちはやく初ねを洩し
許多に見らくともしく　そこらくにきかくしよしも
ちり過ぎずありこせぬかも　わかそのゝうめ

鶯をよめる歌

なかつえゆほづゑに登り　はづえよりしづ枝に下り
朝さらす來ゐる鶯　夕さらす來なく鶯
つれなくに古巣を出て　飛かけりきな時よもし
咲きをゝる花をけ散し　終日になけど聞きよし
幣はせむとはくなゆきそ　我宿のはひりのうめに
すみわたりな鳴け



敎の庭

三月一日兼

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

（先生今尙伏蓐し居らるゝに付門弟子の代選に係る）

柳間鶯

天

三河豊橋町 服部萬子

うめか香のにほひあかるゝかは添の
やなきのえたにうくひすのなく

地

東京下谷區下根岸町十 戸木のぶ子

あをやきの糸よりかくるうぐひすは
あやはとりとそいふへかりける

人

雲洲簸川郡稗原村 岩倉すみれ子

あを柳のいともてぬけるしらつゆに
ぬれて寒けしうくひすのこゑ

甲之部

打なひくすかたはかりもあかなくに
やなきのえたにうくひすのなく
東京 田中よし子

うつろひし花のむかしをあをやきに
くりかへしてやうくひすのなく
下野 蘆谷隆子

ふりはへて人もとへかしわかやとの
やなきのうれにうくひすのなく
東京 下田しげ子

よろこひのまゆひらけゆく青やきの
いとによりきてうくひすのなく
東京 河合象子

梅のはなちりしなこりをうくひすの
やなきのいとにくりかへしなく
山形 玉生照子

はるかせのふきのまに／＼青やきの
静岡 清水よし子

いそにみたるゝうくひすのこゑ　東京　川瀬たき子

ふる雪をはなとも見しかうくひすの
　やなきかくれにこゑしきるなり　肥後　徳水旹枝子

春されはくちしやなきにうくひすも
　みとりのいとをうちはへてなく　大隅　宇都涙

あをやきの糸のむつれを此のあさけ
　とくかと見ねてうくひすのなく　清國　稲田兼子

もえいつる柳のいとにうくひすも
　こゝろひかれて今朝はなくらん　石狩　阪本榮子

たちかへりきゝてそゆかむ青やきの
　いとくりかへしうくひすのなく　東京　椎野ぬき子

あめそゝくやぎなの糸のしらつゆを
　たまとめてゝやうくひすのなく

乙之部

はるかせのふきのまにく青やきの
　なひけるかたにうくひすのなく　福岡　秋野きよ子

うくひすの聲もなひきてきこゆなり
　とのものやなきはるかせそふく　埼玉　横田秋子

そよくとはる風わたるかとやなき
　なひくたねまなうくひすのなく　埼玉　横田音羽子

あをやきのはなたの糸をたてにして
　あやおりなせるうくひすのこゑ　熊本　志方圓子

あをやきの糸によりきてうくひすの
　はるのしらへやくりかへすらん　長崎　八尾いへ子

なかき日をやなきの糸のくりかへし
　くりかへしつゝうくひすのなく　名古屋　木下鶴子

青やきの千すちのいとの木の間より
　むすほれとけしうくひすのこゑ　播磨　本多宜子

打なひくやなきのいとをたてにして
　ぬきにおりなすうくひすのこゑ　肥后　田代艶子

まゆこもる門のやなきの木すゑより
　はなになりゆくうくひすのこゑ　肥后　佐々小琴子

もゝちすちたわゝにたるゝ青やきの
　いとにしらふるうくひすのこゑ　東京　山本茂子

朝ほらけかすみわたりてあをやきの
　いとよりもろゝうくひすのこゑ　東京　田中千代子

あをやきのみとりの糸をよりかけて
　春つけかほにうくひすのなく　栃木　青木たま

あをやきの糸にひかれてうくひすの
　けふもこすゑをはなれさるらむ　東京　數島うた子

うくひすの聲もかすみてあをやきの
　千すちのいとをみたしてそなく　相撲　米本きよ子

長閑なるはるのしらへやうたふらん
　やなきかくれにうくひすのなく　東京　横井勝子

歌の庭

うめはちりさくらはまたき此ころな
やなきにつなくうくひすのこゑ　松山　上原のふ子

春さめのはるゝみとりのやなきはら
かすみのみなにうくひすのなく　肥后　佐々有鄰子

うくひすの春なかたらふこゑすなり
けふろやなきのいとにみたれて　淡路　泉久貞子

打けふろやなきのいとのたねくに
みねかくれしてうくひすのなく　東京　牛山竹代子

うくひすは梅にとひよろひまもなし
けふもやなきのいとにひかれて　札幌　澤鈴子

梅かゝなはかせにしめしうくひすの
こゑおりかけしあなやきのいと　東京　永井佐多子

川かせのいとよりかくろあなやきに
こゑさへなひくはるのうくひす　岩手　藤澤みつほ子

のとかにも風になひけろあなやきの
こすゑにかすむうくひすのこゑ　讃岐　横井秀子

青やきにちとせのはるやちきろらむ
かはらぬこゑにきなくうくひす　埼玉　前野ふさ子

みとりこきやなきの糸なたてぬきに
あやなりかくろうくひすのこゑ　横濱　山内たま子

青やきのみとりのいとなくゝりつゝ
こゑおもしろくうくひすのなく　上總　高石とよ子

梅のはなちりそめしよりうくひすの
やなきのいとにきつゝなくらん　東京　山口はる子

はるかにみわけつゝゆけはや那き原
かなたこなたにうくひすのなく　三河　永井さい子

そよと吹く風のやなきのしたり枝の

なびくもゆかしうくひすのこゑ

ふくかせになひきはすれと青なひの
いとものとけきうくひすのこゑ　三河　服部正子

はなちれはやなきの枝にやとしめて
さひしくもなくうくひすのこゑ　三河　本多きさ子

青やきのいとにやつなくなかきひも
りすゑはなれぬうくひすのこゑ　東京　深見愛子

うくひすの聲のあやとも見ゆろかな
羽かせになひくあなやきのいと　熊本　日高かす子

うくひすの聲なたよりて來て見れは
やなぎかくれになきてけろかな　下野　大木善子

いそきつゝ行手のかたのやなきかけ
しはしとゝむろうくひすのこゑ　美濃　吉村せむ子

春といへはまつもゑそむろ青やきの
いとくりかへすうくひすのこゑ　肥後　千知波榴子

春かせのしらへのとけきいとやなき
ふしおもしろきうくひすのこゑ　香川　久保かう子

梅のはなちりしゆくゑなあなやきの
ねたにとふらんうくひすのこゑ　東京　河田いし子

春かせになひくやなきのひまもれて
のとかにきこゆうくひすのこゑ　長野　小林よし子

青やきのいとのみたれもうくひすの
なくれにとくろこゝちこそすれ　肥後　田代喜和子

うくひすのなく聲きけははなよりも
こゝろひかるゝあなやきのいと　秋田　三浦ふさ子

まゆつくろ門のやなきのしらつゆに
ぬれて木つたふひなのうくひす　渡島　喜多村淺子

ふくかせにみたれ〳〵てうくひすの
　こゑにもなひくたまやなきかな　淡島　喜多村吉醉子

軒ちかきやなきのいとにひかれ來て
　なくもやさしきひなのうくひす　東京　積山鐵子

あをやきのみとりの糸をくりかへし
　くりかへしなくうくひすのこゑ　遠江　夏目一枝子

吹く風になひくやなきのたもとより
　もれてきこゆるうくひすのこゑ　札幌　山田嬉美子

少女子かいともてあそふあをやきの
　かけにもなれて來なくうくひす　東京　三好珍子

あをやきの糸よりいとによりかけて
　しらへあはするうくひすのこゑ　越後　高澤れき子

いまはわか門のやなきにうつりけり
　となりにきゝしうくひすのこゑ　名古屋　瀬木せき子

花にきてなくとおもひしうくひすの
　こゑはやなきのこすゑなりけり　東京　田中ちゑ子

もねそめしやなきの糸にうら〳〵と
　こゑもなひきてうくひすのなく　東京　篠田糸子

春かすみたつやかはへのいとやなき
　むすほれとくるうくひすのこゑ　横須賀　上田ゆき子

うらゝなる日かけにけふる青やきの
　いとなくゝりてうくひすのなく　東京　福田芳子

かせふけは浪のあやおるかはそひの
　やなきのかけにうくひすのなく　栃木　川連秋子

ちる梅のはなをやぬくとあをやきの
　いとにむつれてうくひすのなく　東京　山本梓子

青やきのいとのもつれもうくひすの
　くりかへしなくいと柳のうへに　東京　林環子

梅かねにあきやはてけんうくひすの
　なくれにとくるこゝちこそすれ

青やきのいとによられてうくひすの
　ゆるくかたらふけふのゝとけさ　常陸　森敏子

佐保姫のおりなすいとのあをやきを
　つゝりてきなくうくひすのこゑ　相模　米本光江子

青やきのいとあやつりてあさな〳〵
　なくうくひすのこゑのゝとかなり　遠江　夏目松枝子

きくことに又めつらしくうれしきは
　やなきにきなくうくひすのこゑ　東京　高橋津音子

のとかなる春のしらへやいとやなき
　くりかへしなくうくひすのこゑ　伊豫　小田操子

丙之部

のとかなる春は見ねけりうくひすの
　こゑしいろあるあをやきのいと　宮城　杉浦さだ子

ゆくみちのかたへになひく青やきの
　木の間をもるゝうくひすのこゑ　奈良　澤田よし子

春かせもしつまりはてしあをやきの
　かけなつたひてうくひすのなく　東京　片山あや子

春のくろやなきのいとをたてぬきに
　かさやねふらんうくひすのこゑ　東京　片山ふみ子

朝日かげのとけきみれのあをやきに
　めつらしきかなうくひすのこゑ　東京　川村まつ子

あさみとりまたうちはねぬ青やきに
　すたちそめてかうくひすのこゑ　埼玉　前野壽賀子

歌の庭

うくひすのねたうつりして靑やきの
いとのたゑまにくりかへしなく　秋田　古瀬とよ子

いとやなきいと面しろしうくひすの
このまをぬひてなかぬ日そなき　秋田　古瀬りく子

春かせにみたれかはせるあをやきの
たへまにうたふうくひすのこゑ　相州　岩橋花子

うすかすみたなひくきしの靑やきに
のとけさうたふうくひすのこゑ　和歌山　瀨戸榮子

ふくかせにやなきの糸のひま見ねて
くりかへしてもうくひすのなく　福井　佐藤そう子

はる雨にみとりふかむるかはきしの
やなきかはらにうくひすのこゑ　肥後　坂本豊子

打けふるやなきのまゆのひらけつゝ
もろゝもゆかしうくひすのこゑ　札幌　山田靜子

靑やきのいとのゆらきはうくひすの
ねたうつりするはかぜなりけり　但馬　田尻保代子

春かせにけふりそめたるあをやきの
いとくりかへしうくひすのなく　長野　松澤まつ子

淸らけきこゑきこゆれとうくひすの
すかたもわかぬあをやなきかな　京都　坪内りき子

ゆく人のたもとにかゝるあをやきの
いとふりはへてうくひすのなく　伊豫　吉眞貞子

ねくらをはたつねやすらん靑やきの
この間かくれのうくひすのこゑ　東京　內田とく子

ふしなひくやなきの糸をはらひかね
ところをさらすうくひすのなく　東京　吾妻ちか子

のとかにもすゑうちなひく靑やきの
木の間なるらんうくひすのこゑ　東京　戸塚てつ子

うくひすの聲のにほひははるの野の
したりやなきにまつ知られけり　東京　矢野保子

糸やなきみたるゝねたにうくひすの
おるかことくに飛ひかはしけり　東京　平尾あさ子

淺みとりやなきのいとをかたよりに
くりかへしなくうくひすのこゑ　東京　中野昌子

あをやきのみたるゝ糸をぬきとめて
うめのはなかさぬふかうくひす　岩手　藤澤もと子

川かせになひくやなきにやとゝめて
こゑうるはしくうくひすのなく　岩手　藤澤とみ子

うちけふるやなきか原にけふもまた
そこはかとなきうくひすのこゑ　神奈川　森田葉留子

冬かれてかきねにたてるあをやきを
はるになしたるうくひすのこゑ　大阪　桝田益子

ふく風になひくやなきをたてにして
こゑのあやおるはるのうくひす　長野　小泉みつじ子

もね出しやなきのいとをくりかへし
鳴く音ゆかしきうくひすのこゑ　東京　神谷端穗子

梅か枝にあきてやけさはあをやきの
いとに來てなくうくひすのこゑ　東京　山口すま子

おちこちにうくひす來なく聲のして
やなきあやおるはるのかはつら　東京　近藤はな子

あさみとりのとかになひく糸やきに
にしきをおるかうくひすのなく　東京　戸賀崎久子

佐保ひめの糸そめかくるあをやきを
よりあはせてそうくひすのなく　東京　戸賀崎治子

かすみたつ春日長閑けくあをやきの　信州　小澤むめ子
こすゑにうたふうくひすのこゑ

わかかとのはぬりにたてるあを柳の　肥后　坂本道子
いとより／＼にうくひすのなく

うちなひき羽袖にかゝるいとやなき　長崎　小林よし子
はらひかれてやうぐひすのなく

青やきのめもはるのひのゝとけさに　東京　杉田繁子
いとくりかへしうくひすのなく

青やきのいとのしらへときゝつらむ　東京　大木光子
かせにみたるゝうくひすのこゑ

うちけふる賤かかとへのあをやきに　遠江　淸水芳子
うくひすなきてはるかせそふく

あをやきの風にみたれてふしなひく　三河　河合ぬひ子
いとにひかるゝうくひすのこゑ

なく聲のかすむと見れはうくひすの　熊本　吉永すゝ子
木つたふやなきけふりそめけり

やなき原かすみわたれるかけよりも　東京　牛山素子
なくうくひすのこゑそきこゆる

おもひ無くすゝみて行はうれしくも　東京　池田靜子
やなきのひまにうくひすのこゑ

打なひくあをやきのいとくりかへし　肥后　田代綾子
またも來てなくうくひすのこゑ

うちなひくやなきの枝にまれかれて　筑後　鏡山増代子
こそのまゝなるうくひすのこゑ

打なひきはるはきにけりあをやきの　筑後　武田[illegible]子
つゆにぬれそふうくひすのこゑ

青やきになるゝうくひすはなにのみ　山口　村上操子
なひかぬはるのこゝろみすらん

我にはのしたりやなきになひき來て　山口　田村多豆子
なくもうれしきうくひすのこゑ

日にそひていろそめかくるあを柳の　肥後　坂本菊子
いとにひかれてうくひすのなく

うちなひくやなきの糸のふかみとり　肥後　德永下枝子
いろそめかけてうくひすのなく

春かせのわくにかけたるあをやきの　肥後　坂本たけ子
いとくりかへしうくひすのなく

吹く風にみだれみたるゝあをやきの　熊本　坂本みよ子
いとうちとけてうくひすのなく

うら／＼とかすむ川邊のあをやきに　東京　松村あさ子
なくうくひすのこゑのとかなり

破れはしのもとに生たるふるやなき　雲州　岩倉より子
つゝらさせとやうくひすのなく

軒ちかきやなきのゑたにうくひすの　出雲　藤原楢子
いつしか馴れてあさことになく

はるかせものとかにふきてあを柳の　大隅　門前盛子
いとくりかへしうくひすのなく

はる風になびくかと田のあをやきの　大隅　羽津さな子
こすゑのかとにうくひすのなく

あをやきの糸よりかけてはるかすみ　大隅　宇都いすゑ子
たなひくかたにうくひすのなく

のとかなるかすみになひくあを柳の　大隅　古城へい子
いとにもやとるうくひすのこゑ

はる風になひくやなきのいろそへて　東京　椎野[illegible]子
こゑもろともにもるゝうくひす

歌の庭

うめはちりさくらはまたき此ころな　やなきにつなくうくひすのこゑ　松山　上原のふ子

春さめのはるゝみとりのやなきはら　かすみのみたにうくひすのなく　肥后　佐々有鄰子

うくひすの春なかたらふこゑすなり　けふるやなきのいとにみたれて　淡路　泉久頁子

打けふるやなきのいとのたね〳〵に　みねかくれしてうくひすのなく　東京　牛山竹代子

うくひすは梅にとひよるひまもなし　けふもやなきのいとにひかれて　札幌　澤鈴子

梅かゝをはかせにしめしうくひすの　こゑおりかけしあをやきのいと　東京　永井佐多子

川かせのいとよりかくるあをやきに　こゑさへなひくはるのうくひす　岩手　藤澤みつほ子

のとかにも風になひけるあをやきの　こすゑにかすむうくひすのこゑ　讃岐　横井秀子

青やきにちとせのはるやちきるらむ　かはらぬこゑにきなくうくひす　埼玉　前野ふさ子

みとりこきやなきの糸をたてぬきに　あやなりかくるうくひすのこゑ　横濱　山内たま子

青やきのみとりのいとをくゝりつゝ　こゑおもしろくうくひすのなく　上總　高石とよ子

梅のはなちりそめしよりうくひすの　やなきのいとにきつゝなくらん　東京　山口はる子

はるかにみわけつゝゆけはや那き原　かなたこなたにうくひすのなく　三河　永井さい子

そよと吹く風のやなきのしたり枝の　なひくもゆかしうくひすのこゑ　讃岐　鎌田光惠子

ふくかせになひきはすれと青なひの　いとものとけきうくひすのこゑ　三河　服部正子

はなちればやなきの枝にやとしめて　さひしくもなくうぐひすのこゑ　三河　本多きさ子

青やきのいとにやつなくなかきひも　りすゑはなれぬうくひすのこゑ　東京　深見愛子

うくひすの聲のあやとも見ゆるかな　羽かせになひくあをやきのいと　熊本　日高かす子

うくひすの聲をたよりて來て見れは　やなぎかくれになきてけるかな　下野　大木普子

いそきつゝ行手のかたのやなきかけ　しはしとゝむるうくひすのこゑ　美濃　吉村せむ子

春といへはまつもゑそむる青やきの　いとくりかへすうくひすのこゑ　肥後　千知波橋子

春かせのしらへのとけきいとやなき　ふしおもしろきうくひすのこゑ　香川　久保かう子

梅のはなちりしゆくゑをあをやきの　ねたにとふらんうくひすのこゑ　東京　河田いし子

春かせになひくやなきのひまもれて　のとかにきこゆうくひすのこゑ　長野　小林よし子

青やきのいとのみたれもうくひすの　なくねにとくるこゝちこそすれ　肥後　田代喜和子

うくひすのなく聲きけははなよりも　こゝろひかるゝあをやきのいと　秋田　三浦ふさ子

まゆつくる門のやなきのしらつゆに　ぬれて木つたふひなのうくひす　渡島　喜多村淺子

ふくかせにみたれ〳〵てうくひすの こゑにもなひくたまやなきかな　淡島　喜多村吉辭子

軒ちかきやなきのいとにひかれ來て なくもやさしきひなのうくひす　東京　積山鐵子

あをやきのみとりの糸をくりかへし くりかへしなくうくひすのこゑ　遠江　夏目一枝子

吹く風になひくやなきのたもとより もれてきこゆるうくひすのこゑ　札幌　山田嬉美子

少女子かいともてあそふあをやきの かけにもなれて來なくうくひす　東京　三好珍子

あをやきの糸よりいとによりかけて しらへあはするうくひすのこゑ　越後　高澤れき子

いまはわか門のやなきにうつりけり となりにきゝしうくひすのこゑ　名古屋　瀬木せき子

花にきてなくとおもひしうくひすの こゑはやなきのこすゑなりけり　東京　田中ちゑ子

もねそめしやなきの糸にうら〳〵と こゑもなひきてうくひすのなく　東京　篠田糸子

春かすみたつやかはへのいとやなき むすほれとくるうくひすのこゑ　横須賀　上田ゆき子

うらゝなる日かけにけふる青やきの いとをくゝりてうくひすのなく　東京　福田芳子

かせふけは浪のあやおるかはそひの やなきのかけにうくひすのなく　栃木　川連秋子

ちる梅のはなをやぬくとあをやきの いとにむつれてうくひすのなく　東京　山本梓子

青やきのいとのもつれもうくひすの　東京　櫻井りう子

梅かねにあきやはてけんうくひすの なくれにとくるこゝちこそすれ　東京　林環子

青やきのいとによられてうくひすの くりかへしなくいと柳のうへに　常陸　森敏子

佐保姫のおりなすいとのあをやきを ゆるくかたらふけふのゝとけさ　相模　米本光江子

青やきのいとあやつりてあさな〳〵 つゝりてきなくうくひすのこゑ　遠江　夏目松枝子

きくことに又めつらしくうれしきは なくうくひすのこゑのとかなり　東京　高橋津音子

のとかなる春のしらへやいとやなき やなきにきなくうくひすのこゑ　伊豫　小田操子

くりかへしなくうくひすのこゑ

丙之部

のとかなる春は見ねけりうくひすの こゑしいろあるあをやきのいと　宮城　杉浦さだ子

ゆくみちのかたへになひく青やきの 木の間をもるゝうくひすのこゑ　奈良　澤田よし子

春かせもしつまりはてしあをやきの かけなつたひてうくひすのなく　東京　片山あや子

春のくろやなきのいとをたてぬきに かさやぬふらんうくひすのこゑ　東京　片山ふみ子

朝日かげのとけきみれのあをやきに めつらしきかなうくひすのこゑ　東京　川村まつ子

あさみとりまたうちはねぬ青やきに すたちそめてかうくひすのこゑ　埼玉　前野喜賀子

歌の庭

うくひすのねたうつりして靑やきの
いとのたゑまにくりかへしなく　秋田　古瀬とよ子

いとやなきいと面しろしうくひすの
このまたぬひてなかぬ日そなき　秋田　古瀬りく子

春かせにみたれかはせるあをやきの
たへまにうたふうくひすのこゑ　相州　岩橋花子

うすかすみたなひくきしの靑やきに
のとけさうたふうくひすのこゑ　和歌山　瀨戸榮子

ふくかせにやなきの糸のひま見ねて
くりかへしてもうくひすのなく　福井　佐藤そう子

はる雨にみとりふかむるかはきしの
やなきかはらにうくひすのこゑ　肥後　坂本登子

打けふるやなきのまゆのひらけつゝ
もろゝもゆかしうくひすのこゑ　札幌　山田靜子

靑やきのいとのゆらきはうくひすの
ねたうつりするはかぜなりけり　但馬　田尻保代子

春かせにけふりそめたるあをやきの
いとくりかへしうくひすのなく　長野　松澤まつ子

淸らけきこゑきこゆれとうくひすの
すかたもわかねあをやなきかな　京都　坪内りき子

ゆく人のたもとにかゝるあをやきの
いとふりはへてうくひすのなく　伊豫　吉良貞子

ねくらをはたつねやすらん靑やきの
この間かくれのうくひすのこゑ　東京　内田とく子

ふしなひくやなきの糸をはらひかね
ところをさらすうくひすのなく　東京　吾妻ちか子

のとかにもすゑうちなひく靑やきの
木の間なるらんうくひすのこゑ　東京　戸塚てつ子

うくひすの聲のにほひはるの野の
したりやなきにまつ知られけり　東京　矢野保子

糸やなきみたるゝねたにうくひすの
おゑかことくに飛ひかはしけり　東京　平尾あさ子

淺みとりやなきのいとをかたよりに
くりかへしなくうくひすのこゑ　東京　中野昌子

あをやきのみたるゝ糸をぬきとめて
うめのはなかさぬふかうくひす　岩手　藤澤もと子

川かせになひくやなきにやとゝめて
こゑうるはしくうくひすのなく　岩手　藤澤とみ子

うちけふるやなきか原にけふもまた
そこはかとなきうくひすのこゑ　神奈川　森田葉留子

冬かれてかきれにたてるあをやきを
はるになしたるうくひすのこゑ　大阪　桝田益子

ふく風になひくやなきをたてにして
こゑのあやおるはるのうくひす　長野　小泉みつじ子

もね出しやなきのいとをくりかへし
鳴く音ゆかしきうくひすのこゑ　東京　神谷瑞穗子

梅か枝にあきてやけさはあをやきの
いとに來てなくうくひすのこゑ　東京　山口すま子

おちこちにうくひす來なく聲のして
やなきあやおるはるのかはつら　東京　近藤はな子

あさみとりのとかになひく糸やきに
にしきをおるかうくひすのなく　東京　戸賀崎久子

佐保ひめの糸そめかくるあをやきを
よりあはせてそうくひすのなく　東京　戸賀崎治子

かすみたつ春日長閑けくあをやきの こすゑにうたふうくひすのこゑ　信州　小澤むめ子

わかかとのはぬりにたてるあを柳の いとより〳〵にうくひすのなく　肥后　坂本道子

うちなひき羽袖にかゝるいとやなき はらひかれてやうくひすのなく　長崎　小林よし子

青やきのめもはるのひのゝとけさに いとくりかへしうくひすのなく　東京　杉田繁子

青やきのいとのしらへときゝつらむ かせにみたるゝうくひすのこゑ　東京　大木光子

うちけふる賤かかとへのあをやきに うくひすなきてはるかせそふく　遠江　清水芳子

あをやきの風にみたれてふしなひく いとにひかるゝうくひすのこゑ　三河　河合ぬひ子

なく聲のかすむと見れはうくひすの 木つたふやなきけふりそめけり　熊本　吉永すゝ子

やなき原かすみわたれるかけよりも なくうくひすのこゑそきこゆる　東京　牛山素子

おもひ無くすゝみて行はうれしくも やなきのひまにうくひすのこゑ　東京　池田靜子

打なひくあをやきのいとくりかへし またも來てなくうくひすのこゑ　肥后　田代綾子

うちなひくやなきの枝にまれかれて このまゝなるうくひすのこゑ　筑後　鏡山増代子

打なひきはるはきにけりあをやきの つゆにぬれそふうくひすのこゑ　筑後　武田[illegible]子

青やきになるゝうくひすはなにのみ なひかぬはるのこゝろみすらん　山口　村上操子

我にはのしたりやなきになひき來て なくもうれしきうくひすのこゑ　山口　田村多豆子

日にそひていろそめかくるあを柳の いとにひかれてうくひすのなく　肥後　坂本菊子

うちなひくやなきの糸のふかみとり いろそめかけてうくひすのなく　肥後　德永下枝子

春かせのわくにかけたるあをやきの いとくりかへしうくひすのなく　肥後　坂本たけ子

吹く風にみだれみたるゝあをやきの いとうちとけてうくひすのなく　熊本　坂本みよ子

うら〳〵とかすむ川邊のあをやきに なくうくひすのこゑのとかなり　東京　松村あさ子

破れはしのもとに生たるふるやなき つゝらさせとやうくひすのなく　雲州　岩倉より子

軒ちかきやなきの末たにうくひすの いつしか馴れてあさことになく　出雲　藤原綺子

はるかせものとかにふきてあを柳の いとくりかへしうくひすのなく　大隅　門前盛子

はる風になびくかと田のあをやきの こすゑのかとにうくひすのなく　大隅　羽津さな子

あをやきの糸よりかけてはるかすみ たなひくかたにうくひすのなく　大隅　宇都かすゑ子

のとかなるかすみになひくあを柳の いとにもやとるうくひすのこゑ　大隅　古城へい子

はる風になひくやなきのいろそねて こゑもろともにもろゝうくひす　東京　椎野鋭子

鶯の園

打なひくやなきにはるやたちぬらん
うめなきやともうくひすのこゑ　東京　椎野清子

うくひすの氷りしなみたぬきとめて
おもけになひくあをやきのいと　東京　椎野薫子

梅かねにあきてとひゆくうくひすの
こゑむすひけりあをやきのいと　東京　椎野秀子

青やきのいとのひまよりうくひすの
はるのしらへのこゑそきこゆる　東京　安井きやう子

打なひくやなきのいとにひかれきて
なくうくひすのはつねうれしき　東京　安井あや子

孚ならぬやなきのいとにひかれきて
ちよのはしめとうくひすのなく　東京　安井せつ子

ひとも來すはなもにほはぬ我か門の
やなきのうれにうくひすの鳴く　岩代　田中二三子

青やきのいとにひかれてうくひすの
こゑのとかにもくりかへしなく　伊豫　浦尾やすを子

あをやきのいと吹きみたす春かせに
なくうくひすのこゑそきこゆる　出雲　山根久子

梅にのみぬるとも見へすわかかとの
やなきになれてうくひすのなく　兵庫　泉さい子

さし招くやなきをみてもとゝまらぬ
ひとなとゝめてうくひすのなく　淡路　石田さだ子

青やきのいとくりかへすはるかせに*
こゑもなひきてうくひすのなく　東京　北島操子

青やきのいとくりかへしくりかへし
あやおりみたすうくひすのこゑ　東京　北島功子

羽風にはつゆをこほしてうくひすの
たまのこゑぬくあをやきのいと　秋田　三浦さわ子

はるかせものとかにふきてわか門の
なひくやなきにうくひすのなく　大隅　宇都眞子

もねそむる門のやなきにやとしめて
くりかへし鳴くうくひすのこゑ　大隅　大津眞子

あをやきの枝にねくらやさためけん
たねすきこゆるうくひすのこゑ　大隅　宇都常子

とひかはす聲ものとかにうくひすの
あをやきいとをくりかへしつゝ　越後　高澤やす子

うくひすのうたふこゑより青やきの
みとりのいともみたれぬるかな　東京　佐藤深雪子

うつし植ゑし柳のねたにうくひすの
來鳴くときこそたのしかりけれ　下野　民屋信子

みやこより歸るわれをそむかふらし
かとのやなきのうへのうくひす　下野　民屋喜代子

こち風の織れるやなきの糸のうへに
こゑあやなしてうたふうくひす　下野　花方米子

打ちなびく柳のうれにうれしくも
はるのこゝろをうたふうくひす　下野　和賀井芳子

風ゆるくわたるやきのいとのうへに
あやおりみたるうくひすのこゑ　下野　和賀井花子

うくひすのあやなす聲の聞こゆなり
いとふりはへしたま柳の枝に　下野　木宮愛子

はなさかぬ庭のやなきもうくひすの
きなくこゑよりけふりそむらん　下野　葛生定子

我かやとのやなきの糸も亂たるまて
はるたけぬらしきなくうくひす　下野　大木知賀子

梅か香をあきてやにはのあをやきに　うくひすきなくはるのゝとけさ　下野　中村清子

窓ちかくひとりなことをかなつれは　やなきにきなくうくひすのこゑ　下野　佐藤文子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

春日古都を過ぐ

天

東京市牛込區新小川町二ノ四　近藤はな子

梓弓、彌生の空をわたゝけみ、花の色香になかかんとて、あこがれいでし鶯ならねど、かすみたなびく山河をわたり越へ來し旅衣、昨日は吉野の山の花枕、夢にむかしをたどりしが、さて又今日は名にし負ふ、漣よする近江路に、いにし都をしのびつゝ、花の木蔭にたゝずみぬ。

見渡す限り草も木も皆佐保姫の心づくしに、うるはひて、色あたらしう萠えいでつ、都の春をつゝみけん、やさしの櫻の、今は老いて梢高くさきみだれたる風情いはん方なく、胡蝶に似たるちる花の、ちるにやすけきみどりの床の、茶畑に、つゞく菜畑、桑畑、さては芋畑のつぎ〳〵に、里の男の子の、手すさびの鍬のあとさへ、あらはに見えて、いとあはれなりけり花がくれ、心ありげにうたふ鶯の聲の、かすかにきこえて、たゞなんとなくあはれおぼゆる折りしも、散りくる花の一片二片袖にたゆたひて、げにうつたへがほなり。

古へのさま、そゞろに忍びつゝ、花の下蔭さまよへる時、杖もあやうくあゆみくる八十路余りの翁にであひたれば、都の墟はいづこにて候ふよ、とたづねけるに、こゝらなんめり、とほゝゑみて答ふる言の葉のうちにも、花はほろ〳〵とちりぬあはれときめきし滋賀の都は、花をのこし、月をのこして、入日照りそふ高殿の朱丹の色のみきらびやかに、もれ見えて、いかに昔の春は美しく賑ひにけんと、昔に心たどりては、なか〳〵にあはれふかし。所々に靜かに眠る巖の苔の色こそ、花ともろとも、都の名殘とゞめて長へに匂ひ行くらん。心ある人の細き烟を春風にまかせて、いにし都を弔はんとての忍家なるらん、花のひまよりは

の見ゆるぞゆかしき。たが手折けん花の一枝二枝かしこ、こゝにむなしくすてられたる、あはれ心なのわざなるかな。今昔のあはれさもしらず、折しも、かすみにまよふ夕鴉の、東の方に、なきわたるに、ふと心づきてかへり見れば、琵琶の湖、風なぎて、白波たゞずおもむろに入日の榮のうすれつゝ、眞帆くる舟の影淡く、比良の根にのこるみ雲のほのしろうたそがれて、花より洩るゝ三井寺の夕をおくる鐘の音の、昔ひめごとくりかへす波にまかれて消ゆる時、またゝく星の花さきぬ

地

東京赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

さゝ波の志賀の都、いそのかみふりにし名のみ殘りつゝ、百敷の大宮所むなしく春くさのしげりにまかせたる、げにあはれも深けれと、青によし奈良の都よ、しかすがに、千五百とせへし今も猶のこれる所々こそゆかしけれ。春日野の原、とふひの野べ、白妙の袖ふりはふ大宮人はあらねど、わかなつむ童子の見ゆるに、野守がいはもいづくならむと聞かほまし、野花黄鳥の春風を領すとかいふ、からうたも、思はれてえしのびあへす、猿澤の池のほとりもえ出てたる柳の糸は、かのねくたれかみ思ひやらて、あはれなり、春日の宮に詣でては、ふち波のありし盛りの一時もうつり行く世のことわりを思ひ、三笠の山あるは手向山など、いづれ昔のあとならぬはなきを、語り出る人もなし、はたとふべきかたもわかねば、春日の峯のかすみこめたる、さては人なれ顔なるさをしかの、若草のつまにむつるゝさまなど、みやりて、ならのはの、名におふみやのふること、心のうちにくり返しつゝ、いとゞ思ひにたえかねてなむ。

春日やまゝつも千とせのよはひへて
　あはれむかしに生ひかはりけむ

人

長崎市新町十三番地　八尾いへ子

東の京にまうのぼる道すがら、そこかしこ名所古跡をも尋ねばやと、うら〳〵なびく霞と共に思ひ立ち、今日はさゝなみの滋賀の都にきぬ。天命開

別天皇の大宮ところを定めおはしましけん古へは此わたりの如何に時めき榮えつらん、今は人たゞなる里と荒れはてゝ、げに飛鳥川變り行く世の様ぞといとあはれ深し、露かくれになく鳥の音も心ありげにきこえ、いろそへ香さへゆかしき花は今も變らず匂へども、大宮人の立ちよりし木の下かげはそこともわかず、舟うけて絲竹の遊せし世のなごりにやあらん、たゞひはの海の浪ばかり昔ながらの音をきかせたり、風にあびける柳の糸も昔のことや繰返すらんと思はれて見る物きくもの何れも昔しのぶの種ならぬはなし。人麿大人の大宮はこゝときけどもとうたひましけん、其御跡もいづれこのわたりにやあらん、いともかしこき彼帝の此地に御代をしろしめさせ給ひて、學のやをおこし、或は諸の禮の式を正し給ひ、はた漏刻を置き、鐘鼓をうちては時を知らしめ、筥を設けて訴への書を入れしめ給ひ、何くれの道を正して、おほみたからの心を慰めさせ給ひしかば中興の御祖とたゞへて萬代迄も仰ぎ奉るになん。そも幾度か帝都をうつさせ給へれば、平安の都を開かせ給ふ迄は幾ら計りの宮地をうつさせ玉ひけん、今とみにはおよびもをりおふせず、今上の大君に至りて平安の都より武藏の國寶田の千代田にうつらせ玉ひ、宮居を定めおはしまして天下の政を大御親らしろしめし、學の道軍の術は更にもいはず、萬の道を開き萬の業を、さめとゝのへたまふをもて皇國の光りは遠く海の外に輝き、外國人に仰ぎ慕はるべうありにけり、されば古の都は荒たれど、かく榮え行く大御代にあひ奉る民草の幸はたとへんに物もあらじかしなど、今昔の事どもおもひつゞけて萱の根の長き春日の今日もくれはてぬ。

こは大津の旅宿りのつれのすさびなり。

(以下原稿投着順)

大阪　桝田益子

心ある人に見せばやと、詠めし昔の春はいざ知らず。一刻千金にもまさりつべき、花の香に霞みはてたる、あはれさよ。さゞ波清き、志賀の大和田、其流絶せぬ淀川を五帯になせる浪華青灣の春色、よそに見過すべしやはとて、長閑き空の光に催されて、そこ

はかとなく徜徉しぬ。げに、兩岸の櫻は、白雲なして、さと、ふき來る風のまに〳〵、堤に汀に散りかひ。向つ尾の黃金白銀の寶を、造りなす造幣局は、咲きをゝる雲より上に、そびゑて空にうそぶき。大神の淸き宮居は、こと木もなく、枝もとをゝに、咲亂れたる花の香の芳ばしさよ。畑の鈴菜は、見渡す限り、黃金の莚しきなして、そことなく、薰る匂ひを求めて、戲むるゝ蝴蝶のゑまひ、いと心地よげなり。やがて高津の宮に詣づるに、廣らかなる瑞垣のゆ庭、いとおごそかに尊し。神さびて、れふれるが如き老木の松に、色はゑて、嵐につれなく白雲なせる、花の美はしさよ。奈良の都の。八重ならねど、今日九重の思ひなして、うたゝ、そのかみの偲ばれてなん。つら〳〵思ふに、そも此大神や、かけまくもかしこかれど、石上(イソノカミ)ふるき古へ、天の下、四方の民草の、身を溫むるに衣なく、饑を凌がん由もなく、いみじう困じにたれば、遠く思ひ量らせ給ひて、即、そが、貢をゆるさせ給ひ。かしこくも、雲の上、玉のうてなにも、宮居は荒れ、御げしは損れぬとも、つくろはせ給はずして、いつくま給はし、大御惠みのふゆに、やう〳〵蒼生草は、波速江の渚の声とつのぐみ、空飛ぶ鳥も御代泰平を謳ひ、炊煙豐かに立昇るを、見そなはせ給ひし故事さへ、すゞろに偲びまつるも、穴かしこ、其三歲の恨み、今將何にか見まつるべき、みあらかは、先づ年の大御祭りに、新らしく花やかに、まばゆくみがき、いつきしつらはせ給ひ。遠く見さげ給はし、遠望臺、はた、御社にもおとらせ給はず、玉しき滿て、淸らに調ぜさせ給ひ。舊跡はた、さゞ波の歎きなきにしもあられど、こも、また、大御祭りの砌り、公より市の有志を、募らせ給ひて、瑞の玉垣いと廣う、打めぐらしいみじう、莊嚴なる豐碑をなん立させ給ふ。大御代の、みいづの程こそは、仰ぎても仰ぎてもいと賢けれ。今年將博覽會々敷地となりて、邊りは更なり、市内は賑びに賑ひて、浪花田舍も、言問はん都鳥の、東につぎての地となりぬるは、まき柱、ふとしき立て、天の下、治しめしければ、其上を、誰かは今に、あふぎて。偲びまつらざらめや。

そのかみの今はた更らに偲ばれて
あふくも高し大宮ところ

東京　永井佐多子

ふる春雨に、遠山の霽村消ゑて、佐保姬が霞の衣、うすうたなびき初めたる、げにのどかなり。跌の邊に、二葉ながらもゑ出し若草の上を、いとやはらかう吹き渡る春風の、迎ふるがまゝに、たのしき歌なんど。くちづさみつゝ、いやたどりにたどり行く。いと高う淸げなる鶯の音に、ふとかたへを、打ち見やれば、あればてし、古井のもとに、誰かう爲置きけん、梅柳ほどようこきまぜたる小枝つたひて、親子にもやあらん二三羽の鳥いとのどかにむれあそぶなるこそ面白けれ。今や幾かへりの星霜をへて、人は去りゆき、見し古のおもかげは、露とゞめずなりぬる、此古都にも昔ながらの春の風情。友となれ來る鶯は、なれし昔のそれなめりやと、いとなつかしう覺ゑければ。

心あらはなく鶯よつけてまし
いにし昔の花のみやこを

肥後　佐々有鄰子

今年の今日は難波津の梅もやう〳〵盛となりぬれば。長閑なる日影にうかれて近隣の姬とれたち二人三人そゝのかし霞とゝもに立いでぬ。むかし仁德天皇の御代はじめに、御兄弟の皇子の天下の御政事をとにかく讓りあひたまひし御事は。當時の御史乘につまひらかなれば。高津の宮蹟はこゝならん。木の花のさきしあたりかしこならんと。逍遙して。民のかまどのにぎはひは。高殿に

のぼりたまひしその都のころよりも。はるかに、ぎはひぬらし。かゝる大御代にあひて。大小の煙筒すか所に立ならび。濱には。漁船。帆船かずしらずつなぎて浪のうれ〳〵。いとゞおもしろく立さりがたくおもふなりから。かたへの菜のとれたちが。難波津淺香山のをしへ歌も此の古都のしのぶ艸。しのぶのたれとなりぬとて。今を盛の梅の花かげに立もとほり。都をしたふことのはをくりかへしたまふものから。うちすてがたくて。道のつみぐさとともに。かきしるしぬ

伊豫　浦尾やすを

京都なる、伯母許より、ことしは、大阪にて、博覧會を、開かるる由なれば、ともに、見物に行かばやと、思ふなるを、ちと早く立ちてこよとの、便りこせたれば、さなきだに、見まほしき博覧會の事にしあれば、よろこびいさみて、折柄に大阪今宮なる知べ來あはせたれば、連れもよしと、二月廿五日といふに立出でつ。やがて大阪に着きぬれば、かの知るべ許に、やどりつるにゝこの家に女學校へ通へるはらから二人あり、めづらしきまろうど來られしものかな、大阪見物の案内しまゐらせん、いざ〳〵と、勧められしうれしさ、いそがぬ春の旅にしあれば、ひかるゝまゝに、をちこちの名所舊跡どもをさぐりつゝ、ゆき〳〵て、下高津村を過ぎりしものから、仁徳の帝を、祭れると聞ける、高津の宮に詣でぬ、この宮居は、さほど大きやかなる造營にはあらざるに、何となく氣高く仰がるゝは、ありし昔を思へばなめり。帝の世をしろしめして、四年二月六日といふに、群臣に詔して朕高き屋に登りて、をちこちを望みしにっ　立ち登るけむり、この浪華津に絶ねてなし　こは、民草の家皆貧しうして、炊がんもかてのなきしるしなめり、都の内だにかゝればひなは、いやましさう〳〵しからん。とありしを、三月の廿一日更に詔ありて、三と世の間の課役を、ゆるさせたまひ、御みづからの御調度其外御つゞまやかにせさせたまひきとは、いとも長こき大御心なりき。その後願はしくけぶり立つを、みそなはせてやれし宮居をば初めて修めさせたまひけん、高きみ德は、いまもなほ、かたりつたへて、仰がぬものとてもなし。さるを、うつり變るは、世の常とはいへ、西の京、寧樂の都、などは、いさゝかは、都の跡らしきを、此浪華のみ、つゆもさ見ねぬは、なげかはしからずや。商人等のちまたの塵に、うもれ果てぬる事のうたてさよ。この宮を、をろがむのみぞ、昔をしのぶよすがなるらん、いと口惜しきかな。顧みてあふぎ見れば、をちこちに、立ちのぼる烟りは幾百の煙の柱となりて、いさましく、みそらをぞ、覆ふ、船の出入、車、馬、の往來はた乂人の立ちつどふなど、もしこのさまを、かの帝の、見そなはせたまふ事の、おはしまさば、如何ばかりか喜ばせたまふらんを、今はそのよしなきぞうらめしきや。廣前に、きのふ、けふ、八重櫻の綻びそめしを見て、かのさゞ波やの、古歌をも、思ひ出され、いよゝいにしへのしのばれて、立さりがたかりしも、かくていつまでか、あらるべき。あまたゝび、ぬかづきて、やどにかへりつ、かくなんものにかいつけしは、をこがましきや。

東京　佐藤深雪子

藤原氏の中葉より、簡古質撲の風もやうやく一變して、艶麗優美となり、安逸となり、惰弱となり、花の朝には歌舞の宴を開き、月の夕には管絃の莚を催ふして、驕奢華美の風いと盛になりければ、臺閣泉樹の巧を競ふも多く、河原左大臣の宇治、及嵯峨六條の別第、冬嗣の閑院、良房の堀河、基經の枇杷、兼家の東三條、道長の上東門院の第なんど、精粹を極め、光彩陸離として眩く、艶麗優美、花に匂ふ朧月の如き源氏物語、高潔薔薇の花の如き清女の筆の匂、優雅絢爛たる平安文學の精華燦として輝き、馥郁として芳香を千載に傳

ふ、あはれ目出度治世なりけらしと思ひきや、藤の裏葉の雲の上に、蔚し、物驕慢不遜萬機を攝行し、皇太子として類才拔群、朝野屬望せし恒貞親王を傾け、金枝玉葉の小野の深雪に埋れ、業平をしてわすれてはとなけかしめ、遂に基經の廢立となり、未曾有の例を殘し、此世は我世とそ思ふ望月のとさけぶに至り、彝倫全く頽敗し、道義地を拂ひ、紀綱弛廢し、道眞の誠忠、後三條の革政も中途に破れ、賦斂益起らむとは誰か其僣上を憤らざらむや、されはこそあれ、百花爛たる平安朝の花の曙も、千紫萬紅いつしか地に委して霜凋落葉せさるを得んや、其末葉に至りて兄弟爭ひ、父子和せず、遂に骨肉を攻め、血緣を討ち、主從相敵し、叔姪相鬪ふの保元平治の修羅場を現ぜし結果、又も綺羅充滿し、堂上花の如く、七珍萬寶鉠けたることなき華美の風を再現しぬ、されど驕奢久しからず、平民の榮花の夢も暫しにて、やがて浮世の涙に堪へかねて、取つく島なき壇の浦、傾く運命破る味方、いつしか鎌倉山の白旗は大空に飜々たり、獅子身中の虫や、北條の世となり、菊水の清流涸れて、足利濁流世にみなぎり、邯鄲の夢に似たる織田豊臣の後を嗣きて、德川の流久しく淸けれど、花咲く春無き京都の樣と慷慨せし人やある、嵐山の櫻花に狂水を傾け、鴨川の流は汲めども萬上の垂拱して、命を聞く悲に落し入れし、執政下臣の暴慢を憤る志士、三條橋上に泣し人あるのみ、嗚呼思ひ來れば古今變遷胸間に浮び、金枝玉葉の御身を初め、一天萬乘の至尊さへ、不臣のやからの爲め、袖絞り給ひし形見は花の都の春の曙、霞も包むによしなく、此に遊ぶ人をして斷腸の思ひ忍ぶ能はざらしむ。

最良の書籍は永久不滅なり　ミルトン



○彰仁親王殿下の御薨去

小松宮彰仁親王殿下には過般來御腦症に罹らせられ橋場の御別邸に御療養中の處藥石効なく去十八日午前三時と申すに終に御薨去あらせられたり殿下は故伏見宮一品邦家親王第八の御子にして弘化三年正月十六日を以て御誕生あらせられ弘化五年正月仁和寺相續被仰付嘉永元年四月五日仁孝天皇の御養子と爲り安政五年三月名を嘉彰と賜ひ親王の宣下あり同年九月仁和寺に入て得度あらせられ

御法名を純仁と稱せらる慶應三年十二月九日復飾仰出され同日二品に叙し隨身の兵仗を賜ひ議定職仰付られ御名を嘉彰と復せらる明治元年正月三日軍務總裁に轉じ爾後外國事務總裁海陸軍務總督軍防事務局督兵部卿軍務知官事の諸官職を經て明治二年七月更に兵部卿に任ぜらる其間征討大將軍として錦旗節刀を賜ひ伏見鳥羽に御出征會津征討には越後に總督として出征あらせられ功を以て永世賞典祿千五百石を賜ふ茲年東伏見宮と稱せらる明治三年より五年に至る間英國に留學あらせられ六年十一月陸軍少尉に任ぜらる七年佐賀の役に征討都督を命ぜられ役後陸軍少將に任ぜらる十年西南の役には新選旅團司令長官として出征あり功に依て詔書並に金幣を賜ひ十三年三月陸軍中將に任ぜられ十五年大勳位に陞叙し菊花大綬章を賜ひ同十二月東伏見宮を改めて小松宮と稱し御名を彰仁と改めらる二十三年六月七日陸軍大將に進級あらせられ其間或は近衛都督として或は近衛師團長として常に禁衛の貔貅を統率あらせられ二十八年日清戰役中熾仁親王の薨ぜらるゝに及んで其後を襲で參謀總長の職に補せられ同年四月大總督府を率ゐて遼東の地に前進し給ふ八月廿七八年戰役の功に依て菊花章頸飾及び功二級金鵄勳章を賜ひ三十一年一月二十日元帥府に列せられ特に元帥の稱號を賜ひ三十五年大不列顛國皇帝皇后兩陛下戴冠式參列の爲め四月十九日御渡歐の途につかせられ伊佛西英獨露の各國帝室及び大統領を御訪問ありて八月中御歸朝遊ばされ各國より數多の勳章を御受領相成りたるが殿下には又赤十字社事業總裁として御盡瘁遊ばされ去年十月二十五年紀念祝典を擧げられ玉ひしことは近く人の知るところにして其他殖産興業に御心をよせ玉ひ文に武に御熟達あら

せられ國家の重鎭たりしに今や則ち溘焉御薨去あらせらる悼い哉

○貴婦人園遊會　下田歌子女史の薫陶を受けたる貴夫人、令孃等が帝國婦人協會附屬學校の維持費を募集する爲め發起したる園遊會は三月七八兩日築地水交社に於て開催することゝなりし由當日餘興其他の設備は男子の手を籍らず總て發起人なる貴夫人、令孃の手に依り擧行せらるゝものにて演奏の番組は左の如し尚當日來會者には茶菓を供し特別寄附の向へは發起人の書畫製作品を頒布す

第一日

▲樂隊
▲謠曲
　小鼓　田中信子
　謠　櫻ハツ子
▲山田箏　本多和子
　三曲　櫻ハツ子　中隈フジ子
　合奏　酒井ミツ子　福岡チセ子

第二日

▲樂隊
▲謠曲
　小鼓　田中信子
　謠　櫻ハツ子
▲山田箏　櫻ハツ子　本多和子
　三曲　酒井ミツ子　中隈富士子
　合奏　福田千代子

(一日のつゞき)

▲世々の面かげ(活人畫)
　上古　橘妙縵　高崎恒子
　藤氏隆盛時代　清少納言　近衛貞子
▲ピヤノ　山尾龜子　千住千賀子
▲世々の面かげ
　鎌倉時代　松下禪尼　石橋トミ子　和田節子　坂寄ミツ子
　南北朝時代　楠公夫人　嘉納須磨子
▲謠曲
　謠　勘解由小路福子　田中信子
　仕舞　勘解由小路康子　志茂貞子
▲世々の面かげ
　戰國時代　奥村助右衛門妻　柳谷末子
　德川時代　秋色女　柳瀬光子
▲生田箏　伊集院シゲ子　大内田ヨシ子　長田仲子
▲舞孔明　稲葉春子　石井トキ子　中村トキ子　柳谷末子　高山トシ子　本尾章子　坂寄ミツ子　富永ツキ子　魚住芳子　水村濱子　平佐フミ子　南部トシ子　古賀玉子　三善千代子　山尾龜子　佐々木リキ子

(二日のつゞき)

▲世々の面かげ
　上古　大葉子　伊集院シゲ子
　藤氏隆盛時代　赤染右衛門　田村貞子　大内田ヨシ子
▲生田箏
　舞　大内田ヨシ子　菅川英子　伊集院シゲ子　長田仲子
▲世々の面かげ
　鎌倉時代　尼將軍　佐藤タミ子
　南北朝時代　伊賀局　有馬イヨ子　由利糸子
▲謠曲
　謠　勘解由小路福子　田中信子
　仕舞　勘解由小路康子　志越貞子
▲ピヤノ　山尾龜子　千住千賀子
▲世々の面かげ
　戰國時代　山内一豐夫人　永井貞子
　德川時代　春日局　長田仲子
▲舞孔明

○女子師範學校學則の改正　東京府師範學校學則は女子師範學校設立以後に制定せしものにして女子師範學校は同學則を準用し來りしが今回府知事は同學則を改正し女子師範學校學則を特に制定し府令第十六號同第十七號を以て發布したり其改正の重なるものは從來の學則には生徒の募集及豫備科の生徒に關する規程等の設けなく是等に關するものは悉く府令を以て定めありたれば不便尠からざりしが故に改正學則には總て是等のものを網羅したり而して豫備科生徒は從來修業年限二ヶ年にして月額三圓の學費を給與して散宿せしめ卒業の上は本科に入學を望まざるものは小學校尋常科教員の免許證を交付するの規程なりしが改正學則は修業年限を一ヶ年として悉く寄宿せしむることとなし食費と雜費とを給し本科生と異なる點は唯だ被服を給せざるのみ而して卒業の上は必ず本科に無試驗入學せしむることゝし豫備科は本科に入るの楷梯とし今後は本科生を募集せず必ず豫備科より入學することゝしたり又從來高等小學卒業者は本科に入らんとするには一二ヶ年他に於て勉學せざれば入學するを得ざるが普通なりしを以て豫備科の制を前陳の如く改正し其勉學の便宜を得せしめたるものなり

○憫はれなる女學生　横濱市平沼町に設立の高等女學校に通ふ高等科三年級泉もと(十九)は昨年八九月頃まで父彥七が故鄉阿波の德島にて陶器商を營み居りしが續く失敗に國許にて營業のなり兼ねるよりおもとの姉某が牧野須平といふガイドを夫に持ち横濱市松影町二丁目に居るを便り横濱に行かば何か營業の道も付かんと親子四人にて昨年九月中同地に來り須平を尋ねて生活の道を問ひたれど直に食を得べき策なければ詮方なく同年十月ご

る平沼町に小やかなる家を借受彦七の女房はお針仕事をし娘おもとを高等學校に遣り弟を戸部學校(高等二年生)に入れて貧しき間にも樂しき家庭を送り居りし處本年一月二日に至り貧の爲めに餘り苛酷に身を勞ひしものか女房は病氣に罹りて死したるも未だ彦七は糊口の道さへ付かざる爲め再び須平方へ相談に赴きたれど自分もガイドを止め內職をして辛くも其の日を暮せる有樣にて人の世話處でなければ彦七は一月十五日おもとを殘し弟を伴れて德島に歸りたるが、おもとは如何かして早く學校を卒業し糊口の道を得て親や弟を安樂に暮させんと考へ只管學業を勵めど奈何せん學資の薄きに困せる上に姉夫婦は狀袋を貼りて漸く口を糊するといふ慘況殊に姉は乳香兒もあり炊事もせねばならぬを見るに忍び兼ね每日午後三時學校より歸るや否包みを投げ捨て夕食までは五百枚を貼り尙は午前二時まで千五百枚を貼るを日課の如くに爲し居りしが去る十三日例の通り學校に行き教場に入りし處非常の寒氣に何とも云へぬ心地となり席を起たんとする刹那打倒れしかば教師は驚き直に規定の病室に入れ醫師を招き治療を加へたる後受持甲斐女教師が病狀を問ひしにおもとは家政の模樣を逐一話したるより座ろに憫れを催し兩人にて淚を溢し居る處へ校長新原俊秀氏が來りて驚き他の教師を遣りて其の事情を問合はせたるに前記の事を話したれば校長も不憫がり各生徒、教師と相談の末卒業までの費用を醵金する事にしたりといふが病症は精神衰弱なりといふ

○少年の友愛　麻布小學校高等科三年級眞田幸吉(十五)といへるは去十一日紀元節に上野へ散歩に出かけての歸途偶々日本橋通りにて同校尋常三學年生佐藤四郞(十)とて商品陳列館長佐藤顯理氏の

第四子其他數名の少年に出逢ひ樣子を聞けば皆な親の許も受けず、上野に出かけての歸り途、腹は減る足は疲れる、日は暮れかゝるといふ始末に途方に暮れ居る所といふので眞田は親切に之を慰め最も年下なる四郎を負ひて佐藤氏の自宅迄送り屆けたるより佐藤氏は昨早朝同校へ出頭して校長木村金之助氏に面會し右眞田が友愛の情溢るゝ許なるは實に學生の模範ともなるべき美事なればとて先年氏が佛國より持歸りたる物品を校長の手を經て贈與せりといふ

○婦人の勤儉貯蓄　熊本縣玉名郡水村佐々木シュンは二十五年十一月より同村内の婦人等と計り婦人貯蓄組合と云ふを組織し組長には同村の醫師田尻浩氏の夫人チツ子を推選して貯金の出納を依託したるが昨年十月迄滿十ヶ年間の貯蓄總金額は五百圓にして頗る好成績なるより更らに同組合を繼續することゝなせし由感心のとなり

○稀有の節婦（七十九歳の高齢）　人情日にすたれ道義月に衰ふる澆季の世に於て實にも嬉しき美談とこそ思へば樂しき筆を運ばせて書き記しぬるは長野縣下伊那郡龍岡村小林安太郎祖母みのとて七十有九歳の老母の身上なり、同女は十九歳の時相當の資産家なりし現戸主の祖父熊吉に嫁し友白髮を誓ひたれども不幸にして熊吉は事業に失敗したる揚句に家を捨て妻子を棄てゝ逃亡したれば實家の代田方にては屢々他へ再縁を勸むれども節操堅きおみのは如何で其言に隨ふべき彌々堅く心を定め一點うしろ暗き行爲もなく晝夜をわかず骨身を碎きて只一人娘のさい子をもり育つる程に近隣の者はいふも更なり傳へきく者何れも感涙にむせばざる者なかりしと云ふ、さる程に夫熊吉は如何にしてか身に一錢の蓄へもなく着のみ着の儘にて歸村した

るが日々なすべき正業もなく暮すにぞ女一つの細腕もて夫と子供の世話までも六ケ敷けれども少しも顔に顯さず天地廣しといへども家はこの家、良人とするはこの熊吉ばかりと思へば少しも苦心をみせず夫を實行會に加盟せしめて眞理正道の講義を聞かしむる事前後數回に及んでは如何に無頼なる熊吉も大に前非を悔い改めそれよりは夫婦共稼ぎとなり干温紼製造に從事し次第に家計も裕かなりしより留吉てふ婿養子を迎へ三男一女を擧げたるが明治八年にはさい子二十一年には婿留吉二十四年には夫熊吉と相續いで黄泉の人となり十九年には孫安太郎は徴されて近衛師團に入營し末孫玉吉は廿六年に高崎歩兵第十五聯隊に入隊し共に軍國に盡したるなど其間のおみのゝ苦心一方ならざりしと吁この節操堅き老母は今や矍鑠として只管風流韻事に餘生を送り居れりと實に頼母しき老母ならずや

○鶯の話

春も稍景色とゝなふ頃となりて、梅の消息もちらほら聞ゆれば、春告鳥の名を負へる鶯の話を紹介せん△茲に小石川區小日向臺町三丁目六十五番地に住せらるゝ、子爵奥山直紹の君（越後椎谷の舊藩主）は、年頃鶯を飼養するに經驗を積める由なれば、其談話を聞くに△今より十五六年前、まだ少年の折、同族高木子爵の嚴父（河内丹南の舊藩主）が鶯を飼ひ置けるを見て、數寄心起り、自分も出入の飼鳥商より鶯の雛を買ひ入れ、高木方の鶯を借り受け附子となしたるが、抑もの始めなり△一昨年まで『明保乃』と呼びし名鳥ありしが、茨城縣人の某に讓り渡し、目下秘藏せるは、『礫の里』と稱して『明保乃』の子なり△鶯の種類は

水戸地方より出るを地廻りと唱へ、從來東京に入込む者多かりしが、近來小田原箱根等の各地より名鳥を出せり△鶯を飼ふには籠桶の取扱ひの如き頗る面倒にて、夜は燈火の暖氣を籠桶に受け、鶯をして春の氣節と思はしむる仕掛なり△餌は煎糠、玄米、ハヤ(乾枯びし雜魚の一種)青菜の四種を摺り交せて與ふれども、其分量に種々の心得方あり△暑寒共に水浴せしめて清潔を旨とし、糞などは始終取除くべし△病に罹りしときは、姿勢常と異りて圓く、羽毛逆立ち、一見して知れるものなれば、海老蔓の虫を細末に刻み、餌猪口の中へ入れて與ふを好しとす△本年は氣候不順の爲めに、雛の生育甚だ宜しからず、巣の中の卵も孵化せずに腐敗せしもの多きを以て、相場は頗る不廉ならん△さて鶯の啼合會と云へるもの、時々市中に開かるゝが、出品者は何れも天狗揃ひの事とて、其優劣を定むるに、中々困難なり△鳥飼商などは、華客の機嫌を損ねては營業に妨げあるより、優等の鳥を出しながら、態と下手に啼くが常にて、啼合會と云はんよりは、持主の鼻競べ會といふこそ適當と思はるゝなり△一昨年の春も、根岸の鶯春亭に於て都下の名鳥を會せしが、其時正の一に撰れし神田丸太河岸齋藤氏の『九重』よりは、湯島仲坂下の鳥商今村の出品『名弘』の方遙かに優りたれども『九重』より下位に据えられたり△三井家の愛鳥『東鑑』は、吉原仲町の引手茶屋桐佐の主人(元は相撲の小武藏)より讓られたるものにて、頗る評判の鶯なり△兎に角啼合會などは、右の如き事情にて、眞の優劣を品評すること能はず、依怙偏頗の番附を拵えて、天狗連の鼻を高めるのみなれば、僕は出席しても、鳥籠は持參せし事無しと語られたり

寄贈新刊書目

愛國婦人	第廿三號	愛國婦人社
六合雜誌	第二百六十六號	ゆにてりあん弘道會
をんな	第三卷第二號	大日本女學會
成功	第二號	成功雜誌社
武藏野	第二號	東洋文學會
中央公論	第二號	反省社
慶應義塾學報	第六一號	慶應義塾
經濟新報	第一八號	經濟新報社
女子新聞	第一六號	女子新聞社
感化院月報	第一七號	感化院
圖書月報	第六號	書籍商組合事務所
國學院雜誌	第二號	國學院
法令審議會錄	第二號	法令審議會
文庫	第五號	內外出版協會
佛教文藝	第二號	佛教社
家庭の栞	第一編	博文館
太陽新聞	第一二號	太陽新聞社
婦女新聞	第百四五號	婦女新聞社
近畿評論	第五〇號	近畿評論社
愛國婦人	第二四號	愛國婦人發行所

四月以後の兼題廣告

歌

四月
- 一日　行路花
- 十五日　歸雁

五月
- 一日　早苗多
- 十五日　夕蛙

六月
- 一日　雨後蟬
- 十五日　池蓮

文

- 落花を觀て感を記す
- 亡き友の墓に詣づ
- 池亭蛙を聽く
- 故鄉を出づるの記
- 初夏野外に遊ぶ
- 結婚を祝する文

注意

投稿〆切期限は總て發兌日の十日前則一日分は前月の二十日、十五日分は其月五日とす。依りて其期限內に到着すべき日取りの順序を數へて寄稿せらるべし。

天地人當撰者には文は壹圓(天)五拾錢(地)三拾錢(人)歌は各其半數の計算を以て孰れも代價相當の書籍を呈す。

明治三十六年三月

女鑑編輯局

目次

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿著　飯沼珠城評

山崎合戰

菊版

洋装美本
定價金參拾九錢
郵税金六錢

○○○時事新報　日報社の澁柿園主人が前年東京日々新聞に連載したる舊稿を此度校訂して之に美はしき口繪を附し出版したる多趣味の小説なり題號に示す如く材を光秀が山崎合戰に取り高松城より大德寺に至る間の一部の歴史を叙したるものなり歴史小説につき主人既に特得の名あり今故らに贅評を要せず

○○○東京日々新聞　我社塚原澁柿園主人の舊作にして山崎合戰に於ける前後の事實を大德寺燒香塲迄序を追ふて綴れる面白き歴史小説なり篇中特に秀吉の性格を描寫して餘蘊無きが如き蓋し主人の手腕を見るべき所ならんか

○○○報知新聞　時代小説に特趣の手腕を有する澁柿園が、自家獨擅の山崎合戰を叙したるもの筆を秀吉の高松の城攻に起し信長の訃を聽て毛利と媾和し疾風の如く洛へ上るより信長の舊臣を會して光秀を討じ隱然と天下に雄顧する猿面冠者が縱横の才略を寫して宛然目前に睹るが如し　いかなる名辯の講釋師と雖もかくばかりの興を覺えさらん文章と會話が澁柿一流の時代張のものにて思はず卒讀せしむる妙あり

○○○二六新聞　現今小説家中唯一の歴史小説家と目さるゝ著者が山崎合戰を詳記したる技倆を見れば感服すべき所少からず

○○○日出國新聞　右は塚原澁柿園主人の筆に成り東京日々新聞紙上連載せしもの例に據りて主人特得の語調に據り猿面郎が百難の間に處して悠揚迫らざるの狀を描出する處壯快云はん方なく人をして再讀三讀尚ほ其新なるを覺しむ

發行所　東京築地二丁目　國光社

(二)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

細川十州先生序文　三輪田眞佐子著

女子の本分

第十三版

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵税金六錢

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋二六九三番　株式會社　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●再版出來●

水主天姥著

千古寃魂 石田三成及其時代之形勢

一部定價金卅錢
郵稅四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶもその寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も法官の刑を斷ずるが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間、文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ヶ原を過ぎて、蔚欝たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、眦裂け、腸斷たざれば已まざるべし、蓋し近來の快著なり。

●再版出來●

發行所

東京築地二丁目

株式會社 國光社

本純良紙卷煙草

新製

日乃出



○此の卷煙草は去廿七八年の戰役に我軍隊御用として製造を命ぜられ「日乃出」と御命名を賜り雲山萬里遠征將士の勞苦を慰めつゝ大勝利を得たる紀念品にして當時各師團將士諸賢より幾多の賞狀を贈られし最も高評ある卷煙草なり

○「日乃出」の原料は弊商會が多年貯藏せる葉煙草の中より特に精撰調合せしものなれば飲口軟和にして天然の香味を有し卷方包裝總て他の企て及ばざる高尙優美なる卷煙草なり

愛國の諸彥何卒御試しの上益御愛煙之程偏に願上升

天狗煙草製造元

岩谷商會

女鑑
明治三十六年三月一日發行
毎月二回一日十五日發行
第拾參年第五號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

（東京築地株式會社國光社印刷部印刷）